Osaka University Knowledge Archive

Title	学歴社会のローカル・トラック ： 地方からの大学進学
Author(s)	吉川, 徹
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/71129
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

SEKAISHISO SEMINAR

学歴社会のローカル・トラック

地方からの大学進学

吉川　徹

世界思想社

SEKAISHISO SEMINAR

学歴社会のローカル・トラック

地方からの大学進学

吉川　徹

世界思想社

SEKAISHISO SEMINAR

学歴社会のローカル・トラック

地方からの大学進学

吉川　徹

世界思想社

学歴社会のローカル・トラック●目次

第一部　地方からの若年エリート層流出

第1章　大衆教育社会における地方青年の群像　3

大衆教育社会日本　4
最後の戦後学歴社会　7
本書の手法について　10
社会データ科学の方法　13
調査の全体像　14
質問紙パネル調査の手順　16
ライフヒストリーの聞き取り　18
青年群像をメゾレベルで描く　20
ショート・ライフヒストリーと映像情報　22

第2章　島根県立横田高校　27

島根県について　28
島根県の教育機関　30
奥出雲と仁多郡　32
島根県立横田高校　36
習熟度別クラス編成（島根方式）　37

学校文化を維持する教員　41
大学進学の意味するもの　44
第3章　世代間移動と地域移動　49
対象クラスの特性　50
卒業生の進路を追う　51
学歴の上昇移動　54
手堅い職業志望　62
現在の職業と希望職種　64
大学進学による地域移動　66
地域移動の四類型　74
第二部　漂流記（ライフヒストリー）
第4章　大都市の人になる　79
都市定住型　80
中川博喜のライフヒストリー　80
高橋智義のライフヒストリー　86
塚本雅子のライフヒストリー　91

長谷川舞のライフヒストリー 98
鈴木伊久美のライフヒストリー 106
第5章　都会の空気と故郷に引き戻す力 115
Jターン型とUターン型 116
井上めぐみのライフヒストリー 117
古池建亮のライフヒストリー 122
甲斐理英のライフヒストリー 128
第6章　県が育てて県で働く 135
県内周流型 136
澤島祥二のライフヒストリー 136
堀真里江のライフヒストリー 140
杉本祐子のライフヒストリー 145
松原弘樹のライフヒストリー 151
第三部　地域移動のダイナミズム学
第7章　意識の社会移動 163
質問紙パネル調査データの特性 164

意識の移動表分析　165
都市的アノミーと道徳性　174
生活環境のあいまいさへの耐性　183
権威に対する心構え　188
家族・親族への想い　194
自尊感情　196
県内にかかる圧力と県外流出の分散性　202

終　章　ローカル・トラック論　207

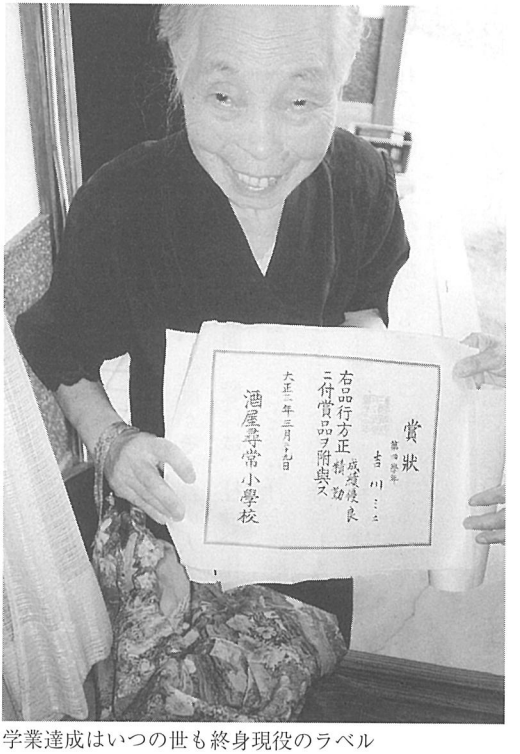
三年A組の群像　208
モデルなき流出と漂流的地域移動　209
アファーマティブ・アクションとしての公教育　212
県内周流の力学　215
都市流出層を引き戻す力　217
トラッキング理論　219
ローカル・トラック　222
県内周流の力学とローカル・トラック　227
大衆教育社会とローカル・トラック　232

あとがき 238
文献リスト 244

第一部　地方からの若年エリート層流出

第1章

大衆教育社会における地方青年の群像



学業達成はいつの世も終身現役のラベル

大衆教育社会日本

今の日本は学歴社会であるといわれる。それでは学歴社会とはどのような社会かということを問い直してみると、じつは答えるのは容易ではない。私たち社会学者は、学歴がその後の人生を決めてしまう社会（学歴メリトクラシー原理の社会）を学歴社会という。しかし世間一般には、社会全体が学歴取得に熱を上げ、個々人もまた自他の学歴に大きな意味を感じている社会のことを学歴社会と呼んでいる。こちらの方は現代社会における学校教育を取りまく社会意識や文化まで広く含めて描写したものであり、漠然とした社会のイメージに近い。こうした社会認識について苅谷剛彦（一九九五）は、大衆教育社会という意味深長な言葉を与えている。いずれにせよ、日常生活でもマスコミ報道でも「学歴社会日本」は、もはや言い古された感すらある。

事実、現代日本社会は、世界のどの国のいつの時代とも比較にならないほど、学校教育が人生に決定的な意味をもつ社会となっている。初めに、こうなった理由をごく手短に説明しておこう。これは、突き詰めると日本社会のもつ構造的な特性に起因しているといえる。ここでいう構造的な特性とは、階級構造（どんな社会的地位に生まれ、どんな社会的地位に至ったかということの個人差）や、社会内部の民族構成（どの民族がマジョリティで、どの民族がマイノリティであるか）や地域差の影響力が、他社会よりも相対的に見て希薄だということである。世界の他の国々には、階級社会としての歴史、多民族・多宗教の交錯状況、

広大な国土の内部での地域格差などの、日本とは異なる個別の深刻なリアリティがある。

他社会では決定的であるはずのこうした社会構造上の要因の影響力は、現代日本社会では、相対的に見ると、必ずしも強力なものではない。[1] それゆえに日本社会においては、僅差しかもちえない大量の中間層を峻別する論理は、学歴をおいて他には見当たらないということになる。そこに加えて明治以後現在の教育改革に至るまでの、学校教育を国の礎とする政策の歴史は、日本の構造的特性ゆえにもともと受け入れられやすかった学歴社会という仕組みを、さらに強力に推進してきた。学校教育を社会発展の中心に据え、大衆がそれを信じて社会変動を推し進めてきた経験をこれほどまでに明確にもつ社会は、二〇世紀の日本の他には、社会構造の類似した韓国などの東アジアの国を別とすれば、ほとんど見出すことはできないのである。

国土の大半の地域が農山漁村だった二〇世紀の初めから、私たちの国は、農家や漁師の子たちが競って都会へと出て行く人口移動を経験した。この若年層の都市への流出は、少しずつ形を変えながらも一貫して続いてきた人口動態である。

具体的に、どのような層の若者たちが、いかなるチャンスを求めて都市へと流出したのかということについては、それぞれの時代についてさまざまなルートの存在が指摘されている。具体的にいえば、奉公、身売りといういささか前時代的なものから、工員・女工としての若年非熟練労働力の都市工業地域への流出、軍への徴用、集団就職、高校の個別就職指導による初職斡旋、そして高等教育への進学などである。そんななかには家柄や学歴に頼らず、自らの才覚だけを頼りにした起業家や政治家の立志伝も

あったりする。

こうした都市への人口流出の実態については、計量歴史社会学の分野で近年になって詳しく明らかにされ始めた。そんな研究のなかに、目から鱗が落ちるような、面白いものがある。

従来の通（俗）説では、農業層が世代を経て（都市の）被雇用層に変化していった過程について、次のように考えられていた。農家は概して長男が単独相続する家父長制の慣行をもつ。そのため家を継げない農家の次三男や女子は、進学や初職就業のために故郷を離れざるをえない。それゆえにかれらはチャンスの多い都市へと流出していった。そしてこの家郷喪失した農家の次三男が、都市中間層を形成したに違いない。ところが社会調査データをきちんと分析してみると、この通説は重要な点で描きなおされるべきであることがわかってきた。つまり戦前についても（天野郁夫編　一九九一、粒来香　二〇〇〇）、戦後についても（橋本健二　一九九九）、農家が単独相続であるというのは確かに事実である。しかし、必ずしも長男があととりとなり、次三男だけが都市に流出したという形跡はほとんど見られないというのである。要するに、日本の農村からはいつの時代も、長幼男女の別なく都市流出が続いていたのだ。次三男や女子だけではなく、あととりと目される長男であったとしても、いやむしろ家名を背負った長男であるからこそ、身を立て世に出るために故郷を離れたという歴史的事実が掘り出されたのである。

このことは、長子相続という家父長制のイデオロギーを凌駕するほどの、何らかの要因が都市への人口流出を後押ししてきたことをうかがわせる。読者の推測どおり、大衆レベルで拡がった学歴社会のイデオロギー、すなわち大衆教育社会の心性は、その何らかの要因のうちの最も重要なひとつであった。

いつの時代にも、旧制中学・高校、新制の大学・短大という高等教育機関への進学は、若年層が農村を離れて都会へ出て行くルートの王道として輝き続けてきた。立身出世というキャッチフレーズのもと、エリート予備層の若者たちが文字どおり学問によって身を立て世に出ることを目指したのである。村一番の秀才が、旧制中学や師範学校などへの進学のために実家を離れ、遠い町に出たという逸話や、クラスのトップの生徒がみごと有名大学に合格して、まだ見ぬ大都会へと出て行くというライフコースが、いつの時代にも実像として若者たちの眼前にあったのだ（竹内洋　一九九七、中村牧子　一九九九）。そこには、近代日本の大衆教育社会としての底力を垣間見ることができる。

最後の戦後学歴社会

とはいえ、筆者が日ごろ接している一九八〇年代生まれの大学生には、「戦後」は言うに及ばず、「高度成長期」ですら父母、祖父母の世代の出来事として映り始めている。とりわけ豊かな都市社会で生まれ育った若者たちにとっては、地方の若年エリート層の都市への大規模な流出は、どうやら歴史的事実のように思い込まれているようだ。他方、地方自治の時代が喧伝されるわりには、地方からの若年層の人口流出の実態については、行政による人口動態の調査から表面的に実数を調べられるに留まり、その社会・文化的なメカニズムの把握が少しばかりなおざりにされている。

本書は、一九九〇年代前半に、山陰地方のある高校から大学進学のために都会に出て行った若者たちの、二〇代半ばまでの生活の様子と、ものの考え方の変化を追ったモノグラフ研究である。かれらが生

まれ育った地域には、大卒ホワイトカラー層（いわゆるサラリーマンやＯＬ）を受け入れる産業も、自宅から通える大学・短大、専修学校もない。それゆえにかれらは、高校卒業と同時に生まれ育った親元を否応なく離れ、都会へと出て行かなければならない。このような旧態依然とした人口流出の様子に、私たちは二〇世紀の末まで残っていた、最後の戦後学歴社会の面影を見ることができる。

だが、かれらのたどった経路をよく見ればみるほど、現代日本社会の中間層のライフコースとして、とりたてて奇異なものではないし、まして問題視されるようなものではないこともわかってくる。むしろ本書を読み進めてみて、これがありふれた普通の青年層の一角をなす生活実態であることを読者は確認されることだろう。

内輪のことで恐縮だが、筆者は鳥取、新潟、石川、福島、長野、広島、岡山などの地方県出身者で、高校卒業と同時に都会の大学に出てきて、そのまま大都市で研究生活を続けている社会学者を何人も知っている。現代日本社会の主要な潮流を捉えることを生業とするかれら自身のライフコースが、じつはこうした人口流出の典型例であり、この地域移動経験が、かれらに産業化の原体験を提供しているのである。筆者自身もまた、高校卒業までの人生の半分を島根県松江市で、大学入学からの残りの半分を流出先の大阪の北摂地域などで過ごしている。

話はさらに逸れてしまうが、かつて社会学の主要領域のひとつに農村社会学という分野があった。農山漁村の村落構造や家族の実態を実証的に解明しようとした研究分野である。ところが現在では、こうした研究は都市社会学と呼ばれる場合が多い。どちらも共同体や家族と地域の関わりを研究する分野で

あるというのがそのカラクリなのだが、その主要なテーマは、農業体の経営、直系同居の大家族、村落共同の祭祀や農作業など農村特有のトピックから、郊外型ライフスタイル、核家族、ボランティア活動への住民参加などの現代的な論点へと変わっている。

本書と関係の深い教育社会学や若者論という分野においても、この農村社会学の衰退と歩調を合わせるかのように、論点の転換が進んできた。つまり、地方の農山村からの若年層の人口流出というかつての主要論点が、人口の集中する大都市の学校問題や若者のライフスタイルを探るものへと変遷してきたのである。今では若年層の人口流出は、もはや現代社会学ではなく歴史社会学の命題となってしまった感すらある。

このところ新聞紙上を賑わしている少年による凶悪事件（神戸、神奈川、佐賀、大分、岡山、新潟などで相次いで発生した刃物やバットによる殺傷事件）についても、筆者には、都市型の背景をもった新奇なものと、農村型の背景をもった旧来のものが混在しているように見えてならない。しかし地方の農山村の若年層が直面する現実、そしてかれらの心情という視点からこうした今日の事件が語られることはほとんどないようである。新聞記事などを読むかぎり、青少年の事件は現代の（都市）社会の歪みを反映していると解釈されることが多い。そして、だからこそ昨今の少年たちを取りまく地域や教育の現代的環境を軌道修正していかなければならない、というのが議論の落としどころのようだ。こうした論理に相乗りして、大都市の困難校について霞ヶ関で考えられた「処方箋」が、全国の農山村の小さな学校にも配られていくという奇妙な事態が発生する。

本書で見ていくことになる一九九〇年代は、首都圏郊外の女子高校生の援助交際、キレる青少年、定職に就こうとしないフリーターの急速な増加、若者の間でのヒップホップといわれるストリート系のファッションや音楽の大流行などが、マスコミだけでなく社会学でも真正面から取り上げられ始めた時代である（例えば宮台真司　一九九四など）。しかし、そんな時代にあっても、本書が光を当てる奥出雲は、そういう都市的な若者論の「語り」の外にあった。この地域だけではない。北海道の道北・道東地域、東北北部、能登半島、紀伊半島南部、丹後半島、四国山地の山村、南九州、あるいは佐渡・隠岐・南西諸島・伊豆諸島という離島部など、全国の多くの地方で、都市の若者文化とはかけ離れた、地方特有の実態があったはずである。

読者には、現代社会を生きるためのバランス感覚として、表社会の裏面を探るという奇を衒った研究に目を奪われるだけではなく、時代を越えて脈々と続いてきた「裏日本」（古厩忠夫　一九九七）のメイン・ストリームの存在に想いを巡らせていただきたいと思う。

本書の手法について

本書では、筆者がひとつの高校の卒業生に注目し、約一〇年にわたって収集してきたさまざまな形のデータ（分析のための資料）に基づいて議論が進められる。こうした研究方法を社会学や人類学では、「モノグラフを描く」という。モノグラフ研究とは、ひとつの特定の社会事象を詳細に取り扱う研究のことで、演繹的あるいは理論的といわれる研究法とは異なり、現実の社会の生きた個別状況を描写していく

手法である。本書の場合は、ある高校のひとつのクラスの大学進学と、その後の流転が具体的で主観的な描写の対象ということになる。

ただし本書では、フィールドワークで得た質的な資料だけではなく、質問紙調査などの計量的なデータも取り混ぜて分析していく。やや専門的な例示になってしまうが、初期シカゴ学派の都市研究（宝月誠・中野正大編　一九九七、中野正大編　二〇〇一）に見られるような、質的研究を前面に押し出したモノグラフではなく、『大恐慌の子どもたち』（G・エルダー、訳　一九八六）のように、計量的データと面接インタビューのデータを織り混ぜた研究を目指したのである。

社会調査のデータの分析から現実社会を記述する際の研究者の心構えについて、尾嶋史章（同編著　二〇〇一）は「計量的モノグラフ」を描く、という表現をしている。彼が主張しているのは、聞き取り調査や参与観察などの質的調査を行なうフィールドワーカーが、現実社会の意味を描写していくときと同じように、計量的な手続きを用いる場合にも、眼前の数量の操作が、現実社会のどのような事象と対応しているのかを常に見失わないように心がけて、問題発見的な描写に徹するという方針である。あえてモノグラフという表現を用いることによって、データを計量的に分析して「経験的知見を整序化し、統合化し」つつも、生硬な報告書や原論に終わらず、生き生きとした現実の面白みを表現しようとする志向が明確に示されているのである。これは科学的な方法論というよりもむしろ、大村英昭らの主唱する「臨床社会学」（同編　二〇〇〇、大村英昭・野口裕二編　二〇〇〇）とも共通する、社会学の実践における視座の再確認のための言明である。

そして本書もまた、ライフヒストリー（生活史）の質的描写による「本来の」モノグラフと並行して、この計量的モノグラフをできるかぎり自在に操り、質的研究と量的研究の間隙を埋める試みを目指している。プロ・テニスプレイヤーは、バックハンド・ストロークとフォアハンド・ストロークという全く逆の動作を、瞬時の判断で自在に操り、自分ではどちらの打法で打ったのか意識していないと聞いたことがある。かれらが考えているのはどの打法かということではなく、ひたすら打球のゆくえだけなのだそうだ。本書でも、まさにそういう自在さを目指したいのだが、「恥知らずの折衷主義」（佐藤郁哉　一九九二）とさえいわれるこの困難な企てに、筆者の技量が応えうるのか、正直にいえば少しばかり不安もある。

そういうとりとめもない想いを抱いた筆者にとっては、対極からの佐藤健二の次のような呼びかけも勇気を与えてくれた。彼はライフヒストリー研究の従来の方法論上の位置付け、すなわち計量研究に対する対立的立場という位置付けを修正すべく、次のように戒めている。

「個人を集団と対立させ、私的を公的や共同から切り離し、生活を社会と無関係なことばに囲いこみ、口述による採集を紙による調査と分別する。そうした対立や区別をつかって、ライフヒストリー研究の外なる輪郭を明らかにしようとする思考は不毛である。それよりはむしろ、ここで述べてきたような可能性の中心（ライフヒストリー研究が内包する豊饒な特性）を共有しつつ、さまざまなテクスト化・作品化の実践を先行させるべきであろう」（佐藤健二　一九九五、三四三五頁　傍点、括弧内は引用者補）

社会データ科学の方法

話がやや専門的になりすぎたかもしれない。ともかくこうした方法をとるがゆえに、本書では少々複雑な構成のデータを用いることになる。そこで、方法論上重要な点を、本書の流れの紹介も兼ねて示しておこう。

筆者個人はこれまで、学歴社会、社会的不平等、人々のものの考え方（世論や世相といわれるもの）について、それぞれの絡み合いを解きながら説明していく仕事をしてきた。これは教育社会学、社会階層論、社会意識論にまたがる研究ということになる。なかでも社会意識についての調査データの解析を多く手掛けてきたので、計量社会学とか社会調査法と呼ばれる方法論の専門家ということにもなっている。

加えて最近になって、ある事情から自分のやっていることを「社会データ科学」の研究と表現する機会が増えてきた。その事情の詳細はさておき、考えてみると「社会」、「データ」、「科学」は筆者がこれまでに使ってきた枠組みを素直に並べたものであって、けっこう語感がいい。確かにこういう言葉があると便利なのだが、今のところ社会データ科学にはちゃんとした定義がない。ゆえにまず、社会データ科学とは、（現代）社会のものごとを対象とし、収集したさまざまなレベルのデータを、科学的に分析する広く自由な研究分野ということに決めておこう。

社会データ科学の対象は、社会学の領域のどんな事象でもいい。そしてデータとしても、いろいろなレベルのものを自由に使うことができるだろう。狭い意味でデータといえば社会調査データだが、少し

拡げると国勢調査、学校基本調査などの政府系のセンサスデータや、都道府県、市町村の公表する各種の統計数値もマクロ・データとして利用可能である。これらに加えて、実地調査で収集するさまざまな情報も、やはり社会に関するデータである。例えば同窓会の名簿からまとめた進学先一覧や、学校要覧に毎年公表される各校の在籍者や進学者・就職者の数、市町村の紹介パンフレットやホームページなどから得られる数値情報などがここに含まれる。

さらに参与観察や対象者へのインタビューでは、人々の語りによる音声情報、あるいはビデオカメラの画像情報、フィールドノーツなどが蓄積される。これらのフィールドワーク（現地調査）の所産も、人類学を考えればわかることだが、「データ」に他ならない。

このような判断のもと本書では、学校に関する資料、聞き取り調査で得られた質的なデータ、質問紙パネル調査法による計量的データなどのあらゆるデータを駆使して、複眼的にある群像（クラス）の軌跡を追っていく。これは、筆者なりの社会データ科学の実践の試みだと考えている。

調査の全体像

本書で用いるのは、一九九二年から二〇〇一年までの間に筆者が断続的に実施した、質問紙による意識調査と、インタビュー調査のデータである。この調査の本体は質問紙パネル調査という調査設計によって収集されている。

パネル調査とは、同一の調査対象者に注目してそのサンプルの生活や意識の変化を見るために、数年

の間隔をおいて繰り返して調査を実施する方法である。対象パネルは島根県立横田高校の一九九二（平成四）年度の三年A組（国公立大学への進学志望クラス）である。[2] この調査は、もともとは現代日本社会における青少年の生活様式と社会意識形成について実証的に明らかにするための大規模調査の一部であった（詳細は、吉川徹　一九九八参照）。六年後の一九九八年になって筆者は、このクラスについて卒業後六年間の進学・就職と地域移動の軌跡を追う追跡調査（以下、第二波パネル調査とする）を実施することにしたのである。

一九九二年のベース調査時には、このクラスの全員の保護者（父母）に対しても同じような調査票を配布している。父母に対する質問紙調査の内容は、世帯収入、両親の学歴、職業などの出身家庭の社会的属性、両親の子どもに対する態度などを尋ねる項目と、父親、母親に別々に尋ねられた社会的態度の質問項目で構成されている。このうち約七〇個の社会的態度項目の配列と内容は、ベースのパネル、すなわち三年A組の生徒たちに尋ねたものと全く同一形式である。したがって、この三者の調査票が収集された時点で、父親の社会的態度、母親の社会的態度と青少年の社会的態度の間の類似性が分析できる構成になっていたのである。[3] 第三章で見る、両親の学歴、本人一八歳時の父親の職業などの社会的属性は、子どもへの質問や学校側の資料から間接的に得たものではなく、両親から収集されたこの質問紙調査のデータに依拠している。

この調査の設計では、標準的な社会調査と比べるとサンプルが少数に絞られている。さらに対象にも固有の特色があるので、分析されるのは「大きな社会」に対して代表性のある計量的データではなく、

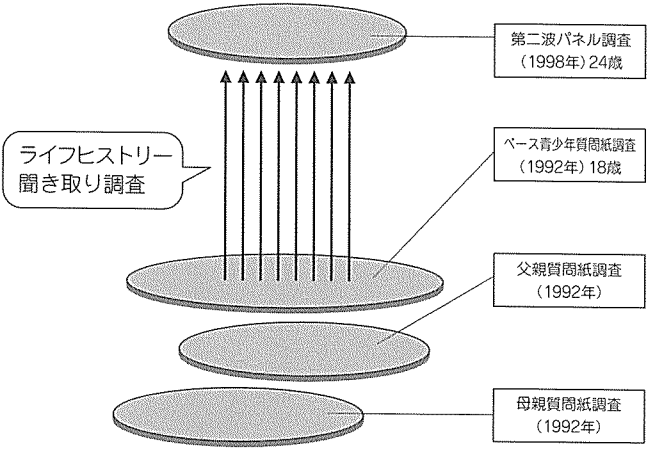
厳密にいえば、特定の青年たちの群像を追うための数量による資料にすぎない。しかしその反面で、年齢・地域的環境・進路などが統制された少数データであるからこそ、ひとつひとつのサンプルのライフコースや社会的属性について、顔の見える（パーソナルな）レベルで入念に検討しうる。そういうサンプルの特質も考慮して、一九九八年から一九九九年にかけて筆者は、面接インタビュー調査を実施し、ライフコースについての細かい情報と、かれらの想いを聞き取り、全情報をデジタル・ビデオに収めた。これは、個々人によって生きられた六年間に詳しく踏み込む質的調査で、質問紙では明らかにしえないような、個別の情報を獲得するねらいがあった。さらに二〇〇〇年、二〇〇一年にも、周辺的な情報収集のために、学校訪問や教員へのインタビュー、対象者への再調査を繰り返してデータを補った。

調査のおおよその全体像は図1-1のようになっている。本論に入る前に、それぞれの部分についてもう少し詳細に紹介をしておこう。

質問紙パネル調査の手順

ベースとなった質問紙調査データは、一九九二年の一〇月に配布・回収されたものである。この調査票には、その当時の学校生活への適応の度合い、生活満足度や充実感、学習時間や学習内容、クラブ活動など学校内外での生活の様子、学業成績、居住地、家族構成、将来就きたい職業、学校への愛着、小学校六年生時の成績などが尋ねられている。さらに権威主義的伝統主義、自己確信性、道徳性、集団同調性、不安感などに関する態度尺度項目も含まれている。

図1-1　調査プロジェクトの全体像



同一サンプルに対する質問紙による第二波パネル調査は、一九九八年一〇月に実施された。これは一九九二年のベースの調査票と全く同じ意識項目と、その後の学歴・職歴・地域移動の様態を尋ねる項目を含んだ郵送調査である。第二波パネル調査の主たる目的は、六年のインターバルを経た対象者の意識変容を把握し、その要因を明らかにすることである。どのような若者たちが、何を考えて、故郷を離れて漂流していくのか、かれらの生活やものの考え方はどう変わっていくのか、という問題の解明にはこのデータが用いられる。

一九九八年五月、調査の手がかりを得るため、筆者は対象クラスの担任であった吉田寛教諭の話を聞いてみることにした。数学担当の同教諭は、この時点ではすでに同校を離れ、県下随一の進学校で進路指導を担当されていた。この機会に同クラスのおおよその進学状況などを知ることができた。

次に吉田教諭の紹介で、このクラスのリーダー格といわれる澤島祥二に、彼の現在の勤務先で聞き取り調査を行なった。彼によると、クラスメイトの離散状況については、クラスの同窓会などもあまりないため、きちんと把握できていないということだった。しかし、地域移動の極めて少ない土地柄だけに、かつての「クラス連絡名簿」を用いて調査票を郵送すれば、実家までは確実に届くだろうという。そこでその方法を試みることにした。

続いて調査を実施する旨の挨拶状を対象者に送付した。この時点では宛先不明での返送は一通もなかった。その後、返信用封筒を同封して調査票を同じ住所に郵送配布した。結果として対象四四サンプル中、三五サンプルから質問紙調査票を回収できた。これは一九九八年一〇月末のことである。

本書で扱う質問紙パネル調査データは、高校三年生のときの父母の回答、本人の回答、そして、この二四歳時の本人の回答という四つのデータセットをまとめたものである。第三章ではこのデータに、同窓会名簿などの資料を接合して、地域移動の流れを追っている。また第七章では社会意識の時点間の変容プロセスを追う計量分析の結果を示している。

ライフヒストリーの聞き取り

しかし、いくら計画的にパネル調査を実施しても、質問紙調査で聞き出せるのは限られた「断面図」である。一人ひとりの地域移動や進学に際しての重要な意思決定の様子や、友人関係などについては、こちらから定型の質問をしただけでは、どうしても個別の実態を把握しにくい。そこで対象サンプルに

ついて、それぞれの移動先まで出向いて聞き取り調査を行なうことにした。そうして得られたのが、ライフヒストリーについてのデータである。

この聞き取り調査は、対象者の許可を得て全てデジタル・ビデオに撮影している。インタビューの方法は、調査員（筆者）が提示したトピックについて回答者が自由に答えるというものである。まず対象者に、質問紙パネル調査データをもとにして六年間の生活や考え方の変化を追っているという調査のあらましを話す。そして、各自の現在の仕事や生活の状況から話し始めてもらい、就職活動、大学生活、大学受験と順次過去に遡って、高校三年生までの出来事を述べてもらう。その際、会話に無理やりに質問の構造を与えるのではなく、できるかぎりトピックに従って行きつ戻りつするように努めた。それゆえにインタビュー時間も一律ではない。

インタビュー対象者にあらかじめ質問紙調査を実施したうえで、研究目的やデータの構造まで説明するという手順をとったのは、合意形成のためだったが、事情の了解の早い高学歴の若年層が対象者であったこともあり、少なくとも今回の調査に関しては、効率化という面でも効果を発揮している。

それぞれのライフヒストリー音声情報の全ては、テキスト・データとして入力して文字情報として整理した。この一次資料の分量は、本書一冊の文字量をはるかに上回るものである。このテキスト・データと質問紙パネル調査データを併用して、ライフヒストリーを構成できるのは、最終的には一二サンプルになった。[4] なお調査対象者のプライバシーを守るために、従業先名と大学名の一部を架空のものにしている。氏名については、ある別の同世代の若者たちの名簿から仮名を割り振った。こうして本書の第

四章から第六章では、一人ひとりによって生きられた地方出身の高等教育進学者たちの一九九〇年代を追っている。

この種の手法は、モノグラフ研究あるいはエスノグラフィー研究（民族誌学と訳されることもある）といわれるものである。エスノグラフィー研究では、外部者が長期間フィールドに滞在し、そこでの生活に全面的に参与して、日々の暮らしを人々の視野で描いていくという、参与観察法が一般的な調査技法である。もともとは人類学で用いられる手法だが、社会学でも多くとり入れられている。

ただし今回の調査では、本格的な参与観察というにはあまりにも限られた時間と接触回数でしか対象者と接していない。そこでライフヒストリーを描くにあたって必要な情報は、質問紙パネル調査のデータを駆使することによって補っていくことになる。こういう質的調査と量的調査の中間的な手法は、エスノグラフィー面接といわれることもあるが（佐藤郁哉　前掲書）、その方法は十分に確立されたものではない。それゆえに方法論という点では、手探りの試みということになるかもしれない。

青年群像をメゾレベルで描く

本書で視点を定めているのは、一人の人間のパーソナル・ヒストリーでもなければ、社会調査データが代表する大規模な母集団でもない。いわば、その両者の中間あたりに位置する研究であり、個々人の顔の見える、メゾレベル（中間的水準）の群像として、ある高校のひとつのクラスの在籍生の青年期を描くものである。

青年の群像を追うという対象と視点の定め方で、参考となった二、三の研究例を挙げておこう。この分野で古典とされるのは、一九三〇年代のボストンの街角におけるイタリア系の青年たちを描いたW・F・ホワイトの『ストリート・コーナー・ソサエティ』（W・F・ホワイト、訳　一九七四＝二〇〇〇）である。よく知られているようにここでは、コーナヴィルという名の街角で、青年たちの人間関係に著者自らが参与して、かれらの視点で下層社会を描写している。また同様の参与観察法によってリーボウは、ワシントンDCの黒人下層階級の男たちの生活を『タリーズ コーナー』に描いている（E・リーボウ、訳二〇〇一）。これもまた都市社会の下層に生きる青年たちの実態を鋭く捉えることに成功している。日本における先行研究としては、京都の暴走族の群像を描いた『暴走族のエスノグラフィー』（佐藤郁哉　一九八四）が秀逸である。

これらはいずれも、青年たちの心情と生活を描いた代表的なエスノグラフィー研究である。ただし実際のところ本書は、これらの下層のサブカルチャー研究とはいくつかの点で明らかに異なっている。第一に、本書が対象とするのは、中間層上位（いわゆる大卒ホワイトカラー）にあたる青年たちであって、カウンターカルチャー（下位文化）を保持し、ときにはそれに自覚的になっているようなマイノリティの特異な集団ではない。第二に、本書はひとつの地域に根を張った人間関係ではなく、一八歳で山村を離れ、個々別々のライフコースを並行的に歩んだ群像を対象としている。第三にインタビューア・観察者としての筆者は、厳密な参与観察者としてかれらと生活経験を共有したわけではない。もっとも筆者は対象者と同県出身の都市流出経験者であって、年齢もあまり離れていない。それゆえに対象地域につい

ては、地方新聞やテレビの地方ニュースのトピック程度の共通の理解があり、ときには郷愁を伴う共感もあった。また当該県内の高校・大学教育の仕組みと実態についても把握しているし、県外流出、都市定住者のことについては、それなりにわかっている。これらの意味では完全な外部者ではなく、ある空気をかれらと共有していたと思う。その反面、対象となった山間地域で生きられた生活構造については、調査を実施するまではほとんど何も知らず、かれらと話してみていくつかの思いがけない実態を知ることになった。この点では逆に、かれら自身には見えていない構造を客観的に観察する視座をもちあわせていたように思う。

このような相違点を考えると、前述した参与観察研究の「作品」を持ち出して、本書と対比させるのは適切ではないかもしれない。しかしそれでもなお、メゾレベルで青年の群像を追うという重要な点において、これらの著作と本書には共通する部分があると考えたい。

ショート・ライフヒストリーと映像情報

高校卒業後の六年間というインターバルは、パネル調査としては適切な設計だと自負しているのだが、ライフヒストリーを追うには少し短い期間である。通常ライフヒストリーとは、各人の二〇～五〇年の人生（ライフ）の軌跡（ヒストリー）を記述して、さまざまな生活環境の変化と個人の変貌を対象とする研究を意味する場合が多い。この点で、ライフコース・アプローチ（G. Elder 1998）と表裏をなすものとみなすべきだろう。だが本書で展開する研究は、そのような研究と比較すると、はるかに短い期間の

個々人の変遷を追うものである。それゆえ（そういう言葉があるかどうかはわからないが）ショート・ライフヒストリーという表現が適切なように思われる。

青年期の群像を追うショート・ライフヒストリーという筋道を確定するにあたって、ひとつの作品が筆者に強い衝撃を与えた。それは写真家、橋口譲二の『17歳の軌跡』（橋口譲二　二〇〇〇）である。この本の内容は、次のようなものである。

今から一〇年ほど前にこの人物写真家は、当時一七歳だった少年少女の姿を全国各地で撮影して、『17歳の地図』という小さな写真集を編んだ（橋口譲二　一九八八＝一九九八）。まさに全国津々浦々の若者たちの人物像がその主題である。興味深いのは、写真と同じ見開きページに被写体の家族構成、今朝の朝食、小遣い、最近読んだ本などの日常生活の断面や将来の夢などのトピックが箇条書きされていることである。これらによって、一七歳という成長過程の瞬間における、写真のフレームの外の被写体の「プロフィール」が作品に取り込まれているのである。その数は男女合計一〇二名にも及ぶ。

その後橋口は、それぞれの若者たちの一〇年後を追跡して、青春時代を走りぬいた二七歳前後の被写体の「現在」のポートレートを再び撮った。そして今度はその「軌跡」を「今どうしていますか？」という問いかけによる写真家との会話記録として記述した。これが『17歳の軌跡』という作品である。そこでは各人の青春の軌跡が一七歳の写真とともに始まり、「分厚い」会話記録を読み進めていくと、最後に現在のポートレートが現れるという構成がとられている。この写真家はこうして三八人の人生の軌跡を「立体的」に表現したのである。

それぞれに生きられた青年期を語る被写体の言葉は、それだけでまさにライフヒストリーといえる。それにもまして、一七歳と二七歳の二枚の写真は、個々のライフヒストリーを社会派の写真家による芸術作品へと昇華させている。

橋口の作品をたまたま目にしたとき、筆者の手元にはインタビュー調査の対象者を写した何万カットという量のデジタル・スチール映像があり、このデータをどう利用しようかとまさに思案しているところだった。これは本来、音声を録る目的で回したビデオカメラが、同時に収めた画像情報である。

そういうわけで、六年間のモノグラフを記述していく作業を補う意味で、本書でもこれらの画像を用いることを思いついたのである。手持ちの画像は、本来の利用目的からいっても、芸術作品と呼べるものではなかったのだが、それでもそこには筆者が文章で描き切ることのできない、生きた情報があふれ出ているように感じた。

そこで、横田高校の卒業アルバムに収められていた一八歳の姿と、筆者の問いかけに答える二四歳の姿を選んで、対象者に了解を得たうえで、本文中にちりばめてみた。文字による記述から画像を用いた描写へという報告様式の拡張については、賛否両論があるだろう。また、今回のように対象者からの写真の掲載承諾が得られることは、一般にはむしろ稀なことかもしれない。だが、これも社会データ科学の記述の方法ではないかと考えたのである。

最後に、本書が扱う群像についての、社会学的なねらいを確認しておこう。それには難解な学問的な整理をするよりも、橋口の方法と対比するのがいいだろう。

橋口の被写体は、それぞれ「いい顔」をしている。それは、芸術家の感性で見て「絵になる」一七歳を全国各地の生活風景のなかで撮っているからである。しかし、それゆえに橋口が写真に捉えたのは、当初からいくぶん特徴的な一七歳だったようだ。確かに、起伏のない日々を生きた人たちのストーリーもそこにはいくつか収録されている。だが、「はしがき」や「あとがき」における橋口の言葉を拾ってみると、一七歳がひき起こす事件や、青少年の問題行動がこの撮影者の脳裏に常にあったことがわかる。つまらないことを確認するようだが、もしも全国から一〇〇人を無造作に集めたならば、不運な高校退学者や、中卒就職して地道に働く一七歳、宝塚のトップスターや女優、駆け出しの相撲力士や行司、盲学校の生徒という個性あふれる一七歳ばかりにはなりえないことは、彼自身も承知だろう。

これに対して本書で扱う群像は、確かに地方県の山間地域に固有の特性を色濃く示してはいるものの、写真家のファインダーに映らないほどありきたりな、「普通」の高校生にすぎない。何しろかれらは、普通に高校に通っていて、たまたま質問紙調査の対象となっただけなのである。だが本書では、このようなサンプルのひとつひとつの人生の軌跡にも、同じだけの社会学的な情報があることを伝えたいのである。

もちろん筆者はここで、この写真家の作品について社会学の眼鏡をかけて論評しようとしているのではない。読者に真に本書と見比べてもらいたいと思っているものは、学校における逸脱事例や問題行動の研究に偏重した昨今の教育社会学の実践研究、それに基づいた文部科学省の政策指針である。

本書の「被写体」の何人かも、橋口の被写体と同じように、筆者に対して「私なんかで学術的な本の

題材に適切ですか。別のもっと面白い人を紹介しましょうか」、「僕たちのやってきたことはそんなに変わってますか」と繰り返して怪訝そうに尋ねた。筆者の教育社会学者としての主張のオリジナリティは、まさにこの問いに集約されている。別の論稿でも述べた言葉をここであらためて繰り返しておきたい。

「現代日本社会の、そして二一世紀の社会意識の主要な趨勢を構成していくのは上層エリートでも最下層市民でもない。ここで分析した特異なまでに『普通』の青少年の動態なのである」（吉川徹前掲書：二五八頁）

1　日本社会には、階級間障壁、民族問題、地域間格差が存在しないというつもりはない。これらの問題は、日本社会では他社会ほど顕在的で単純なものではなく、むしろ表面上の均質性に覆い隠されている。それゆえにこれらは、他国以上に潜在的で繊細な問題となっているのだということを、私たちは忘れてはならない。

2　厳密には対象として追跡したのは、このクラスの在籍者のうちベース質問紙調査に回答した四四名である。当日欠席であった一名は今回の調査からは除外している。なお、「三年A組」は仮名である。

3　この三者相関の分析結果については、すでに拙稿などで報告している（吉川徹　前掲書）。

4　対象者への聞き取り調査と並行して、横田高校の別の学年の卒業生、仁多郡内、島根県内他地域の中学教員、横田高校への赴任経験のある教員、他の高校の教員、地元大学の教職員などにも聞き取りを実施した。これらによって、この地域、この高校、このクラスについてのイメージを筆者なりに把握することができた。

第2章

島根県立横田高校

山に抱かれた仁多郡内の豊かな実り

島根県について

中国地方は山陰、山陽という二つの地方にはっきりと分かれる。山陰と山陽は気候・風土だけではなく産業構造や文化もたいへん明確に異なっている。中国山地の南北のこの二つの地域を結ぶ輸送幹線は、せいぜい一〇本に満たず、鉄道であれ国道や高速道路であれ、ほとんどが谷筋に沿って中国山地を越えていくものである。幹線（国道）のそれぞれには人形峠、四十曲峠、赤名峠、三坂峠、傍示峠などの名をもつ高地があり、冬の降雪時には今なお難所とされる。

山陰側では一般に、海沿いの平野部に人口が集中している。この地方は古くは港湾輸送によって、大正から昭和期には遅れて敷設された鉄道輸送（今のJR山陰本線）によって産業が発達したため、ほぼ例外なく北側が「開けて」いるのである。「開けて」いるといってもそれはあくまで「裏日本」の都市として規模が大きいというだけのことであって、山陽側や近畿地方とは比較にならない。それゆえに山陰

の「開けた」平野部から谷筋を入った山間地域は、地図上で見る以上に辺鄙なところということになる。

島根県はその山陰地方の西部に位置する。西には山口県、東には鳥取県、南には中国山地を県境として広島県がある。県の北側は日本海で、隠岐群島の先は朝鮮半島である。島根県の人口は一九九九年現在で約七六万四千人である。県内にはわずかに八市を数えるのみで、県庁所在地である松江市でも、人口は約一五万人である。全国的にはおそらくあまり強い印象のない県なのであろう。中部地方から東に行くと、島根県と鳥取県の位置関係が判然としないという人の話を聞くことがある。また海へと流れ出る河川があって、平野部と山間部があるという地勢に、他県と比較して特筆すべきところはない。あえていえば隠岐群島と斐伊川水系の二つの汽水湖（宍道湖・中海）があることが地理的な特色といえるが、地方行政のあり方にも著しい特色はなく、いわば普通の地方県の典型であるという印象をもつ。

図2-1　奥出雲地方の位置

しかし小さな県ではない。東部の出雲地方、西部の石見地方および離島の隠岐群島からなる県の東西は二〇〇キロ足らずなのだが、実感としてはこの数字以上の距離感がある。県の東端から西端まで行くには、ＪＲ山陰本線の最速

の特急列車を利用しても、三時間余りかかるのである。南北は東西と較べるとそれほど奥深くはないが、北に開けた平野部があって南には山間部があり、南端は分水嶺で隣県と接する地形である。県全体の形はおおよそ平行四辺形に近く、面積は東京都や大阪府の三倍以上ある。そこに世田谷区や堺市よりも少ない人口が散住しているのである。

島根県の産業や社会の特性をあえて挙げるならば、農林漁業以外の目立った産業がなく、高齢者人口が多いことであろう。かつて過疎と呼ばれた深刻な人口流出は、ようやくその勢いにかげりが出始め、現在では高度成長期に廃村をもたらしたような挙家離村の深刻さは見当たらない。これは、県内の生活基盤整備による地域の利便性の確保と、大都市圏の求心力の低下によるところが大きいのだろう。しかし、だからといって決して他府県からの流入人口が多くあるわけではない。また県内を見ても、市部から郡部に人口が移動する傾向は顕著ではない。

結果として島根県内では、日々の暮らしで出会う人の多くは島根で生まれた島根県人、それもその地域で生まれ育った地元の人たちということになる。流出はあっても流入はないという人口の不可逆性は何十年間、ことによると何百年もの間、変わるところがない。

島根県の教育機関

島根県内には全日制高等学校が五〇校余りある。過去四〇年ほどの間、すなわち戦後の高校進学率急増期から現在に至るまで、その数に大きな増減はない。これらのうち私立高校はわずかに一〇校で、い

ずれも松江、出雲、江津（ごうつ）、益田など平野の市部にある。また職業高校も一〇校ほどあるが、県内の産業構成に合わせて配置されているために、やはりほとんどが市部に集中している。

また公立の普通高校のなかには、比較的大規模ないわゆる進学校が八校ほどある。これらは広い校区と一定数の校区外からの入学者（七～八％程度）を許されているため、入試における選抜の度合いも高くなりがちである。それゆえにこうした学校が近くにある地域では、「輪切り」型の学校間格差が確かに存在する。とはいえこれもまた、周辺人口が多く交通手段の確保できる平野の市部周辺での実態ということになる。[2]

残る山間離島の郡部の広大な地域には、県立高校の本校・分校が散在している。そしてこれらの学校が、それぞれの地域（校区）の高校教育を一手に担っているのである。こうした郡部の高校、すなわち中小規模の県立の普通高校の数は、全県でおおよそ二〇校である。島根県立横田高校もこうした郡部の中小規模の県立普通高校のひとつである。

ここで高等教育機関（大学・短大など）についても触れておこう。県内には島根大学と島根医科大学という二つの国立大学がある。この他には、二〇〇〇年になって県西部に島根県立大学が創設されたので、現在は三大学があることになる。ちなみにこの山陰の地方県には、私立の大学はおろか私立短大すらない。

県東部の松江市にある島根大学は、学生定員（各学年一、一〇〇～一、二〇〇名）と学部数が県内他大学と比べると圧倒的に多いこともあり、県内唯一の総合大学として県民には広く知られている。ここには法

文学部、教育学部と、総合理工学部、生物資源科学部（調査開始時は理学部、農学部）の四学部があり、一部の学部には大学院博士課程まで設置されている。

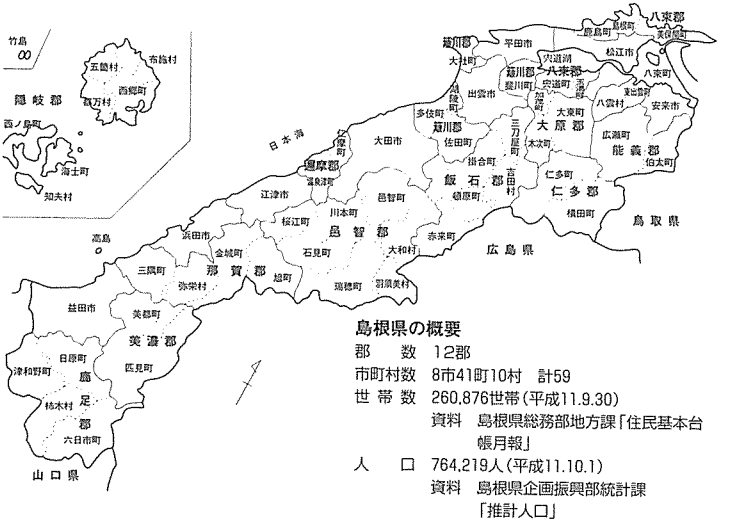
短大は一九九〇年代前半には二校あり（いずれも県立）、この他に国立の工業高等専門学校が一校あった。これらもやはり「開けた」平野部に設置されている。[3] なお、鳥取県西端の米子市にある医療関係の高等教育機関は、厳密には県内ということにはならないのだが、本書の範囲内では同じ地域文化圏にあると見ることができる。

一般に日本海側の地域を訪れると、それが丹後半島であれ、能登半島であれ、福井、鳥取、山口であれ、大学や短大のない地域は通りかかって直ちにそれとわかる。なぜならば昼間に行き交う若者の数が著しく少ないからである。同時に若者だけをターゲットにするような店舗や施設も少ない。若年層の大半が高校を卒業するとチャンス（就職・進学の機会）を求めて「街」に出ていくのである。島根県からの若年人口の県外流出も、まさにこうした「裏日本」特有の実情と見ることができる。

奥出雲と仁多郡

横田高校のある仁多（にた）郡は奥出雲と呼ばれる雲南三郡（うんなんさんぐん）のひとつで、松江市から南におよそ五〇キロの中国山地に抱かれた地域である。この郡は仁多町と横田町からなっている。地図上では東に鳥取県境、南に広島県境がある島根県の東南端であるが、実際の地形としてはこの両県とは山嶺ではっきりと区切られた山間の小さな盆地群である。ここには国道三一四号線の「奥出雲おろちループ」、ＪＲ木次（きすき）線の

図2-2　島根県行政区画図



島根県の概要

郡　　数　12郡
市町村数　8市41町10村　計59
世 帯 数　260,876世帯（平成11.9.30）
　　資料　島根県総務部地方課「住民基本台帳月報」
人　　口　764,219人（平成11.10.1）
　　資料　島根県企画振興部統計課「推計人口」
面　　積　6,707.12㎢（平成11.10.1）
　　注　竹島0.23㎢、宍道湖79.08㎢、中海78.72㎢を含む。
　　資料　国土地理院「全国都道府県市区町村別面積調」

島根県企画振興部統計課（2000）より転載

「スイッチバック方式」という観光名所がある。前者は、一一の橋と三つのトンネルによって一七〇メートルの高低差を登る二重ループ式道路であり、後者は二度の折り返しで、ジグザクに急勾配を登る旧国鉄以来のローカル線である。ともに全国的に珍しい構造物であるというが、これらは図らずもこの県境の山嶺の急峻さを物語っている。

人口は郡全体で約一万七千人であり、それを斐伊川水系の下流の仁多町と上流の横田町がほぼ半分に分けている。古くから、砂鉄から鋼（はがね）を作るたたら製鉄の行なわれてきた地域で、宮崎駿原作で一九九七年に大ヒットとなったアニメーション映画『もののけ姫』の舞台、「シシ神の森」のモデルのひとつともいわれている。また松本清張の『砂の器』もこの地域を題材とした推理小説である。いずれにせよ外部の人から見れば神秘的にすら見えるほどの、ひなびた山間地域のイメージは共通している。

気候は日本海を渡る季節風の影響のため、その低い緯度・標高に反して寒冷である。冬は連日曇り空に覆われ、一〇～五〇センチの積雪が数日おきに断続的に続く。一一月中には自家用車のタイヤを冬用に替えなければならないという。

次に交通を見てみよう。県東部の中心都市である松江市からは、交通量の少ない曲がりくねった国道や県道を使って約一時間半の道のりである。またＪＲ木次線を使うと、日に数便しかない各駅停車の一～二両編成のディーゼル列車を乗り継いで、半日近くかかってようやく郡内の各無人駅に降り立つことになる。中国自動車道は峠の南側の広島県を通り、特急列車の停まるＪＲ伯備線の生山（しょうやま）駅（鳥取県日南町）までも、やはり峠を越えてクルマで一時間ほどかかる。ただしそれらはいずれもいい季節のことであっ

て、地元のスキー場がオープンする冬場には、峠の積雪や凍結のため、夏場でも豪雨による土砂崩れや補修工事などのため、予定外の遅延を計算に入れなくてはならない。

最寄りの大都市である広島市・岡山市に行くには、公共交通機関を使うと、乗り換えも含めて三時間、関西地域にはそれ以上の時間を要する。さらに以遠となると、首都圏であろうが中京地域であろうが九州であろうが、もはやあまり差はなくなってしまう。要するに、鉄道を利用しても路線バスや自家用車を使っても、この地域からの通勤通学圏内には、若年層を吸収しうる大学や企業のある「街」は皆無なのである。

この地域の代表的な産業は、稲作のほか野菜、シイタケなどの栽培農業、肉牛肥育、林業である。一九九〇年代後半に入ってからは、いわゆる町おこしとして高品質ブランドとしての仁多米、仁多牛という産品の売り出しが進められるようになった。また、そろばん生産や銘木家具加工などの伝統地場産業も細々と続いている。この他では、誘致企業の電気機器などの製品生産工場が地元の雇用を確保している。とはいえ若年労働力を吸収できる産業は仁多郡内には決して多くはない。まして大卒ホワイトカラー層を吸収する雇用先はほとんどなく、大学・短大卒業者の求人は、飯石（いいし）郡・大原郡まで拡げた雲南三郡全体でも、医療専門職、教育保育職、町役場や公立施設と若干の金融関係の数えるほどの雇用先しかないという。

島根県立横田高校

島根県立横田高校はこの地域唯一の高校であり、一九九二年当時は各学年、普通科五クラスからなっていた。学校創立は一九一九年と古く、県立農学校などを母体とするが、現在は全日制の普通科のみの高校になっている。校区はおおよそ仁多郡内であり、郡内の二つの中学校からの進学希望者は、ほぼ全入に近い状況（郡内の進学率は一九九九年時点では九六・一％）であるという。学校ランクの「輪切り」による、「進学校―底辺校」という分類（学校トラッキング）には縁遠い状況である。また仁多郡内を校区として五〇年来変わりなく独占してきた横田高校は、地元と浮沈を共にする宿命にはあるが、他校との熾烈な生き残り競争という状況にはない。

このように地元に密着した伝統校であるため、この高校の同窓会組織はたいへんしっかりしている。同窓の先輩のなかには故郷に錦を飾った人たちもいるが、高校卒業後地元を離れ、都会に定住した優秀な人材も数多くいるという。この点において、俊才たちが学歴取得に熱を上げ、競うように故郷を離れた戦前・戦後、そして高度成長期の日本の農山村の高等学校（あるいは旧制中学校）の典型といえる。[4] ちなみに近隣の町からは、昭和の終わりに首相を務めた竹下登を輩出している。よく知られるように、彼は旧制中学校への進学のために故郷を離れ松江市に出て、東京へのさらなる進学流出を経た後、Uターンして初職をこの地域の新制中学校教員としてスタートし、その後政界入りして、再び県政から国政へと進んだ流転の経歴をもっている。

習熟度別クラス編成（島根方式）

横田高校はいつの時代も、成績上位者から下位者までこの地域のあらゆるレベルの生徒を受け入れてきた。それゆえに、学校内部ではカリキュラムに工夫を凝らす必要が生じる。そのため調査開始当時にも三年次の五クラスは進路別に細かく分けられていた。その内訳は就職コース（Ⅰコースと呼ばれている）が三クラス、進学コース（Ⅱコースと呼ばれている）は二クラスであった。さらにそれぞれの内部は、就職コースが志望先業種によって二通りに分けられ、進学コースは、習熟度によって国公立大学進学を目指すクラスと、私立大学と短大への進学を目指すクラスに分けられていた。これは調査以前から現在まで、ほとんど変わらないシステムである。そして表立って言われることは少ないものの、それぞれのクラスは、一般企業就職、公務員試験と専修学校進学、私大短大受験、国公立大学受験（大学入試センター試験受験コース）のカリキュラムに従っているものと生徒間でも理解されている。また二年次以下は、おおむねこの三年次のクラス編成の準備段階と見ることができる。なお、このような横田高校のクラスの状況は専修学校への進学希望者が増えた影響などで、一九九〇年代後半からは若干弛緩してきているという。

すでに述べたように、郡内では高校入試には厳しい選抜の機能はなく、希望者全入に近い状況にある。その反面、高校卒業者を受け入れる郡内の求人数には限りがある。横田高校はこうした状況のもとで、主要な教育機関として人材を振り分けてきた長い歴史をもつ。企業就職、公務員、私大・短大進学、国

公立大進学という四つのクラス分けは、このように幅広いレベルの入学生を適切な進路へと導くために、長年にわたって培われてきた知恵によるものであろう。また五クラスのうち二クラスが大学・短大への進学コースに充てられているというのは、全国の状況（大学・短大進学率が四〇％強）とほぼ一致している。さらに社会学でマニュアル職と呼んでいる、製造工程、運輸職などの職種への就職クラスが五クラスのうち二クラスあるというのも、全国平均とほぼ同じ割合である。

ちなみに、就職コースのなかの、生徒たちに「公務員志望」とみなされているクラスは、採用試験を受ける郵政職員や、土木関連の事業所職員、あるいは第三セクター方式で運営されているサービス業、ＪＡ、金融機関の支店勤務、電力会社営業所、ＮＴＴ、その他のホワイトカラー職および専修学校進学などの中間的な進路をまとめたものである。国や県からの財政補助金に頼りがちなこの地域では、公共事業で確保される雇用は少なくない。

さて、筆者がこの高校の学校要覧を初めて見たとき、全国の他校と比較して、何よりも目立っていたことは、進学クラス二クラスのうちの一つが国公立大学進学を目指すクラスと決められ、ここに定員いっぱいの四五名が在籍していたことであった。全学年一九五名中、四五名という大学入試センター試験（以下センター試験）受験者数はいかにも多い。そして実際にこの最上位クラスからは、例年二〇名前後の国公立大学合格者を出している。同年人口の一〇％というのは、学校基本調査をもとに算出した一九九〇年代の国公立大学進学率の全国値とほぼ一致する。

こういう表現をすれば読者は、いかにも平均的な、これといって特徴のない高校であるように思われ

るかもしれない。しかし、後述するように出身階層（保護者の生活状態や経済力）がどちらかといえば社会の「中および下層」、すなわち中・低学歴、低所得、低威信に偏った山間地域で、全国の他地域と全く遜色のない進学者数を叩き出していることは、じつは驚くべきことである。しかも校区内にあるのはただひとつの小さな県立高校であり、そこが一流大学への進学から地元企業への就職斡旋まで一手に受けもっているというのだ。

とりわけ、予備校も塾もないこの地域で、成績上位者の進学を全国平均と同じ程度に保つのは容易なことではない。地域や保護者や学校のもつ文化的な要素が弛緩しがちなので、漫然とした高校教育では生徒の進学意欲を昂揚させることが難しいからである。そこで、これを可能にするためにこの地方県で確立されてきたのが、島根方式とも呼ばれる、各高校内部での徹底した習熟度別クラス編成である。これについて簡単に説明しておく必要があるだろう。

三年A組は、教員や保護者に高進度学級と呼ばれているクラスにあたる。生徒たちの間では、「ハイクラス」という無邪気な表現がなされることもある。高進度学級とは、予備校、進学塾や家庭教師などの学校外の教育産業のない地域で、教員による正規の授業だけをベースにして、大学受験において全国の進学校に劣らない結果を出すためにとられる授業体制である。具体的には、英語・数学などの主要科目の習熟度（学力レベル）によって、クラスを細かく分け、それぞれの学習進度、習熟度に差を付ける制度である。この指導方法によって、生徒の学業レベルの幅の広い郡部の中小規模の高校においても、四〇～四五名という少ない単位での進学予定者の「輪切り」が可能になる。ちょうど大手予備校で入校試

験の成績別にクラスが編成されるのと同様に、高校生活の単位であるクラスが、志望先と学業成績（正確には習熟度）によって振り分けられているのである。また、入学時に学科やコースを分ける場合とは違い、クラスのメンバーには、毎年、若干の入れ替えがあり、これも生徒間の競争を促す要因となる。

これにより高進度学級では、同じような成績で同じような志望をもつというクラス内の学力面での斉一性が保たれ、好成績を目指す受験生としての緊張感は、否応なく持続する。また、平常授業の進度が早められているので、課程内での学習量は通常のクラスより多くなり、その分だけハイレベルの受験対策が行なわれる。定期考査の出題もクラスごとに異なることがあるという。

島根県内の、さらに規模の大きい普通高校では、この方式をとることによって、文科系の高進度学級、文科系の通常進度学級、理科系の高進度学級、私立文科系対策コース、理数科というように、細かくクラスの性格が区切られている。横田高校のような中小規模校においては、就職コース、進学コースと大別されたうちの、進学コースのなかを、センター試験を受験するための（高進度）クラスと、私立大学や短大を受験するクラスに分割しているに留まる。ともかく、この習熟度別クラス編成によって、横田高校の最上位の四五名だけは、ちょうどエリート進学校を切り取ったような成績と進路希望構成の集団を形成していたのである。

調査当時ここでは、一～六時限という正規の授業の他に（公表されたカリキュラム上には表れない任意受講の）早朝の「〇（ゼロ）時限」、放課後の「七時限」と呼ばれる補習授業があった。クラスの国公立大学進学希望者のほとんどがこの補習授業を進んで受講していたので、単純に考えれば、かれらの総授業時

間は三〇％以上増える計算になる。また、夏期休暇中には、やはりほぼ全員が連日登校して補修授業（原則としては、これも任意受講）を受けた。さらに三年の秋以降は、センター試験の対策として、土日や休日にも制服を着て登校して、学校で受験業者の模擬試験を受験することが毎週のように熱心に行なわれたという。言うまでもなく最終目的は国公立大学合格であり、クラス全員がセンター試験を受験している。

学校文化を維持する教員

ここで横田高校の教員についても見ておこう。横田高校には、進路指導スタッフとして優秀な教員が次々に派遣される。なかでも前述した島根方式、つまり学校主導の受験対策のノウハウを、他に先駆けて三〇年ほど前から完成させていたといわれる松江市内の進学校からは、かわるがわるベテラン教員が赴任してくる。これは県の教育委員会が策定している市部と僻地の間の教員の人事交流促進の制度のためだといわれている。

こうした人事交流の成果もあって、島根全県を見ると、進路指導の進め方には現在ではどこの普通高校でも大きな違いはなくなっているようだ。しかしそれでも、それぞれの地域の産業構成、保護者の学歴水準や経済的な余裕、高等教育機関へのアクセスの容易さなどと共鳴しながら、それぞれの高校には独自の学校文化が形成されている。例えば、国立大学が身近にあり、文化・産業の中心地である松江市、あるいは出雲市を抱える東部（出雲地域）では、西部（石見地域）や隠岐郡よりも大学への進学熱が高く、

進学校としての学校文化が育まれやすいといわれる。また校区の割り振り方、規模や学科構成にも、各校それぞれに細かな特色がある。

それゆえに本書の舞台となる横田高校も、郡部の中小規模の県立普通高校としての共通の特徴と、この学校に特有の学校文化を兼ね備えている。筆者が見るところ、横田高校は、谷筋の最上流域の辺鄙な山間地域を校区とするわりには、大学進学志向の強い学校文化を培ってきたようである。例えば近隣には、生徒を私立大学に進ませるだけの経済的余裕がない、農繁期には定期試験よりも田植えや稲刈りを手伝って欲しい、などという保護者の意向のために、生徒の学習意欲が十分に高まらず、大学進学指導に熱が入らない地域がある。また、中学校での成績上位者や職業高校への進学希望者を、高校入試時に市部の進学校、高専、職業高校に進ませることに積極的な地域もあるという。同じ郡部の普通高校といっても、このような地域差が存在するのである。

横田高校に関してはこの点について特殊な教育事情が作用している。一九八〇年代以降、仁多郡内の中学校においては、下流域や松江市の高校への「越境」進学者を極力出さないようにして、地元中学校の成績上位者を、残らず横田高校に進学させる方針がとられたという。「地域振興のために横田高校を盛り立てて行こう」という郡内の中学教員の一致した行動であったらしい。このことは横田高校の大学進学志向の強い学校文化の形成・維持に大きく貢献したものと考えられる。郡内唯一の高校である横田高校に成績上位者を託す郡内の中学校と、かれらを高進度学級に受け入れて、着実に学業成績を伸ばす体制を整備した横田高校の波長が合って、毎年のように東大、京大、阪大などへの進学者が出始めたの

は、この時期以降のことである。

一九九〇年代前半にここに赴任した教員たちは、松江地域などの自分の居住地を離れて、多くは県が用意した教員住宅に単身で住み、四～八年程度の赴任を交代で繰り返していた。ただし現在では遠距離をクルマで通勤している教員も多いと聞く。いずれにせよ、こうした教員たちは大規模校で身に付けた島根方式のきめ細かい大学受験指導を、この高校で熱心に実践する。

県内の公立普通高校のシステムの共通性と学校文化のわずかな差異ゆえに、地域的条件と規模が似通った近隣の高校間では、教員の間で競争意識や対抗心が生じることになる。例えば、奥出雲地域には横田高校のほかに、下流域に校区をもつ三刀屋（みとや）高校、大東（だいとう）高校という、規模の同じような県立高校がある。これら三校は校区の区切り方や周辺校との関係、学校の歴史が微妙に異なるのであるが、大学進学者の総数、国公立大学への合格者数、とりわけ地元の島根大学への現役合格者総数で競り合っていて、教員間では他校の進学実績がよく話題になるという。

各年度の大学進学者の動向は、指導した教員の実績として有形無形の評価の対象となる。教員の側のこうした教育者（職業人）としての意欲を感じるのか、進学クラス（高進度学級）では、推薦入試などで第一志望の進路への進学がすでに決定している生徒もセンター試験を受け、場合によっては二次試験も受けてダミーの合格者となり、母校の合格実績に貢献することがあったとも聞く。

教員の入れ替わりにもかかわらず、一度形成された学校文化は、容易には変わらずに維持され続けることになる。横田高校ではどの教員も教材作りに熱心に励み、正規の授業時間外の補習授業を当然のよ

うに受けもつ。また、休日を返上して業者テストの監督を行なうこともあるが、これもボランティアを原則としているという。さらに、三年生になると生徒の受験対策のための個人単位での取り組みが必要になるので、意欲のある生徒には、小論文、数学の記述式問題、英作文や英文和訳などについて、教員がそれぞれの生徒に課題を与えて解かせ、個別にアドバイスを与える「添削指導」をすることもあったと聞く。こうした授業外学習は、大都市の高校生ならば、塾や予備校での講義、家庭教師などで別途補うのが当たり前のことである。しかし、この地域にはそうした選択肢がない。それゆえに、もし高校の教員たちがきめ細かな受験対策の手を緩めれば、生徒たちはそのまま行き場を失ってしまうのである。

ある中堅教諭によれば、こうした教員の進路指導の熱意は、三年生の年度末にその学年の大学進学実績を見たとき、教育者としての職業的な達成感によって報われるのだという。

生徒の側から見るならば、高校で受ける働きかけの密度は、カリキュラム外での教員の指導の恩恵を受けて、他県、他校、他コースのそれとは比較にならないほど濃いということになる。さらに大きな視野でこれを見るならば、エリート予備軍の生徒たちは、親や地域ではなく、島根県の教育政策を忠実に実践する県立高校から、莫大な教育投資を受けていることがわかる。この実態を目の当たりにすると、いったいなぜ、島根県はこのエリート予備層だけにこれだけ大きな投資をしなければならないのだろうか、という疑問が湧いてくる。その謎解きは終章であらためて行なわれる。

大学進学の意味するもの

すでに触れたとおり、この当時島根県内にはいくつかの高等教育機関があったが、国立の島根大学、県立島根女子短大は松江市にあり、島根医科大学（国立）、鳥取大学医学部（国立）、医療関係の短大や専門学校は出雲市や隣県の米子市にあった。しかし地理的条件ゆえにこれらの高等教育機関への自宅からの通学は全く不可能であった。それゆえに三年A組に在籍した生徒たちにとっては、高校卒業後、全員が故郷仁多郡を離れることは、暗黙の前提となっていた。かれらは、はっきりと戻るあてがあるわけでもなく、またその先に何が待ち構えているか見極める余裕もないまま、それでも必死になって巣立つための羽ばたきをしていたということになる。

かれらの状況を、対照的な社会環境に暮らす阪神地域の高校生と見比べてみよう。阪神地域の高校生が進学先を考えるとき、自宅からの通学圏内には、難易度でいえば最難関の国立大学、有名私立大学から入試のハードルの低い短大や専修学校まで、分野で見ても文科系、理科系、資格・技術系と、あらゆる高等教育機関が用意されている。また就職を考える場合でも、製造業、運輸業から人気の「カタカナ職」まで、農林漁業を除くほとんどの産業の、あらゆる職種に自宅からアクセスすることが可能である。もちろん、あえてそうしないで首都圏や地方に進学して、自宅を出るという選択肢もある。そのまま自宅で両親と暮らし、パラサイト・シングル（山田昌弘　一九九九）を決め込んだとしても、短期雇用先、つまり適当なアルバイト先はいくらでもある。娯楽も友人ネットワークもかれらの欲しいままである。

またそれゆえに、阪神間の高校三年生では、この一五年の間に、進学についても、職業についても、家族生活についても、明確な方向を示さ（せ）ない、態度保留の傾向が着実に広まってきているという。

都市の自由と豊かさがもたらす不透明さである（尾嶋史章編著　前掲書）。

一方、もはや想像に難くないように、奥出雲ではそういう意味での若者の生活の自由度は極めて低い。進学・就職の選択肢の少なさだけではなく、海外旅行やアルバイト、近隣での独り暮らしや異性との同棲などの生活体験、人気アイドルのコンサートやロック歌手のライブに行くチャンス、あるいは服装や髪型に至るまで、ライフスタイルの選択肢が都会とは比べものにならないほど少ないのである。今でこそ、携帯電話のアンテナがこの地域にまで設置されるようになったものの、一九九〇年代前半の調査当時は、都市部との生活の差違はもっと大きかった。

仁多町出身のある大学生は、「成人式を八月に実施するところですから」という表現を使って、筆者にこの地域の若年層の実情について説明してくれた。近年、都市部の成人式が荒れて刑事事件まで発生し、それが大きな社会問題とされたことは記憶に新しい。ところが若年層流出の著しい地域の自治体が深刻に心配しているのは、式場が荒れることではなく、多くの新成人が集うことができるように日程調整をすることだという。都市に出て働く若者も大学生も、ともに帰省しやすい八月中旬に成人式をすることは、全国の地方県の中山間地域では慣例化してすでに久しい。こうすれば正月明けに再び帰省する必要もないし、晴れ着も着ないで軽装で済むし、積雪の心配もない。「八月に成人式を実施する」地域という区分は、このような意味において、先に述べた「裏日本」特有の若年層の数の少なさを端的に物語る的確な表現である。

ここで挙げたようなさまざまな生活環境は、この地域に育つ若者たちの社会的態度に特有の影響力を

もち、同時に、不透明な視界の先にある都市への進学流出を刺激的なものに見せることになる。

1　島根県の場合、郡部では事実上、一郡一校一学区の小学区総合制がとられている。ところが、小学区といってもその面積が広大なため、生徒数の時代ごとの増減には、学校の統廃合や新設ではなく、クラス数（各校の募集定員）の増減で対応してきた。

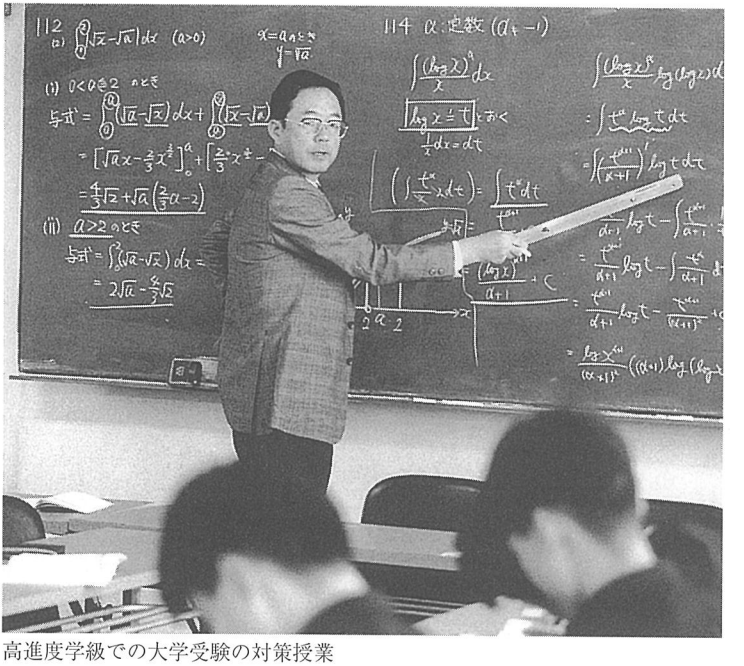
2　ただし隠岐郡では、全く別の事情から「輪切り」に近い状況が成立している。

3　調査当時は県内の高等教育機関はこれで全てであったが、一九九〇年代後半からは郡部にも小規模の専修学校や専門学校などが配置されつつある。

4　このような中等教育の社会史を知るには、天野郁夫ら（同編　前掲書）の丹波篠山の研究がたいへん参考になる。ただし、丹波篠山地域には中等教育機関が複数校あったのに対し、奥出雲には横田高校（の前身）ただ一校しかなかったことは大きな相違点である。

第3章

世代間移動と地域移動



高進度学級での大学受験の対策授業

対象クラスの特性

この章では三年A組の世代間移動と地域移動について見ていく。初めに対象となる生年世代の特性を確認しておこう。かれらは、いわゆる第二次ベビーブーム世代にあたる一九七四～七五（昭和四九～五〇）年生まれの若者たちである。これは年齢別人口構成のピークにあたる学年のひとつである。それゆえに前年度からの大量の浪人も加わって大学受験の競争率も高くなった。

しかも、かれらの大半が大学の四年生になった時点での就職戦線は、たいへんな「狭き門」になった。平成不況下で膨れ上がった余剰人員に産業界が喘いでいたところに、新卒者人口が増加したことにより、求人倍率が激減したのが原因である。ちょうど一世代前のいわゆる団塊の世代も、似たような状況に遭遇しているが、高度成長期にあった当時の日本は、若い大卒者を吸収するだけの余裕をもっており、この点では第二次ベビーブーム世代の大卒者の直面した悲劇とは明らかに異なっていた。ともかく、かれらは青年期の大きなライフ・イベントにおいて、たて続けに容易ならざる状況での選択を迫られたことになる。現在かれらは大学や大学院を卒業し、多くは何らかの職に就いている。本書執筆時点では二七歳になろうとしている。

かれらのほとんどは、高校卒業までこの地域を離れて暮らした経験をもたない。このクラスには、高校在学中の海外留学経験者もいなければ、帰国子女はもとより、（把握している範囲では）転入生さえもい

ない。そういう意味で均質な生活体験をもつ集団である。さらに、前章で見たような地方県島根に固有の地域移動の傾向や、山村特有の閉鎖的な地域性も、かれらの一八歳までの生活環境を特徴付けている。ゆえに、それぞれの個性を高校時代に伸ばすといっても、この地域で日々を暮らしている間は、現代社会が与えるあふれんばかりの選択肢を自由に選べる状況にあるわけではない。かれらにとってまず先決なのは、それぞれの個性に見合った選択肢のあるステージ、つまり都会の大学生というステップへと歩みだすことだったのである。

この若者たちは、大学・短大への進学、初職への就業という二つの時点、そしてやがて訪れるであろう結婚・子育てという機会に、かれらに特有の判断材料や制約条件に直面していく。本章では対象クラス全体のデータからこの点を明らかにしていく。

卒業生の進路を追う

世代間移動とは、どのような社会階層に生まれて、どのような社会階層に至ったかという地位の移動を分析する社会学の枠組みのことである（一六五頁参照）。これに対して地域移動とは、本書の場合でいえば生まれ育った仁多郡を離れた後、どのような地域での生活を経て現在の居住地に至ったかという個人の地理的移動を追う枠組みである。ここでは地域移動にも学歴・職歴を関係付けながら見ていく。

初めに大学進学状況を見ることにしよう。当時の横田高校の卒業生の進路は、国公立大学進学、私立大学・短大進学、公務員と専修学校、就職というクラスの編成（学校内トラック）にだいたい従ったもの

であった。そのうちの大学進学者の様子を見るために、一九九〇～九九年の一〇年間の高進度クラスからの進学先を集計してみた。資料として用いたのは横田高校同窓会（稲陵会）の会員名簿である。表3-1はその結果を示したものである。この表からは、次の四点を指摘できる。

第一に、進学先では地元の島根大学への進学者数が圧倒的なトップであり、全体の二〇％を越える生徒が進学しているということがわかる。第二には、国公立大学への進学者が多く、とりわけ近隣の中国五県の国公立大学への進学者がみごとに数の上での上位に並び、全体の四割近くを占めていることを指摘できる。この同心円状の進学先の地理的分布のため、この表を見た瞬間にこれが島根県の高校についての集計結果であることが、だれにでも判読できるほどである。つまり、進学先大学の難易度による単純な「輪切り」ではなく、最寄りの高ランク大学に進学していくという、この地域に固有の力学の形跡を見ることができるのである。なお難関大学ほど遠隔にあるという傾向は、地方県からの進学における大前提である。

第三に、「旧帝大」といわれる大阪大学に七名、京都大学に六名、名古屋大学に四名、東京大学に三名、九州大学に二名、さらに首都圏や関西の名門私立大学など難関校に意外に多数の進学者を出しているということもわかる。なおこの表内の数は実際の進学者数であるが、滑り止め併願を含めた合格実績の総数でいえば、その数はさらに多くなる。そして第四には、それにもかかわらず北海道から沖縄まで全国各地の多くの大学名が、このリストに挙がっているということである。

念のために、就職者も含めた卒業生全体の進路動向についても一九九一～一九九五年の学校要覧から

表3-1　横田高校高進度学級からの進学先（1990年代）

進学先大学	人数	有効パーセント	累積パーセント
島根大学	73	20.39	20.39
広島大学	16	4.47	24.86
鳥取大学	15	4.19	29.05
山口大学	14	3.91	32.96
岡山大学	13	3.63	36.59
大阪大学	7	1.96	38.55
京都大学	6	1.68	40.22
呉大学	6	1.68	41.90
愛媛大学	5	1.40	43.30
広島文教女子大学	5	1.40	44.69
神戸大学	5	1.40	46.09
徳島文理大学	5	1.40	47.49
高知大学	4	1.12	48.60
山形大学	4	1.12	49.72
創価大学	4	1.12	50.84
長崎県立大学	4	1.12	51.96
島根県立女子短大	4	1.12	53.07
徳島大学	4	1.12	54.19
名古屋大学	4	1.12	55.31
立命館大学	4	1.12	56.42
茨城大学	3	0.84	57.26
下関市立大学	3	0.84	58.10
関西大学	3	0.84	58.94
群馬大学	3	0.84	59.78
広島修道大学	3	0.84	60.61
埼玉大学	3	0.84	61.45
滋賀大学	3	0.84	62.29
神戸市立外語大学	3	0.84	63.13
図書館情報大学	3	0.84	63.97
大阪教育大学	3	0.84	64.80
東京大学	3	0.84	65.64
福岡県立大学	3	0.84	66.48
明治大学	3	0.84	67.32
その他の大学など	117	32.68	100.00
合計	358	100.00	
データなしと就職者	76		
総計	434		

その他の大学などは進学者2名以下。内訳は以下のとおり。クリストファー看護大、愛知教育大、岡山商科大、岡山理科大、九州大、九州東海大、広島県立大、広島女学院大、高知女子大、高梁学園大、上越教育大、神戸学院大、静岡県立大、早稲田大、筑波大、中京大、同志社大、日本体育大、福岡工業大、兵庫県立看護大、北九州大、安田女子大、横浜国立大、岡山県立大、花園大、関西学院大、宮崎大、京都外国語大、京都女子大、熊本大、広島経済大、広島工業大、広島女子大、香川大、高崎経済大、山口女子大、山梨大、四国学院大、就実女子大、女子美術大、新潟大、西九州大、西日本工業大、千葉大、川崎医療福祉大、大阪学院大、大阪国際大、大阪市立大、大谷女子大、大東文化大、中央大、天理大、電気通信大、都留文科大、東京理科大、同志社女子大、奈良教育大、奈良産業大、奈良女子大、奈良大、日本大、日本福祉大、姫路工業大、姫路獨協大、富山大、福岡教育大、福岡女子大、福山大、北見工業大、麻布大、名古屋経済大、名城大、琉球大、獨協大、島根県立国際短大、三重短大、神奈川県立外語短大、聖徳学園女子短大、岡山女子短大、尾道短大、青葉学園短大、国立米子病院付属看護学校、島根リハビリテーション学院、予備校以後不明6名、在米留学2名。

確認してみた。その結果を見ると、いずれの学年でも一般企業への就職者はほぼ五〇％であり、専修学校・短大への進学者がほぼ二〇％、四年制大学への進学者は一定して三〇％前後であって、この比率に大きな変動は見られなかった。就職先企業名などの細かい情報は省略するが、自宅通勤の可能な周辺地域を地元と呼ぶとするならば、地元には企業就職者の半数（学年全体の二五％）程度が残るようである。[1]

ということは、卒業式を終えると横田高校の卒業生（すなわちこの郡内のほとんどの同年青年）のうちの七〇％以上が、何らかのチャンス（就業機会・進学機会）を求めて都会に出て行くということである。なおこれ以降、卒業生のうちの大学進学者、つまり郡内の選りすぐりの俊英に絞って見ていくことにするが、就職コースの進路が三年生の一〇月までにほぼ決まるのに対して、かれらの流出先が最終的に定まるのは、卒業を間近に控えた高校三年生の三月である。

学歴の上昇移動

次にかれらの世代間移動について細かく見てみよう。表3-2は質問紙パネル調査のデータ（不明四サンプルを含む）を集計し、現在の職業によって分類したものである。ここにはかれらの出身階層（父学歴、母学歴と高校三年時の父親の職業を指標としている）と、高校三年の受験前（一九九二年一〇月）に本人が将来就きたいと考えていた職業（自由回答）、それから六年を経た二四歳時（一九九八年一〇月）の現職と、二四歳時の希望職種（自由回答）を示している。要するに対象者のライフコースを職業階層という観点で測量していった「断面」のデータである。

表内を見てまず指摘できることは、両親の学歴があまり高くないことである。かれらの父親の生年は一九四五（昭和二〇）年前後、母親の生年は一九四八（昭和二三）年前後であり、高校進学率の急増期を経験した団塊の世代にあたる。この父母たちの世代の高校進学率は、全国的には男女ともに六〇％前後、大学・短大進学率は二〇％強（尾嶋史章・近藤博之　二〇〇〇）であったので、これが父母の学歴として期待されるひとつの標準値である。しかし大学生の子をもつ親としては、だいたい四〇～五〇％が大学・短大卒というのが一九九〇年代の標準的な値であろう（兵庫県南東部で一九九七年に実施した調査のデータによる）。ところが、このクラスで回答を得られた六二名の保護者のうち、大学・短大卒業の学歴をもつのは、わずか一〇名（一六・一％）にすぎない。なかでも父母ともに大学卒と回答した保護者は、教員の子弟の二例に見られるのみである。

比較のために県内で同時期に調査をした、松江市内の県立高校の三年生の高進度クラスの保護者データの集計も確認してみたのだが、そこでは四五サンプル中、父親一四名が大卒、母親では短大卒業者八名、大卒者四名であり、高等学歴修了の父母は三年A組の倍以上の総計二六名であった。

このように、国公立の難関大学への進学を志したこの生徒たちの保護者の学歴は、いずれの数字と見比べても明らかに低い。もっとも、ホワイトカラー職を吸収する産業基盤のないこの地域では、大卒の成人数が多くはないことはデータに頼らなくても歴然としている。言い換えれば、ここで見ていく若者たちは、決して全国レベルで見比べて、選りすぐりの上流家庭の子弟といえるわけではなく、標準を少し下回る生活水準、文化（学歴）水準を出自とする若者たちだということになる。さらにこの地域への

職歴移動

24歳時職種	24歳時希望職	性別
中学校教員	現職継続希望	男
中学校教員	現職継続希望	女
中学校教員	現職継続希望	男
小学校教員	現職継続希望	女
小学校教員	現職継続希望	女
盲学校教員	現職継続希望	女
養護学校教員	現職継続希望	女
公務員（町保母）	（回答なし）	女
保健婦	現職継続希望	女
助産婦	現職継続希望	女
設計会社設計技師	経営者	男
公務員（国家農政）	現職継続希望	男
公務員（県職）	現職継続希望	男
公務員（県臨時職）	ケアマネージャー	女
公務員（県臨時職）	地方公務員	女
公務員（町役場）	（回答なし）	男
不動産販売事務	経営者	女
製薬会社一般事務	経営者	男
アパレル一般事務	経営者	男
情報技術一般事務	現職継続希望	女
情報技術一般事務	公認会計士・税理士	男
金融会社一般事務	現職継続希望	女
金融会社金融事務	何か自営業	女
自営自動車販売	事業主	男
病院調理補助員	飲食店経営	女
（大学院生）	中学校教員	女
（大学院生）	中学校教員	女
（大学院生）	養護学校教員	女
（大学院生）	美術家	女
（大学院生）	研究職	男
（大学院生）	技術職	男
（学部学生）	弁護士	男
（学部学生）	会社員	男
（無職）	製造業	男
（専業主婦）	行政書士	女
		男
		男
		女
		女

表3-2　3年A組の世代間

分類	父・母学歴	父職種（高校3年時）	高校3年時の希望職
専門職	高校・高校	衣料品小売・自営業主	（回答なし）
	高校・高校	不明・自営業主	「高校の先生」
	大学・大学	公務員・教員・係長	「サラリーマン」
	高校・高校	郵政・配達・職長	「教師」
	高校・中学	林業・経理・課長	「小学校か中学校の先生」
	・	（回答なし）	「小学校教員」
	短大・高校	建築・設計・課長	（回答なし）
	中学・中学	林業・自営業主	「アニメーター」
	高校・短大	公務員・事務・課長	（回答なし）
	高校・高校	機器製造・製造工程・一般	「養護教員」
	中学・中学	（回答なし）	「電機メーカー勤務」
事務職	高校・短大	公務員・事務・職長	「地方公務員」
	・	（回答なし）	「市役所」
	・	（回答なし）	「障害児を対象とした特殊教育」
	高校・高校	公務員・事務・課長	「イラストレーター」
	・中学	（回答なし）	「小学校の先生」
	高校・高校	金融・事務・課長	「小学校の音楽の先生」
	中学・中学	シイタケ栽培・自営業主	（回答なし）
	高校・中学	建築・自営業主	「サラリーマン」
	高校・高校	電気工事・施工・一般従業	（回答なし）
	・	（回答なし）	「自営業」
	高校・中学	木材製造・自営業主	「ツアーコンダクター」
	高校・中学	稲作・肉牛肥育・自営業主	「小学校の先生」
自営ほか	・	（回答なし）	「銀行員」
	高校・短大	金融・事務・課長	（回答なし）
学生	大学・大学	公務員・教員・課長	「医者」
	高校・短大	公務員・事務・係長	「幼稚園の先生」
	大学・高校	公務員・事務・係長	「小学校の先生」
	高校・中学	公務員・事務・課長	「作家」
	高校・高校	郵政職員	「歴史学者か教員」
	・	（回答なし）	（回答なし）
	高校・高校	衣料品小売・自営業主	「外交官または国家公務員」
	高校・高校	公務員・測量設計・係長	（回答なし）
無職	・高校	（回答なし）	「機械整備士」
	中学・中学	建設・運転手	「テレビ局内の何か」
不明	中学・中学	公共交通・整備・職長	（回答なし）
	高校・高校	公務員・事務・係長	「公務員」
	高校・中学	食品販売・経営・管理職	「考えていません」
	・	（回答なし）	「歴史学者」

現職で分類表示。「　」内は回答原文のまま。

流入人口が少ないことから類推すると、父母の多くは、対象の生徒たちと同窓、つまり横田高校卒業生と考えられる。

教育社会学では、それぞれの子どもの家庭の教養（蔵書や百科辞典の数、音楽や絵画演劇などの趣味）、知識や言葉遣い、あるいは子どもに高学歴を与える親の意欲（教育期待・教育アスピレーション）などが、子どもの学業成績や教育達成に影響するということが注目されてきた。もちろんこれらの親のもつ要因は、親がどんな教育を受けたかということ（両親学歴）と極めて密接な関係にある。こうした文化資本の多寡が次世代の学業達成を決めるのであれば、何世代を経ても社会的地位の上下の構造には大きな変動が起こることなく、前世代の上下関係が次世代でも維持されてしまうという問題が生じることになる。この考え方は文化的再生産論といわれ、階級境界がはっきりとしていて、階級社会としての歴史をもつフランス社会、イギリス社会、アメリカ社会では相応の説明力のある理論である。日本社会においては、この理論は計量的なデータからは、なかなかすっきりとは裏付けられないのだが、それでもその実在を信じる研究者は多い。

さて、ここで三年A組においてはどうかということを考えてみよう。この表で見るかぎり、このエリート予備層の若者たちに、家庭の文化資本（親の学歴や都市的な文化への近接性）による文化的再生産という理論は、どうもうまくあてはまりそうではない。むしろ、かれらの進学行動には、出身階層の不利な条件をものともしない、全く異なる力強さを感じる。

過去何十年かにわたる、横田高校からの進学の経過を顧みるならば、仁多郡という地域は大学進学者、

すなわち横田高校の成績上位者を、たゆむことなく一八歳で都会に流出させ続け、結果的に高校卒地元就職の人材を残すという、転倒した選別を毎年繰り返してきたことが推測できる。そしてこの地元に残った次世代形成層が、横田高校の生徒の保護者となっているというわけである。

いま仮に、この地域に農林関係の職業高校や若者を受け入れる地場産業があり、地元の成人たちには学歴社会への参入をよしとしない文化があるとしよう。そしてその脱学校の階層文化を引き継ぐ子弟が大学進学を自ら忌避し、やがて地元で親となり、次世代の子どもたちの脱学校化を繰り返しているとしよう。もしも仁多郡内にこのような物語があるのならば、既存理論をあてはめた説明の余地がないわけではない。つまり地域社会が文化的再生産を繰り返す、閉じた循環構造が成立しているというストーリーが成り立っていれば、P・ウィリス（訳　一九八五）がイギリスの工場労働者に見たような「ハマータウン型」[2]の再生産論が適用できることになるのである。実際にそういう地域が日本のどこかにはあるかもしれない。

ところが、こと仁多郡に関しては、この論理による説明がほとんどあたらないことがわかる。第一に、この高校の保護者の家業は、被雇用ブルーカラー職、公務員などのホワイトカラー職、あるいは小売などの自営業による多様な構成であり、専業農家（林業を含む）はこのサンプルでは四ケースしかない。詳しく尋ねてみると、兼業で田畑を守っている家庭も確かに多いのだが、家計はあくまで被雇用職からの賃金で営まれている。仁多郡を支える産業はこの時期すでに農業のみとはいえない状況にあり、農業階層の再生産という単純な図式はもはや成立していなかったのである。

第二に、親たちは学歴社会の社会認識、つまり学歴メリトクラシーへの信頼をしっかりと保持しており、地域全体が大衆教育社会に包摂されているのである。具体的に言えば、この地域では、学校の成績が優秀で国立大学を目指せると薦められる高校生がいれば、保護者は家計を切り詰めてでも、その子を都会の大学に出すことが多い。そこには「地元には子どもたちのうちのだれか一人が残って（戻って）、家を継げばそれでいい」という判断があるという。つまりこの地域では、自分自身が高卒就職＝地域残留層であるはずの親たちが、我が子に関しては「立身出世」の学歴社会観に従って、成績のよい子から順に、無限に流出させているのである。無限にというのはちょっと言い過ぎかもしれないが、転倒した若年層の選別を繰り返しながら、大学進学者を全国平均とほぼ同率で、枯渇することなく何十年も輩出し続けてきたという横田高校の実績は、教育社会学の一大理論、文化的再生産論を知る筆者には、たいへんな驚きである。

それでは、この青年たちの大学進学のための「資本」はいったいどこから来ているのだろうか。その答えは、文化的再生産論からはひねり出すことはできない。その源泉は、前述したような親の肯定的な学歴社会観と、公立の中学校や高校における県主導の公教育より他には考えられないのである。この地域では、教育の専門家であり県職員でもある中学・高校教員に、親たちは純粋無垢に我が子の立身出世の夢を託す。他方、県主導の公教育は、親から預かった次世代を、地方県の命運をかけてエリート層として伸ばしていく。

大学進学をしなかったり、都会での定住を選ばなかったりした地域残留層の両親たちは、自分のきょ

うだいや友人たちが、故郷を離れ都会の大学や短大へ流出した様子を見ている。そのうえで自分の子どもについて親として考えるときに、そうした大衆教育社会の流出ルートをひとつの望むべき経路とみなしているのかもしれない。

この地域に足を踏み入れたときにわかることなのだが、仁多郡では一戸一戸の家屋が県内の他地域よりも大きい。しかも、よく見るとそれらの多くは現在の当主の代になってから建て替えられているか、比較的こまめに手入れをされてきた立派な赤瓦屋根の住宅である。また各戸の耕地面積も広い。これはこの地では一子相続で家が継承されてきたことを示している。

そうだとするとその裏には、それぞれの家庭が余剰の自己資産から非相続子への学費を出し、どんどん都会へと送り出してきた事実があるはずである。これは、天野郁夫ら（同編　前掲書）が丹波篠山で描き出した二〇世紀前半の学歴社会の実態とも共通する構図である。要するに学歴メリトクラシーによる産業社会への人材配分の力と、都市労働市場の吸収力を借りることで、各戸の一番の俊英たちを失いつつも、経済的安定を確保し、地域社会の破綻をギリギリの線で防いできたのであろう。

ともかく、こうしてこの地域の秀才たちは、故郷にはありもしない大卒ホワイトカラー職に就くために都会に出続ける。それゆえにまた、郡内の成人の教育水準はなかなか都市部と同じレベルには至らないまま（つまり高校卒業までの学歴達成者が主体）で取り残されることになる。

手堅い職業志望

続いて高校三年時の職業希望を見てみよう。質問紙調査では、将来就きたい職業について自由回答を求めた。これを見ると当初からの教員志望（一二サンプル）が断然多いことが目を引く。これは無理からぬことである。なぜならこの地域で育ったかれらには、大卒ホワイトカラーの職業の身近なモデルといえば、教員ぐらいしかないというのが実情だからである。また大卒時の地元就職を考えるならば、教員というのは現実味のありそうな選択肢でもある。地元の幼稚園、小学校、中学校、高校の「先生」になるには、島根大学、広島大学、岡山大学などの、教員養成課程（ほとんどは教育学部）を出て、県の教員採用試験を受ければいいんだ、というようなトラック（道筋）が、生徒たちには唯一、目に見えて存在しているのである。

ただし、ここにもひとつのトリックがある。郡内には、毎年一〇名近くの教員を受け入れるだけの教職のポストは、どう考えてもあるわけはないのである。それゆえ実際に教員として郡内にUターンするのは、うまくいって一～二人、それも別の過疎地域などに赴任する県内での周流期間を終えた、三〇代半ばになってからというのが現実である。これは、まるで鮭や鮎の稚魚の放流を思わせるような確率である。そういうわけで教員志望とは、事実上郡外への流出を意味することになるのだが、この地域の教員や保護者は「戻って郡内で、教員をやればいい」という勧め方で、子どもたちの教員志望を後押ししてきたという。

教員志望以外の希望職種を見ると、公務員、サラリーマン、銀行員、電機メーカー社員、医者などが希望されている。これらもまた郡内に実在する大卒ホワイトカラー職である。このあたりまでは将来の夢というよりも目標に近い、手堅い職業志望といえる。これに対して、ひとたび現実世界の枠を外れると、アニメーター、ツアーコンダクター、イラストレーター、テレビ局内の何か、作家、歴史学者など、日々の暮らしでは見たことも経験したこともない、ある意味で突拍子もない職業名が並ぶ。とりわけ女子においては教員志望ではない場合、ほとんどがこれらの「夢想回答」である。この生徒たちが実際にデザインや旅行業の専修学校に進学を希望するのならば、彼女たちの考えはわからないでもないが、目前の進路はあくまで国公立大学である。そしてその先にそうした職をつかみ取ろうと、計画的に行動している様子もなかったようだ。とりあえず大学には進学するが、大学卒業後に自分がいったい何になるのかという具体的なイメージは、高校三年生の時点ではまだ固まっていなかったということだろう。あるいは彼女たちは、先の不透明さをじつはわかっていて、自我防衛のために、あえて夢を見ているのかもしれない。

クラス担任であった吉田寛教諭は、第二波パネル調査開始前の時点で話を聞いた際に、かれらの将来像に対する予測と期待を次のように言葉にした。

「結局、一八歳ですから、夢をもっているんですね。それが、多分なかなか実現しないと思うんですよ。みんな、思うようには行ってないと思います。だから、どういう過程でどうなるんだろうかな、と考えて研究をされるのは面白いと思いますね。特に山間の小さな町で育った子が、大きな夢をもって都

会に出て、それで、挫折というか心変わりしていく。みんながそうだとは言いませんけど、思うようには行っていないと思いますので。私個人としては、かれらが夢をもっと膨らませたり、着々とやっていたりしていることを期待しますけれど」

現在の職業と希望職種

進学先については後で詳しく検討することとして、先回りして六年後の二四歳時の現職を見よう。ここでは教員採用試験に合格し、正規の教員に到達している者が多い。なかには高校三年時からすでに教員を志しており、大学の教育学部（教員養成課程）に進学し、難関となりつつあった島根県の教員採用試験に現役合格し、実際に教員になったという猛者もいる。この他の専門職では、保健婦、助産婦、保母など公的機関における仕事が挙がっている。また事務職系でも、公務員として県の職員あるいは地方自治体の職員となっている例が多い。もっともこの学年の大学新卒時の公務員採用がたいへん厳しかったために、二年あるいは三年という非常勤職員の期間を過ごしているケースも多く、この調査直後の一九九九年四月時点（二四歳）での県職員、県教員への正規採用予定のケースが、これに加えてさらに五ケースある。大学院進学者の多くは教員養成系の修士課程に進んだ者たちで、正規採用までの期間を学生として過ごし、うまくいけば専修免許を獲得するという戦略で大学院に進学していたようである。

ここで、地方県における職業の選好や威信について少し考えておきたい。島根県のような地方県の場合、教員や保母、看護婦や作業療法士などの医療関係専門職、行政職の公務員などは、比較的人気の高

い職業である。逆にこれらの職は、専門職でありながら、都会ではそれほど社会的評価が高い職ではない。この選好の格差にはいくつかの理由がある。ひとつは、これらの多くが公務員であり、生活が安定しているということである。大資本の企業の少ない地方県では、普通の一般企業と公務員を見比べると公務員の給与レベルと安定性の魅力は大きい。また全国規模の大企業に就職すると、県外への転勤の可能性を伴うということも重要である。第二は、県内では大卒の専門・管理職の種類が少ないということである。もちろん法曹関係者、医師、政治家という職業は存在しはするが、それはごく少数である。そして官僚、巨大資本の企業の管理職（社長・重役など）、高度な技術を要する職業（例えばパイロット、株式市場のディーラー、先端の科学技術者）は、あくまで大都会の仕事であって、生活世界で身近に感じられる職業ではないのである。この事情は作家・芸術家、芸能人、タレント、スポーツ選手などの特殊な職業についても同様である。ゆえに地方県内という生活世界では、専門職公務員が事実上の最高ランクの職にあたるのである。第三は、大学進学流出者の多い地方県内では、残留若年層の学歴達成の水準が相対的に見て低いため、高学歴と採用試験合格が必須要件となる教員、公務員、医療専門職は、ある種の憧れをもって見られる職種であるということである。これらのことから、教員、医療専門職、事務職公務員は、地方県では間違っても中の上程度などではなく、最上位の職種とみなされているのである。

表3-2を引き続き見ていくと、このような職の他には、大手金融会社の事務、アパレルメーカー社員、不動産販売業、自動車販売業、システムエンジニアなど、通常の四年制大学卒業者に見られる事務・販売職の就職先が並ぶ。これは県外での就職を決めたという場合に多い。

最後に二四歳時の職業志望を見てみよう。これは、高校三年時と全く同じ質問で、将来就きたい職業を自由回答してもらった結果である。すでに希望の職に就き、それを継続したいと答えているのは、回答のあった三五名のうち一三名である。高校生のときの職業希望まで遡って確認すると、その大半が前述の教員志望のような、専門職と事務職公務員の初志貫徹タイプである。

他方では、現在の自分の職業生活を踏まえて、高校のときよりも現実的に、将来の独立や資格取得による地位上昇を考える回答も増えてきている。具体的には経営者・自営業、飲食店経営、公認会計士、税理士、行政書士という回答がそれにあたる。さすがに女子の「夢想回答」はここに至っては影を潜めている。しかし当初から具体的なイメージをもたないまま都市へ流出し、大学は卒業したものの、いましばらく漂流を続けそうな不安定な例も一、二ケースだが見られる。

大学進学による地域移動

次に地域移動を見てみよう。表3-3は質問紙パネル調査の有効回答サンプルについて、進学、就職という機会ごとの地域移動を捉えたものである。まず進学先を見ると、ほぼ全員が四年制大学に進学している。例外は女子の一部の短大進学と医療専門職へのコースである。内訳を学部で見ると、先に述べた国公立大学の教育学部の他は、経済学部、法学部、文学部、それに女子の外国語学部の英語学科（専攻）、男子の工学部進学が若干混じっているという様子である。

ここで、この地域から子弟を大学に進学・卒業させるためにかかる費用について確認しておこう。大

学進学にはまず、入学試験検定料、入学金、寄付金などの費用がかかり、そのうえで在学期間中は、授業料およびその他の若干の学費が必要になる。その総額にはばらつきがあるものの、国公立大学に進学した場合、私立大学の学費のほぼ半額以下に収まる。かれらが進学した一九九〇年代前半は、国立大学では四年間の総計が二〇〇万円前後だが、私立大学では四〇〇万円以上かかるのが通常であった。この差額を考えると、必ずしも豊かではないこの地域では、国公立大学が志望されるのは当前のなりゆきである。

このことに加えて、地方からの大学進学には、独り暮らしのための生活費が必ずかかる。奨学金を利用する場合もあるが、そうでなければ親は学費に加えて子どもたちに生活費を仕送りすることになる。例えば、高校時代には部活動と勉学だけに打ち込ませていた娘に、都会で慣れない独り暮らしをさせようというような場合、親としては、多少家計を切り詰めても住居費、光熱費、その他の生活費を仕送りして、生活のペースを作らせようという気持ちになる。それが仮に月々一〇万円程度としても、四年間で五〇〇万円かかることになる。したがって、大都市圏の私立大学卒業という学歴を得るには、一人につき一千万円以上の費用がかかるという計算になる。この負担の総額を都市在住者が自宅通学するケースと比較してみれば、大学進学の経済的な面での負担の大きさは歴然としている。繰り返しになるが、それでもなお、この地域の俊英たちは競って都市の学歴社会へと送り出されていくのである。

さて、大学教育に携わっている筆者から見ると、かれらの進学先にはある奇妙な特徴が見出せる。この当時は、一八歳人口の増加に合わせて、各大学において盛んに大学内部が改組されたり学部が新設さ

3年A組の地域移動

中間移動先（ある場合）	第二波調査時の職種と居住地（予定も含む）	
同大学院教育学研究科	大学院在学中	群馬県前橋市
	コンピューター関連企業社員	千葉県松戸市
	不動産販売会社社員	愛知県名古屋市
	金融会社人事部社員	京都府京都市
	製薬会社営業部社員	大阪府大阪市
	アパレルメーカー社員	大阪府大阪市
	専業主婦（1子あり）	大阪府吹田市
A公務員専門予備校	農林水産事務官	岡山県岡山市
同大学院工学研究科	大学院在学中	鳥取県鳥取市
	コンピューター関連企業社員	広島県広島市
同大学院文学研究科	大学院在学中	広島県広島市
同大学院芸術研究科	島根県教員（採用決定）	島根県内配属先
（司法浪人）	島根県職員（採用決定）	島根県内配属先
	宍道町立宍道小学校講師	島根県松江市
仁多町立仁多中学校講師	島根県教員（採用決定）	島根県内配属先
同大学院学校教育研究科	島根県教員（採用決定）	島根県内配属先
（卒業後、1年間空白あり）	島根県臨時職員（文化財関連事務）	島根県松江市
	無職	島根県八雲村
（卒業後、1年間空白あり）	小学校臨時講師	島根県浜田市
島根県立総合看護学院	伯太町役場保健婦	島根県伯太町
	島根県職員	島根県益田市
	平田市立平田中学校教員	島根県平田市
	五箇村立五箇中学校教員	島根県五箇村
島根大学法文学部	学部在学中	島根県松江市
同大学院教育学研究科	大学院在学中	島根県松江市
	金融会社営業社員	島根県松江市
	島根県立松江ろう学校教員	島根県松江市
	県内総合病院調理補助員	島根県松江市
	建築設計会社社員	島根県出雲市
	島根県教員	島根県内
島根県立総合看護学院	県内総合病院助産婦	島根県大東町
	郡内保育所職員	島根県仁多町
（卒業後、1年間空白あり）	自動車販売会社店員	島根県横田町
（卒業後、1年間空白あり）	島根県臨時職員（土木事務所事務）	島根県仁多町
	仁多町役場職員	島根県仁多町

表3-3

型	性別	進学先とその所在地	
都市定住型	女	群馬大学　教育学部	群馬県前橋市
	女	島根大学　法文学部	島根県松江市
	女	名古屋経済大学　法学部	愛知県小牧市
	女	京都外国語大学　外国語学部	京都府京都市
	男	広島大学　工学部	広島県東広島市
	男	創価大学　経済学部	東京都八王子市
	女	関西大学　経済学部	大阪府吹田市
	男	名城大学　理工学部	愛知県名古屋市
	男	鳥取大学　工学部	鳥取県鳥取市
	男	広島県立大学　経営学部	広島県庄原市
	女	広島文教女子大学　文学部	広島県広島市
Jターン型	女	筑波大学　芸術学群	茨城県つくば市
	男	中央大学　法学部	東京都八王子市
	女	大阪教育大学	大阪府大阪市
	女	姫路獨協大学　外国語学部	兵庫県姫路市
	女	広島大学　学校教育学部	広島県東広島市
	女	広島文教女子大学　文学部	広島県広島市
	男	山口大学　工学部	山口県宇部市
	女	都留文科大学　文学部	山梨県都留市
県内周流型	女	鳥取大学　医療技術短大部	鳥取県米子市
	男	島根大学　農学部	島根県松江市
	男	島根大学　教育学部	島根県松江市
	男	島根大学　教育学部	島根県松江市
	男	松江南高校　補習科	島根県松江市
	男	島根大学　法文学部	島根県松江市
	女	島根大学　教育学部	島根県松江市
	女	島根大学　教育学部	島根県松江市
	女	島根県立女子短大	島根県松江市
	男	島根大学　理学部	島根県松江市
	女	島根大学　教育学部	島根県松江市
Uターン型	女	国立米子病院付属看護学校	鳥取県米子市
	女	聖徳学園女子短大	岐阜県岐阜市
	男	立命館大学　産業社会学部	京都府京都市
	女	西九州大学　家政学部	佐賀県神崎町
	男	上越教育大学　学校教育学部	新潟県上越市

れたりした時期である。そういう大学側の変化を受けて、人間科学部、総合人間学部、総合科学部、国際関係学部、人間環境学部、公共政策学部などの新しい名称の学際的な特色をもつ学部が注目を集め、受験雑誌でも、もてはやされ始めた時期であった。しかしこうした新しい学部への志望が、このクラスでは全く見受けられないのである。表3-1のデータを用いて他の学年も確認してみたのだが、やはり同様の「保守的」な傾向があることがわかった。例えば、地元の島根大学は、この学年が進学した二年後に、農学部と理学部が母体となって、総合理工学部、生物資源科学部と組織を改めた。こういう場合でも横田高校からは初年度には進学を躊躇した痕跡が見られる。

これには次のような理由が考えられる。仁多郡内で生活してきた生徒自身にとっても、両親にとっても、進路指導をする教員にとっても、新しい名称の学部は、どんなことを学ぶのかという具体的なイメージをつかみにくいし、卒業後の進路もはっきりしない。さらに新設の学部は難易度も確定しないので合否も見極めにくいのである。ある教諭は次のように語ってくれた。「国際関係だ、公共政策だっていうようなところを目指したとしても、実際、（大学を）卒業して、すぐではなくて歳とってからでも、いずれ横田の方に戻るとして、そのとき何ができるかいなぁ、ってことになりますから」

確かに、情報化社会における技能や教養だとか、国際人としての見識を身に付けるという理念が、この山間地域ではあまり魅力的に響かないことは容易に想像できる。また同様の理由から、外国語学部や文学部の志望においても、仏独文学、スペイン語、ロシア語、中国語などではなく、あくまで高校の教科の延長線上にある英語学や英文学、国文学などの専攻が多いのである。

似たような実態をアメリカの大学で見たことがある。アメリカでは現在、アファーマティブ・アクション（黒人などのエスニック・マイノリティに優先的に大学進学枠を設けて、人種間の大学進学率の格差を小さくしようという制度）によって、黒人のなかでの成績上位者を、白人よりも優先して州立大学などに進学させている州がある。この制度で入学する黒人層は経営学、法律学、医学などを好んで専攻するが、文学、歴史学、社会学、美学などはあまり人気がないという。その主たる理由は、経営学、法律学、医学などを学べば、大学での専攻を生かして会計士、弁護士、医者となり高収入を得るというコースがイメージできるが、例えば社会学を学んだのでは、教養は身に付くが職業生活には直結しないからだと言われている。つまり、せっかく大学に行っても「学歴」という象徴を得るだけで、それが何の実益（地位上昇）も伴わない「空手形」になるのでは、社会の下層にいるマイノリティには意味がないというわけである。

これと同じような利得の計算方法で、奥出雲の山間地域から入試の難易度をにらみながら大学進学を目指す若者たちは、良くも悪くも地に足の付いた実学志向をもち、旧来の名称の学部を選択するものと考えられる。外部にいる筆者から見れば、どのみち明確な計画をもたずに故郷から流出するのであれば、思い切って特色のある学部を目指す方が将来の可能性が拡がるようにも思える。だが、かれらの多くは、そして両親も教員も、いずれは島根県内（できれば郡内）に戻るということを、多少なりとも視野に入れておきたがる。そうすると、島根県内で必要とされそうな知識・技能を大学で身に付けるというのが、ひとつの合理的な選択となる。逆に、若年エリート予備層に情報化社会、国際社会での活躍を目指させると、若年流出層が大都会に飲み込まれてしまうことは目に見えている。このあたりの考え方には、全

国屈指の保守地盤といわれる仁多郡らしい「手堅い」文化的背景を見ることができる。

また、このクラスからの大学進学者は、大学受験浪人になることがほとんどないということも重要な点である。この年は男子の一名のみが浪人して、翌年島根大学に合格している。浪人を避ける理由の第一は先に述べた地理上の条件である。つまり浪人してランクアップをもくろむ場合、難関校受験となると独学ではもちろん立ち行かない。したがって予備校に通うことになるが、郡内にはそのような学校外教育の産業は皆無といってもよい。するとやはり自宅を出て、松江市か広島市、あるいは名古屋や大阪で下宿しながら受験勉強をすることになる。当然、一年の生活費・授業料の分だけ、大学卒業資格を得るための出費がかさむということになる。結局、いろいろな効用を計算してみると、当初の希望どおりではなくても、現役時のランクを下げた大学進学が最も合理的な選択となるというわけである。

第二の理由は、先に述べたこの地域の保守的な文化的背景である。両親も本人も「世間体を気にして」浪人を嫌う傾向があるというのだ。実際に、浪人して超一流大学に進学すれば別かもしれないが、並大抵の進学先では「勉強ができなくて親に余計な迷惑をかけた」、「クラスの他の子たちと違って自分だけ二回も受験をした」というあまり喜ばしくない世評を拭うだけの名誉は与えられないと思われているようである。こうした学歴社会についての特有の意識は、他地域ではリアリティをつかみにくいことかもしれない。

ところが三年A組は全員が国公立大学進学を「本命」とするクラスなので、いわゆる「滑り止め」となる私大入試の対策のための特別なカリキュラム設定があるわけではない。それゆえに、全員が競って

受けるセンター試験で、自分の目指した点数が取れなかった場合には、かれらはそこで志望を転換して、ランクを大きく下げてでも現役合格を目指すことになる。後述するインタビューでは、大学受験は一生に一度の、やり直しの効かない大勝負であって、その不本意な結果についても諦念して受け入れたことを、かれらは一様に語る。ちょうど高校総体や甲子園の野球大会のように、大学受験に失敗すればそこで負け、というまさしくトーナメント移動の発想（竹内洋　一九九五）なのである。

以下は、かれらのセンター試験受験の様子である。島根県内のセンター試験会場は、当時はわずか二会場であり、横田高校の最寄りの会場は松江市の島根大学であった。センター試験受験者は前日に学校に集合し、バスをチャーターして移動し、松江市内のホテルに二泊する。ホテルから制服を着て集団行動で会場に向かい「人生の大勝負」をするのである。試験を全て受け終えると、三日目の夕方にバスで仁多郡へと戻ってくる。そして、その翌日には学校で全員自己採点をする。この日の自己採点の点数をもとに、かれらはあらためて、まだ見ぬ土地の大学への願書を書くことになるのである。

元来、この地域では大卒でなければ家業が継げないとか、親よりも社会的地位が下降しないようにするには何としてでも大学進学をしなければならないという「都市的」な事情は見られない。それゆえにまた、山村の若者たちに特有の、急激な加熱と冷却を伴うトーナメント型の学歴社会観がいっそう補強されるのである。

地域移動の四類型

かれらは国公立か私立かの別を問わず、高校三年生の三月になって、生まれて初めての土地への進学を決める。それは馴染みのある島根県内ではなく、文化の異なる大都市圏の私立大学、あるいは全く別の地域の地方国公立大学への進学であることもある。しかしかれらは、やがてはその「街」に順応し、大学生に姿を変えていく。初めて故郷を離れ、一八歳からの四年間をどのような土地で過ごすかということは、かれらの人生においてはとても重要な問題である。二万人に満たない総人口に、二つの中学校区、一つの高校しかなかった仁多郡内の生活を離れ、都市特有の匿名性と自由さのなかで個別の青年期を歩んでいくことになるのだ。そして場合によっては、その土地に定住してしまう可能性すらある。まさに人生の岐路といえるだろう。

三年A組の場合、島根大学への進学者は四五名中一〇名とクラス全体の二〇％以上であった。地元国立大学をひとつの基準点として考える傾向は、親にも生徒にも教員にもある。そのため県外への進学者は、島根大学以上の大学を志望して、岡山、広島、神戸、大阪、京都、東京と難易度ランクと比例するように射程を伸ばしていくケースか、島根大学の志望学部に届かなかったために、全国各地の他大学を受験していくケースに二分されると見てもいい。もっともこの当時島根県内には工科系の学部がなかったため、工学部への進学を希望する場合は、近隣の鳥取大学、山口大学に否応なしに流れるという傾向があったようだ。もちろん最終的に進学するのが当初希望していた国公立大学ではなく、滑り止めに受

表3-4　横田高校からの大学進学者の地域移動の類型

	県外就職	県内就職	郡内就職	計
県内進学	都市定住型 (1)	県内周流型 (11)	Uターン型 (1)	(13)
県外進学	(10)	Jターン型 (8)	(4)	(22)
計	(11)	(19)	(5)	(35)

けたはずの私立大学である場合もある。

当初の志望についての個々の事情はともかく、結果としての進学先については県外への進学、県内への進学という二つのパターンに分類することができる。その内訳は県内進学が島根大学進学の一〇名と、隣接する米子市に流出した医療専門職二名（いずれもその後に島根県内の看護専門学校に進学して保健婦・助産婦の資格取得）および島根県立女子短大進学者一名の合計一三名、県外進学は残りの二二名で合計は三五サンプルということになる。県外の進学先は、地域で見ると群馬、新潟、茨城、山梨、愛知、岐阜、京都、大阪、佐賀、広島、山口、鳥取など多様である。進学先には地方大学だけでなく首都圏の名門私立大学や関西の難関私立大学の名前が並ぶ。その他には中国地方の私立女子大学などが名を連ねている。

一方、第二波パネル調査の時点における就業先の地域については、県職員や県の教員などになって島根県内に就職した者、県外で定職を得ている者、郡内に戻ってきている者の三つに大別される。ゆえにこの若者たちの地域移動を大学進学と初職就業という観点で見ていくと、六つのパターンが考えられる。表3-4がその分類の結果を示したものである。

この表を見ると、県内への進学者、つまり高校卒業と同時に近隣の松江・出雲地域に流出した若者たちは、（大卒）初職就業時に県外に職を求めることがほとんどないこ

とがわかる。島根大学に進学し、その後県外でシステムエンジニアをしているという例が、一ケースあるだけである（都市定住型に分類した）。また県内進学者はUターンして故郷に舞い戻ることも多くはない（この一ケースはUターン型に分類した）。つまり、ひとたび県内高等教育機関に進学すると、あらためて県外流出したり、地元に回帰したりすることはあまり考えられず、県内という中間的な流出範囲に堰き止められるのである。このグループを本書では県内周流型と呼ぶことにする。

他方、県外進学者は卒業後の移動先によって、県外就職、県内就職、郡内就職という三類型に割り振られる。ここでは、県外の大学に進学して県外で就職したパターンを都市定住型、県外の大学に進学した後、島根県内に戻ってきたパターンをJターン型、故郷の自宅周辺にまで戻ってきたパターンをUターン型と呼ぶことにしよう。

次章からは都市定住型（一一サンプル）、Jターン型（八サンプル）、県内周流型（一一サンプル）および少数のUターン型（五サンプル）という四つの類型を念頭におきながらライフヒストリーを見ていく。

1　かつて一定数あった町役場での高卒者の採用は、近年では次第に少なくなってきているという。

2　P・ウィリスはイングランドの工場町の少年たちを観察し、対抗文化による社会体制の再生産の構図を描き出した。そこには下層労働者階級の子弟が、その下層労働者階級の文化と脱学校文化ゆえに、進学の道筋を自ら離れ、義務教育修了後に、親と同じような工場労働者への道を自ら歩んでいく実態が描き出されている。この『ハマータウンの野郎ども』は、文化的再生産論の最もリアリティのある研究のひとつとされる。

第二部

漂流記

ライフヒストリー

第4章

大都市の人になる

ローカル列車が山間を縫う

都市定住型

大学に進学して三年生の終わり頃になると、就職のための活動が一斉に始まる。この章で見ていく都市定住型の移動パターンは、県外の遠隔の都市の大学に流出して、島根県内に戻らずに、そのまま流出先で初職に就いた若者たちのたどったライフコースである。かれらはいずれも、仁多郡内はおろか島根県内にさえ戻ってきていない。ただしそのなかには、厳密に一ヶ所に定住したわけではなく、広島から大阪、首都圏から大阪、名古屋から岡山というような大都市間の移動を経験しているケースも少なくない。都市に住み着いたというよりも、故郷に戻らない決断をしたという表現の方が、かれらにはふさわしいのかもしれない。追跡データを獲得できた三五名のうち一一名が都市定住型に分類される。内訳は男子五名、女子六名である。この章ではそのうちの五人についてライフヒストリーを描いていく。

中川博喜のライフヒストリー

国家公務員の職に就いて二年目という中川博喜には、勤務後の夕刻に岡山市内の職場近くのホテルのロビーで話を聞いた。実直で誠実な細身の青年である。いかにも公務員らしい地味目のスーツにさっぱりした頭髪をしている。それゆえに、あまり目立つタイプには見えない。私の先入観のせいか、物腰からはどことなく地方出身の青年という印象が伝わってくる。彼はこの対象クラスの同窓会の会合の世話

人をしたことがある。

博喜は団塊の世代の両親のもとに生まれた長男であり、祖父母と父母と子どもたちという、直系同居家族で育っている。高校の頃には、母親は役場、父親は「公共事業」に勤めに出ていた。この家庭環境はこのクラスの典型的なパターンのひとつといえる。高校生活ではクラブ活動に打ち込むということもなく、あえていうならば大学受験に的を絞った生活をした。

中学生の頃から、自分の将来像として、地元役場の職員への就職を希望していた。そして大学進学については「島大（島根大学）でいいって言うと失礼な言い方ですけど、島大に行こう」と考えていたという。「就職とは関係なく大学は行きたいなと思ってました。高校とか中学校とかで教えてもらうような勉強じゃなくって、（大学での教育は）身に付くものっていうイメージがあった」と当時を振り返る。

町役場で農業関係の仕事をしたいというかなり具体的な希望があったため、センター試験を受験するまで一貫して、第一志望は島根大学農学部（当時）と決めていた。実際に高校三年時の調査票には将来就きたい職業として「地方公務員」を挙げている。

「田舎が農村なんですよね。だからまあそういう方向に関心が向いてたんで、そういう勉強して、っていうのがいちばん最初にありました」

センター試験の点をにらみながら、二次試験では島根大学と愛

媛大学の農学部を受験した。ところがどちらも不合格になってしまったことが、三月末までに判明した。そのときは浪人して次の年に受験をしようという気持ちもあったが、滑り止めとして受けていた私立の名城大学の理工学部数学科（センター試験を課す入試枠）には合格していた。そこで両親と相談し、そちらに進むことを「何となく」決めてしまった。

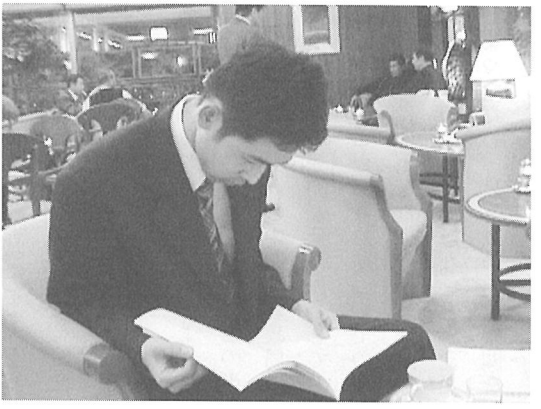
このような経緯から、博喜は不本意な形ながら大都市、名古屋に出て私立大学の学生という思いがけない進路をスタートさせた。ところが彼は理工学部数学科の学業に、なかなかうまく馴染めなかった。「幾何学とか代数とか、そういう専門的なやつはほとんど取らずに、取らずにっていうか受けても単位もらえずに、教育心理学とか、もっと文学とか、全然関係ないところでは単位はもらってました」と本人は言う。

一年生の秋頃から博喜は「ちょっと違うな」と考え始めた。やがて大学の講義にはほとんど出なくなり、翌年のセンター試験に独学で再挑戦し、島根大学の農学部と教育学部を受験することにした。結果は再び不合格であった。

引き続く大学の二年生の一年間は名古屋に留まったが、大学には全く行かない状況となる。この年は

秋に地元町役場の募集（若干名）があったので、採用試験を受けたが、それも合格しなかった。大学二年次の年度末には、博喜は名城大学に正式に退学届を出して名古屋を離れ、ある考えを抱いて島根県の松江市に舞い戻った。

この二一歳の時の松江での一年間は、振り返ってみて一番楽しい時期だったという。確かにそこには、横田高校の同じクラスの友人たちもいた。かれらはいずれも地元大学の二～三年生となっていて、大学生活にも慣れて気持ちに余裕のある時期にあった。博喜は松江市内で安い下宿を探し、駅前の公務員試験対策の専門学校に通い、この一年を本格的に公務員の採用試験を受けるために費やすことにしたのである。



公務員試験の受験先のうちで、第一希望は島根県職員であり、第二希望としては島根県内の社会保険事務所や裁判所などの公務員を望んでいた。そうであるがゆえの県都松江市での浪人生活であったのだ。この年、博喜はたて続けに採用試験を受けたが、これらの地方職にはどれも合格しなかった。しかし彼のなかで希望の下位にあった、国家公務員Ⅲ種の試験には合格した。

「当時、一番行きたかったのは島根県庁でしたから。もとも

と、その、農林行政志望のようなところは……中略……あったんですけど。県庁落ちて、しかも国家Ⅲ種受かって、どこ行こうかな、っていったら農政局もありかな、という順番ですかね」

採用が決まってからの数ヶ月は、彼は松江市でアルバイトをしながらのんびり生活した。実家に戻ったとしてもアルバイト先もみつからないという事情があったのだろう。ともかく親元を離れたまま、気楽に独り暮らしをした。もとより堅実な彼にとっては、学生らしい自由で悩みのない生活は、採用内定後に友人とともに過ごした、この半年に凝縮されている。

配属先は岡山市の中四国農政局の庁舎に決まった。高卒資格で中四国の農水省の事務を担当する国家公務員である。国家公務員としての採用を決めた後、農水省を希望したのは、小さい頃からの農業関係の仕事へのこだわりに基づいての選択であった。また、わずかに残された故郷へのUターンの可能性もこの決定に作用したようだ。農政に携わっていれば、出先機関として島根県内、ことによると奥出雲地域での仕事が皆無ではないと考えたのである。ただしその後、仁多郡内の農政局の事業所は閉鎖されてしまったため、最寄りの出先機関を挙げるとすれば、今では広島県の東城か、鳥取県の大山ということになるらしい。

博喜は翌年の四月、横田町を離れてから三つ目の都会である岡山市で勤務を始めることとなる。もしも大学に通い続けて順調に進級していれば、就職活動をするはずだった二一歳の春のことである。その後博喜は、局内で小さな異動を経たが、職業生活には大きな変化はなく現在に至っている。

高校卒業後を思い返してみて、博喜が一番後悔するのは、志望していない大学の関心のない学科に進

学したことだという。「大学はやっぱり点数が取れたから行くようなところではないですね。自分が何をやりたいかというようなことを考えて行くところだなあと思いましたね」そう語る彼のなかでは、大学で学ぶ専門知識に対する純粋な想いは中学校のときから変わっていない。その一方で、名古屋で私立大学生、松江で公務員試験受験浪人、岡山で国家公務員と不安のなかで漂流した自分のライフコースについて、彼なりに満足しているという。「仮に大学四年間で卒業して、そのとき公務員になりたいと思って公務員試験受けたとしても、あんまり専門知識にはこだわらなかったと思います」と公務員という自分の至ったゴールの方を強調する。

両親には仁多郡内に戻ってきて欲しいという希望があるのかを尋ねてみると、こう答えてくれた。「それはもうしょっちゅう言われてましたし、今もまあ、たびたび言われますね。町役場受けろというふうに言われますけど。今はまあ、親のめんどうみない気はないんですけど、特に（今すぐに）うちに帰ってという気もないですね」

かつて実際に受験したことのある町役場について、現在の本人の気持ちを聞くと、「いえ、受けないと思います。さすがに二、三年仕事をやってるんで、途中で、大学は途中でやめちゃったんですけど、途中で仕事をやめてっていう気にはちょっとならないですね」と断言する。

結婚については、「全然、今はそんな雰囲気とかないんですけども、したくないっていうこともなく、どっちかっていうとしたいなあとは思うんですが」と言う。「今しないといけないかっていうと、そういう必要性っていうのも感じてません。ただ、結婚に関して別に否定的な印象はないですし、そういう

人がいて、そういう時になればしたいなと思います。まあ、どういう人と結婚するにしても、そんなに周りの全部の問題が解決するようなことはないと思いますけど、（相手も自分も）それぞれ何だかちょっとした問題は出てくるとは思いますけど、それはその時にがんばって解決すればいいかと思います」

この先については、どんなことについてもあくまで柔軟に考えたいのだという。

「（今までの人生のなかで）現状肯定的なのは多分、今がそうだと思います。これでいいんだっていうのは。しゃあないなとかそういう話じゃなくて、今は与えられた環境でがんばればいいっていうのがあります。けど、高校の時は、あんまり緊張感がなくて、大学受験するにしても真剣味がなかったと思うんですね。……中略……あんまり自分で決めてどうこうするようなこともなかったですから。他人が与えてくれる環境に対して受け入れる、積極的にじゃなくて消極的に受け入れるだけだったっていうような気はしますね」と流転の青春時代を振り返る。

将来の希望については、今の「国家公務員の仕事を続ける」と回答している。博喜が単なる予定調和ではなく、疾風怒濤の末に自分でつかみ取った今の安らぎは、幼い頃の将来像から大きく外れてはいない。

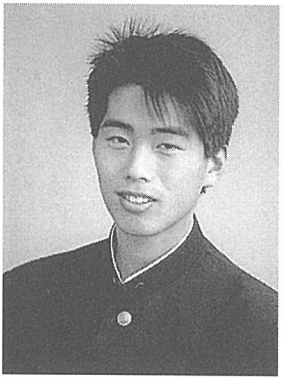
高橋智義のライフヒストリー

高橋智義は大工の棟梁の長男で、下には弟妹がいる。父母の学歴は父が高校卒、母が中学卒である。若い母は彼が高校生の時には、常勤で働きに出て生産工程に従事していた。彼もまた祖父母、父母と暮

らす直系の大家族で育ってきた。実家には、一ヘクタールの田畑があり、肥育牛も飼っている。高校時代はサッカー部に所属していた。高校三年の一〇月の時点では、将来就きたい職については回答欄に「サラリーマン」とだけ走り書きしている。彼によれば、「親父の仕事見とって、家業の大工が嫌で」そう書いたのだそうだ。そのときは大学進学については、センター試験を受けて地元大学へというのが漠然とした希望であった。

「一応島大の農学部行きたかったんですけどね。センター（試験）が悪くて。それで教育学部の体育の方で、一番（難易度が）低かったと思うんですけど。入りやすいと思ったんですけど、でもそれも落ちたんですけどね。（センター試験の点数は八〇〇点満点で）五二〇点。微妙なとこですよね、ボーダーライン」

この教育学部の体育専攻受験と、彼が漠然と抱いていた「サラリーマン」という将来像が、どのような関係にあったのかはこれ以上詳しくはわからない。だが、ともかく国公立大学受験は敗北に終わった。



引き続く私立入試では、智義は阪南大学と創価大学に合格している。「阪南の方に行きたかった」という彼に、創価学会の学会員であった母親が「どうせ受かったんやったら創大に」と強く勧めた。そんなこともあり、最終的には創価大学経済学部への進学を決意した。

創価大学のキャンパスは東京の八王子市にある。東京郊外に出てきた初年度は寮に入ることにした。彼が入った七人部屋は、個

人のプライバシーをきちんと守れる状況ではなかったが、それでも寮生活は楽しかった。同年代の友人を得て、宗教関係の活動にはかなり熱心に取り組むようになったという。二年生になっても寮に残りたかったのだが、規則があるため希望がかなわなかった。そこでやむなく一般の賃貸アパートに引越すことになった。

大学時代はアルバイトをたくさん経験した。鰻屋さんの店員、コピー機器の運転テスト、カラオケボックスの受付係など幅広くやったという。たいへん積極的で、はきはきと受け答えをするので、彼の明るい性格は初対面の筆者にも伝わってくる。接客業を苦にする様子はない。交友関係も広く、「友人を数えてみたら二〇〇人くらい」という。大学時代のアルバイトでは合計四〇万円ほど貯めて、それを四年時の就職活動の資金にしたという。

就職活動では、他の学生に先駆けて早い時期から何社も説明会を廻った。多くは一部上場の有名企業であったが、会社の規模にこだわったわけではなく、業種を優先した。しかし、なかなか就職先が決まらず、一〇月一日の内定式の直前の、九月二〇日頃になって、ようやく従業員数一〇〇名弱の現在勤務しているアパレルメーカー、イケダヤに内定をもらった。この会社の本社は大阪にある。ちなみに創価学会とは関係ない企業である。

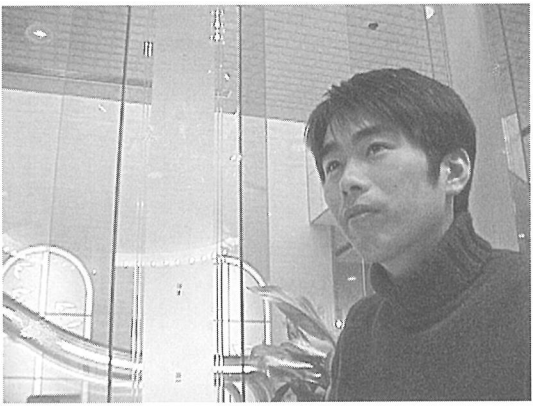
インタビューの時点では、智義はその会社で勤続二年目であった。会社では内勤の営業の仕事をしている。今の職場は個人個人が個性豊かで楽しいという。今は会社から遠くない大阪市内のワンルーム・マンションで独り暮らしをしている。外見からして頭の回転の速そうな、都会的な好青年である。それ

でいて積極的で礼儀正しいので顧客や上司には好感を与えるタイプだろう。話し方におっとりしたところはなく、しかもどこでどのように身に付けたのか、智義のしゃべりはいわゆるべたべたの大阪弁である。それだけに表面的に職場の話などを聞いているときには、兼業農家のあととり、大工の棟梁の息子という出自は微塵も見えない。確かに大阪の京橋あたりでよく見かける「サラリーマン」である。質問紙パネル調査の希望の職業の自由回答欄には今度は「経営者」と走り書きしてある。

そんな彼は、故郷についての自分の想いの変化を次のように振り返る。

「そうですねえ。最初、受験に行く時に、まぁ東京やったんですけど、初めて東京に行ったんですけどね。その時にはね、たぶん自分に合わんやろなって思ったんですよ。都会の生活ちゅうのが、合わんやろなって。そう思ったってことは、やっぱいずれは帰って来ようって思ったということですよね。やっぱり島根がええなって。自分、長男やしね。そう思ってたんですね」

「僕、長男なんですよ。親としては帰って来て欲しいけど、その、実際島根には就職口がない状況で。それやったらまぁ、



大阪か広島くらいまで帰って来いと。まあ近い方がええやないですか、親はね」というのが就職活動の時点の判断であった。

智義は近々結婚する予定である。相手は大学時代にバイト先で知り合って付き合い始めた一つ年上の女性で、やはり創価学会員だという。もともと関西出身だった彼女は、現在は芦屋市の実家に住み、大阪でOL（金融事務員）をやっている。すでに式場として大阪の中之島の有名ホテルを押さえているということであった。

話を聞いた時点では、彼の弟は東海大学の四年生ですでに首都圏で商社への就職が内定しており、末っ子である妹も関西の外国語専門学校に進学してきていた。仁多の実家には祖父母と両親だけが暮らしていることになるが、この時点ではまだ父は五二歳、母は四七歳である。智義は今はこの両親を次のように想っている。

「そうですね。やっぱり、まあ金銭的な面で負担かけたんですけど。偉大ですね親はね。実際、独り暮らしして、親がいなくて寂しいとか全然ないんですけど、でもやっぱり、だいぶ感謝の念は増えましたね。こんなの面と向かって言えないんですけど」

地元を離れて都会に出てきたことについて、彼は「よかったと思います。実際、家におったら、（自分の知っている世界は）広くて島根県内くらいじゃないですか。そう考えたら、東京とか大阪とかに出てきて、よかったと思います」と考えている。

塚本雅子のライフヒストリー

塚本雅子は京都に本社のある金融会社アイメイトに勤務している。今の職場ではフレックスタイムが自由に使えるということで、夕方の早い時間に大阪梅田で待ち合わせをして話を聞かせてもらうことにした。彼女は先に来て、指定した待ち合わせ場所に立っていた。華奢ではあるがいかにも仕事のできそうな、しっかりした表情で話をする女性である。地味ながら清楚な装いをしている。ちなみに高校時代は、ホッケー部に所属し（一九八二年の島根国体の会場となったことを契機に、仁多郡ではフィールド・ホッケーが盛んである）、全国大会でも上位に勝ち上がったチームの主力メンバーだった。今でもスポーツは何でも好きだという。

雅子の実家は仁多町の市街地で製材所やガソリンスタンドを経営している。三人きょうだいの一番上の姉で、家族は祖母と両親と子どもたちという三世代同居構成である。高校時代の彼女は学年でトップクラスの成績だった。特に英語はよくできて、学習態度もよかったという。別の機会に、このクラスの授業を受けもっ

たことのある教諭と話した際には、「塚本は今どうしてますかねえ？」と真っ先に彼女の名前が出てきた。高校のときには将来就きたい職業として、「ツアーコンダクター」と回答している。これは彼女の得意だった英語を使う職業である。

彼女は国公立大学進学を志望していた。センター試験の得点も、ほぼ予定どおりであった。彼女がこのとき取った五教科合計六八〇点は、横田高校のこの学年ではおそらく最高点だろう。この年の東京大学の文科Ｉ類のセンター試験ボーダーラインがこのあたりである。

――「そうか、そりゃすごいなぁ。それ、自分ではどのように振り返ってます？」

「すごくなんかないですよ。うーん。センター試験用の受験勉強ばっかりやってたってことですね。時間もなかったし、あんまり深くは勉強してなかったんで。どっちかっていうと暗記型の受験生でした。だから二次のテストができませんでしたね、やっぱり」

すでに触れたとおり、このクラスの生徒は、通常は絶対に浪人はしないという考えで国公立大学を受験していく。旧態依然とした山間地域のことなので、地域のそういう雰囲気は、男子よりも女子の方がさらに敏感に感じているようだ。また彼女が言うように、センター試験対策を精一杯やっていることもあって、どうしても二次試験の得点が低くなりがちである。それゆえに、どの生徒もセンター試験の得点を活かせる得点配分の志望を考えることになる。いわゆる「センター逃げ切り」という作戦である。これは中レベルの大学には有効なのだが、二次試験の配点比率の高い旧帝大レベルでは、やはり二次の筆記試験の実力で合否が決する。

雅子の場合、どのような選択基準だったのかははっきりしないが、受験した国公立大学は大阪大学の文学部と広島大学の総合科学部の比較文学であった。もちろんこの二つのうちの、どちらかに合格するというのが強い希望であった。滑り止めに考えていた私立は、同志社大学、京都産業大学、京都外国語大学の英文学科か英語学科であった。五校をあわただしく受験して、あわただしく結果が出る。

最終的に雅子が合格したのは、京都外国語大学外国語学部の英語専攻ただひとつであった。そのときは「うーん、ちょっと嬉しい。京都に行ける。ちょっと嬉しい」と思ったが、同時に「広島で国立大学に行くのと比べると、私大で独り暮らしだからお金がかかるかな？」とも考えた。自分の大学受験のなりゆきを振り返って、後悔している様子はないが、欲を言えば「総合大学の方が、いろんな人と知り合うきっかけができてよかったかな」と思うことはある。

雅子は京都に行くことになった時のことをよく覚えている。卒業式を終えた、三月も末になってのことである。

「お父さんとクルマで広大（広島大学）の合格発表を見に行って、それで駄目だったから、その足で即、京都に行ったんですよ。それでその日のうちに住むところの契約とか全部してもらってね」

その数日後、彼女の憧れだった京都での独り暮らしはスタートしたのだが、ぎりぎりのところで契約したため、ワンルーム・マンションに入居できるまでに一週間ほど間が空いてしまい、しばらくホテルで生活しなければならなくなった。入学式もホテルから出席した。「ホームシックというのかな。すごく寂しかったですよ……中略……でも帰りたいとは思わなかったですね」と彼女は言う。

大学が始まって少し経ってから、体を鍛えるために少林寺拳法部に入部した。このとき雅子が考えていたのは、高校のときのホッケー部のメンバー数人と、今度は成年女子の島根県代表チームで国体に出よう、という約束であった。この時点では、まだまだ故郷に強い帰属心があったのだろう。その後彼女は、生活のペースをつかんで、キャンパス近くのレストランでアルバイトをしたり、クラブの友だちと遊んだりしながら、大学生活を楽しく過ごし始めた。そういう日々を経て、いつの頃からか独り暮らしの寂しさも薄れ、逆に京都にも愛着が湧いてきたという。

「えっとですね。独り暮らしがすごい快適だったってこともあるし、一度（仁多に）帰ったらもう出て来れないだろうなと思ってたんです。こっちで仲良くなった彼氏がいたんですけど、こっちの人だったんで、まあ付き合っている間はこっちにいてもいいかなって思ってたんですよ。そうですね。それが全部なかったら、帰ってUターン就職でもするんじゃないかと思います」

「彼氏」は二年生のときアルバイト仲間だった、同い年の大学生であった。この男性とは、大学を卒業してからも四年以上交際が続いている。和歌山出身の彼は、同じ京都の立命館大学の経営学部を卒業

して、今は大阪で就職しているという。

学業の方については、少し姿勢が変化してきた。「真面目に勉強していない方でしたから、私は。（大学には）他のことがやりたくて入ったものですから。授業最低限、やることになってる宿題だけやって、まぁ大学生ですから、出席を取らない授業はもちろんテストだけ出るとか、大事な授業は毎回出るとか」という状況になったという。とはいえ外国語大学の語学専攻の授業は、少人数クラスで成績評価も厳密である。「他の大きな大学と全然違って、高校生活の延長のような厳しさだった」と振り返る。

好きだったはずの英語については、「英語だけはものすごくできる」という学友たちと一緒に勉強していくうちに、「スタートラインからこんなに差が開いてるんだ、とあきらめて」、いつしか自分には語学はそんなに向いていないと思うようになった。

「大学入ると、同じ語学好きでも、できる人とできない人の差が、自分でもわかるじゃないですか。あの人は英語ができるけど私は全然できないというのが」と彼女は語っている。「横田高校にいるかぎりはね、多分ダントツで（勉強が）できてた

んだと思うんですよ。そのへんとのギャップはありましたか？」という筆者の問いには、「ありますね。五教科だったら負けないけど英語に絞られると駄目ですね」と、少しだけ寂しそうな表情を見せる。それでも英会話は好きだったので、大学の二年生の冬にはイギリスでひと月のホームステイも経験した。

彼女は三年生のうちに卒業単位を全て修得した。卒業論文も書かないコースを選択した。四年生になったら就職活動一本に絞るという自分なりのビジョンがあったのである。そしてこの就職活動のときには、もはや語学力を使う仕事に就きたいとは思わなくなっていた。

就職活動では雅子は、友人たちが志望していたような旅行業などの「花形の」競争率の高い職種はあえて避けて、大手スーパーチェーンやノンバンクの金融関係などを廻った。彼女によればこのときの判断は、「いろいろ業界を廻ってみたんですけど、条件が……中略……京都で就職したかったのと、独り暮らしでちゃんと生活していけるくらいのお給料がもらえるという条件がありまして。仕事内容は、別に営業とかそんなんでもよかったんですよ」ということであった。

友人たちの就職先がなかなか決まらないなか、彼女は複数の会社の内定を手にした。確かに彼女は就職面接で会社側の評価が高そうなタイプである。余談になるが、大学受験のとき高校のクラス担任が彼女に広島大学総合科学部の受験を薦めたのは、「二次試験に面接があるので点が取れそうだ」という理由だったらしい。

ともかく四年生の九月に、現在彼女が勤務する株式会社アイメイトへの就職が決まった。内定したときは支店での営業職を考えていたのだが、採用人事担当者からの強い後押しがあったようで、本社の人

事管理のスタッフとして採用されることになった。具体的には社員の入退社に関わる手続きや、給与計算、社会保険の手続きを社内データベースに入力し管理する部署で、通常の支店での金融窓口業務とはずいぶん様相が違っているようだ。この経緯について本人は、「履歴書の写真写りがよかっただけかもしれないですけど」と謙遜して微笑む。しかし実際は入社時の会社側の期待に応えて、本社勤務のいわゆる総合職として責任のある仕事をその後も順調に続けている。

ホッケーは全くやらなくなって久しいという彼女は、現在は会社のアウトドア系のサークルでウェイク・ボードやカヌーやバス・フィッシングなどに出かけて休日を過ごしているという。英会話を始める様子は、今の状況ではとてもありそうにはない。

彼女は、京都での六年間の生活を振り返って、「自分に合った場所」に進んだと見ており、調査票のこれから先の希望の職種の欄には、丁寧な字で「現在の仕事を続けたい」と書かれている。故郷への思いをからめて今後のことを尋ねると、次のように言葉にしてくれた。

――「教職は全然考えてなかったみたいだけど、横田高校出て、仁多郡には戻ってこれないな、っていうのははっきりしてたの？」

「親はまあ、大学出たら帰ってくる子だと思ってたみたいなんですよ。仕事がなければ松江とか米子とかそのあたりで。私も多分そうなると思ってたんですけど、でも帰らなかったですね」

――「なるほど。じゃあ、これから後なんですが、関西で（職業継続）っていう気持ちがすごく強い？」

「今はそうですね。こっちにもう残すものが何もなければ帰りますね。仕事も一段落して、彼氏とも別れてとか、こっちの生活も十分楽しんだと思ったら帰ります」

――「結婚しなかったら帰る？」

「仕事も、まあ三年とか五年とかきちんと自分の義務を果たしたぐらいに帰ります。すぐには帰りにくそうなんで」

――「今の仕事、相当責任のある、やりがいのある仕事を任せられているように見受けましたが、それ大きいですか？」

「大っきいですね。一ヶ月や二ヶ月ではちょっと覚えることがいっぱいというか、経験も必要なのかな。私もまだ二年目ですけど、全然一人前じゃないくらいで。はい。すぐに、『今辞めます、今日辞めます』とかは言えない性格だし。辞めるって言って一年くらいは後輩を育ててからじゃないと辞められそうにないし、やっぱり辞める時は円満に、みんなに追い出されるような辞め方はしたくないです」

長谷川舞のライフヒストリー

長谷川舞にインタビューをしたのは、ＪＲ名古屋駅近くのホテルの一階ロビーの喫茶店である。彼女は、不動産販売会社ダイトーヒルズの営業担当の社員であり、現在は名古屋市内で分譲住宅や分譲マンションを販売している。仕事の終わる夕方六時に待ち合わせをした。服装、髪型、メイクからパンプスの靴音まで、都心を歩く仕事帰りのＯＬらしいスタイルの女性である。しかし本人が言うには、高校時

代には「牛乳ビンの底のような分厚い眼鏡」をかけていたのだそうだ。大学に入ってからそれをコンタクトレンズに替えた。高校時代の友人には口をそろえて「変わったね」と言われる。筆者が高校時代の彼女の恩師に写真を見せたときも「これは、どっかで出会ってもちょっとわからんですわ」と驚くほどの変身ぶりである。

彼女はこちらの質問の意図をよく聞き取ってから、正確に自分の言いたいことを言葉にしていく。一対一の接客に慣れているためだろうか、とても洗練された話の進め方をするのが印象的である。

彼女の実家は横田町にある。高校時代は祖父母と両親、それに三つ年下の弟と六人家族であった。父母はともに一九四八年生まれで、学歴は高校卒である。高校三年生のとき父は信用金庫の地元支店で課長に相当する職に就いており、母の方も常勤の仕事に就いていた。高校時代は特にクラブ活動はしていないが、ピアノは子どもの頃からずっとレッスンを続けていた。将来の希望の職業は、この頃は「小学校の音楽の先生」になることであった。

ところが、高校三年生の一月からの数ヶ月は、そんな彼女に深刻であわただしい意思決定を迫った。彼女自身は「自分でも国立に行くもんだと思って」いたが、センター試験の当日、風邪のため、数学Ⅰの試験の途中で退席してしまったのである。

「保健室（救護室）に連れて行かれそうになったんですけど、次の試験からどうしてもやりたくて、私は、その保健の先生みたい

な人が病院に行った方がいいと言っているんですけど、『嫌、がんばります！』って言って。次の『数Ⅱ』の試験くらいからまた（受験室に）入ってやったんですけど。……中略……もう全然（点が）取れなかったですね。それがまあ、実力といえば実力かもしれないですけど」

舞は、センター試験で予定どおりの点数が取れれば二次試験では教育学部で、ピアノの実技試験の課されるところを受験しようと考えていた。島根大学か、それが駄目なら中四国の国立大学の教育学部のどこかに行こうという考えだったのだ。しかし結果としては、足切り点にも届かなかった。「そのセンター試験に失敗したときに、私はもう小学校の先生にはならないなと、そう思ったんですよ」

じっくり思い返す間もないまま、彼女は私立大学の一般入試を受験することにする。「どこ受けたかなぁ。私けっこう（私立入試）受けてるんですよ。例えば中京大学も受けてますし。……中略……ほんとに滑り止めで、短大も受けているんですね」しかし、私立の四年制大学には一校も合格できず、卒業前に合格通知を手にしていたのは、仁多から峠を越えた岡山県北部にある新見女子短大一校だけだった。

三月の半ばを過ぎてからもなお、彼女は四年制大学にこだわり、二次募集に片っ端から応募した。担任はすでにあきらめ顔だったというが、彼女としてはその年の最後のチャンスにかけてみようと考えた。

「短大はどうしても行きたくなくて、そのときに私は浪人しようと覚悟を決めたんですね。で、あの、父と母に浪人したいんだけどって相談したんですね。そしたら絶対駄目だって言われたんですね。女の

子だし。とにかく受けれるところがあったら全部受けなさいって言ってくれたんで。で、私立でも受けようと思って、私立の二次募集で受かりそうなところを探して。そうですね、金銭的によりも世間的にですね。世間体を気にしてたんじゃないかなぁ」

彼女の進路が定まったのは三月末であった。最終的に進学することになった先は、二次募集で合格した、彼女いわく「ちょっとマイナーな」名古屋経済大学の法学部であった。地域も志望学部も全く思いもよらない方向であるが、自分の行き先が「四大ってことが嬉しかった」、とそのときを振り返る。この大学のキャンパスは、名古屋市から名鉄線で少し郊外に出たところにあった。彼女は大慌てで家を出る準備をして、やっとのことで当座の住居を確保した。

「本当に卒業式も出ないで、あわただしく引越ししたんですよ。だから、アパートがなかったんですよ。ましてや島根にいて名古屋で賃貸を借りようとすると、こう、電話で聞くしかないじゃないですか。大学で不動産屋を紹介してもらって、電話して聞いたら、もう全然ないって言われたんですね。で、父がやっと見つけてくれたところが借家だったんですよ。借家っていうのはご存知ですか？　平屋の一戸建ての、間取りが2DKくらいですかね。広いんですけど、ものすごく古くて怖いんですよ。で、けっこう虫が出てくるんですよ。こんな大っきいムカデとか出てきたときがあって、ナメクジとかもすごいいっぱい出てくるし、こんなところに住みたくないって言ったら、最初だけだからここはちょっと我慢して、あとは自分で見つけなさいって、両親が言ってくれたんですよ。それで、二年目くらいから、普通の二階建てのコーポに移ったんですよ。……中略……最初ね、父と母といっしょに来たんですよ。引

越しの時ね。そして両親が帰ったあと、『あー、これから独りだ』と思って寂しくなったんですけど。あとはあんまり。友だちもすぐできましたし」

大学時代の四年間は、彼女は講義にはどちらかというと真面目に出席した。女子の少ない学部であったこともあり、真面目に出席しない（男子）学生のための「ノート係」のような役目だった。実際、彼女は専門の民法の講義内容には興味をもてたようで、次のように振り返る。「民法の物件変動っていって。土地とか、そういう不動産が動く仕組みみたいなものを、まあ、一応勉強したつもりなんですね。それでそこで興味をもったものですから。（今の仕事の役に）立っているとは思いますけど」大学受験失敗の末の不本意進学なので、このように大学教育に前向きに適応できたことには、少しばかり驚かされる。

アルバイトは拘束時間の短めのものをいろいろ経験してみた。イタリア料理の店や結婚式場のウェイトレスの仕事など飲食関係の接客が多かった。大学生としてはごく普通の経験にすぎないのだが、このようなちょっとお洒落な接客業の類は、仁多郡内では決して経験できない。これも都会の若者ならでは

の新鮮な生活経験だったことだろう。アルバイトで得たお金は、服を買ったり旅行に行ったりということに使って、学費と生活費は仕送りに頼った。大学ではクラブやサークル活動などは特にやっていない。

最終学年である四年生になると、直ちに就職活動をした。彼女は日本全国どこでもいいと思っていたので、島根県での企業説明会にも出てみたという。ただし最終的に、不動産関係の業種に狙いを定めたのは、彼女なりに考えた戦略の結果であったという。

「就職がまず難しいと思ったんですよ。四大卒業の女の子だということで。で、資格ももってない、大学の名前もほとんど知られてないですし。うーん、自分がすぐ決まるとは思っていなかったんですね。だからとりあえずいろんなところを受けようと。業種なんかはあんまり関係なく、とにかく資料請求から始めたんですよ。私はかなりがんばったので、二〇〇社近くはハガキを送りましたね。……中略……で実際に戻ってきたのが何十社。で、やっぱり厳しいなと思って。ただ就職活動してると、けっこう男女差別をしてくる会社があるんですよ。男女差別とか、あと大学の差別とか。そういうの

がなくて、わりと平等に扱ってくれるのが住宅販売の営業だったんですよ。あのー、やっぱり住宅を欲しいなって思ってるのは奥さんとご主人ですよね。で、男の営業マンだと、奥さんとあんまり仲良くなれないじゃないですか。だけど女の営業マンだったら昼間でも上がり込むことできるし、うん。けっこう自分にプラスで使える武器、女であることをもっと有利に使える仕事だと思って、それで住宅販売をしようかなと思って。で何社か受けたんですよ」

「男の人と肩を並べて働いていたい」と彼女が考えるようになったのは、このときの就職活動以来である。最終的に現在勤務する名古屋の不動産販売会社から内定をもらい、彼女は就職活動を終えた。この会社を選ぶという意思決定には、故郷や両親への想いは微塵も作用していないことは言うまでもないが、同じように名古屋への愛着や、名古屋でできた同性・異性の友人と離れたくないという動機も作用しているわけではない。

大学を卒業して、通勤に便利な名古屋市内に引越しをして職業生活を始めた。インタビューの時点で、独り暮らしはまる六年になっていた。彼女はこの会社で、一戸建てやマンションを販売する営業の仕事をしている。初めのうち彼女は、自分の扱う物件が横田の生活からは考えられないほど小さくて、そのことがショックだったという。そして、こんな小さい家にみんな苦労してローンを払って住むなんて、たいへんだなあと思ったという。今は業務にもずいぶん慣れてきた。販売実績については彼女は、男性社員と対等に競い合っている。入社初年度は一〇件ほど販売契約をまとめ、社内の新人賞を獲った。仕事に必要な「宅建」の資格はまだ取得していないが、そろそろ必要になってきたので受けようと考えて

いる。しばらくはこの仕事を続けていきたい。

質問紙調査の調査票の、「将来希望する職業」の回答欄には、かつての「小学校の音楽の先生」に代わり、現在は「会社役員」と書かれている。彼女自身は、自分のライフコースをこのように振り返る。

「高校三年生のときに受験に失敗して、『先生になれない』と思って、なんかわからないけど法学部とりあえず受けてみて合格しちゃって。全然違うこと勉強するのもいいかなって思って。本当に気軽に来ちゃったんですね。やっていた民法が意外とおもしろかったりとか。それで不動産のことを知ったんですかね。たぶん田舎に住んでいる人というのは、将来何になりたいですかって聞かれたときに、先生かお医者さんか、看護婦さんとか、保母さんとかそういうのくらいしか知らないと思うんですよ。本当はもっといっぱい、電車乗ってても、車掌さんとか、バスの運転手さんとか、広告屋さんとか、高層マンションの分譲とか、いろんな仕事がいっぱいあるじゃないですか。そういうのを知らないで私たち育っているじゃないですか。大学に入って、そういう仕事もあるんだっていうことがわかって、そして民法で多少勉強したことを活かしたいっていうか、そういうのもありましたね。で、何だろう。男の人に負けたくなかったんですね。……中略……高校卒業した時点でもう方向転換してたんですね、自分で。他のことを、自分ができることを探そうって」

三つ年下の弟は、彼女が就職活動をした年に、やはり名古屋近郊の中京大学に進学して出てきた。きょうだい二人だけではあまり会うことはないと言うが、彼が将来どういう仕事に就くかを考えるときに、彼女は遠い故郷や両親を想う。

「どうするんでしょうね。やっぱり父がすごくそれを心配していて。私は積極的にいろんなことやる方だから、『おまえのときは心配してなかったけど』って。弟はちょっと内向的っていうか、おとなしい子なんですね。だから営業職とかは絶対できないし、小学校、中学校かな？　の先生になりたくてこっちに来たんですね。ただ、今は教員の採用少ないから、ちょっと難しいから。まぁ地元の島根の企業も受けといた方がいいから、『ちゃんとおまえから勧めといてくれ』って父は言うんですね。……中略……弟がもし私のようにこっちに就職しちゃったら？　実際に弟がどう考えているか、私聞いていないからわかんないんですけど。二～三年こっちにいても、いつかは島根に帰って来てくれるって父は思っているんですけど、それはわかんないじゃないですか」

弟はともかくとして、彼女の今の知識と経験を活かせる職場は、どう考えても島根の山間地域にはありそうにない。そのことは家族みんながわかっているようだ。

鈴木伊久美のライフヒストリー

聞き取り調査のとき、このクラスには一人だけ結婚して改姓している対象者がいた。鈴木（旧姓杉山）伊久美である。筆者は彼女が夫と暮らす吹田市内のマンションまで出向いて話を聞くことにした。彼女には一歳の長女がいるので、長時間話を聞くにはその方が都合がよかったためである。アポイントメントを確認する電話の応対は、落ち着いたソツのないものであった。また、約束の時刻に少し遅参した筆者を、彼女は娘を抱いて家から出て表通りに立って待っていてくれた。高校三年時と二四歳時の質問紙

調査票には、どちらもとてもきれいな字で、丁寧に回答がなされている。最終学歴は「関西大学経済学部卒業」、「現在無職」となっている。実際に会ってみると、伊久美はまなざしの真剣な、ちょっと勝ち気な雰囲気のある若い母親であった。

彼女は小学校のときからクラスのまとめ役であった。そして何をやってもトップの優等生だった。移動や交流の少ない山間地域の学校生活である。一度リーダーとなると繰り返し委員長、会長という役が回ってきた。彼女はまた、勉強がよくできただけではなく、勉強が好きでもあった。

「小学校とか中学校とか、すっごい勉強好きで。テストとか、中学校とかゆうたら実力テストとか、もう、きれいに、『社会は何ページから何ページまで』って。全部きちんとやったら、それを消していくのが毎日の楽しみで。部活（陸上部）してたのに、何で一日六時間とか勉強してたんだろう？　学校も全然眠たくないし、もうテストが大好きで」

センター試験のときには、国立大学が第一志望であったが、どういうわけか大きく失敗した。模擬試験ではコンスタントに七〇〇点台（八〇〇点満点）を取っていたのだが、本番ではそこまでは届かなかったのである。「それなりに集めていた」という国公立大学の二次試験の願書（一橋大学法学部、大阪大学法学部など）も要らなくなった。

「（センター試験の自己採点の日は）点がないということがわかって

て、学校行きたくないって。もうすごいその日が長く感じられて。頭のなかから大学っていう文字が消えちゃって、もう『どうしよう、どうしよう、どうしよう』って。で、頭のなかにはどっちかっていうと、もう就職かなっていう方が来ちゃって、『どうしよう、どうしよう』と思って。私学やったら金銭的にも高いんで、できることなら行きたくないって、その時思ってて、『どうしよう、どうしよう』で、もうどん底でした」

金銭的な問題は伊久美にとってはたいへん重要なことだった。高校三年生のこの時、彼女の母は三八歳、父は三七歳であった。一家は父母と彼女と、二つ違いの妹、一二歳と一四歳離れたまだ幼い妹、弟の合計六人家族であった。父も母もダンプカーの運転など建設関係の現場の仕事をしており、ともに学歴は中学卒である。子どもの数と収入の面で、彼女の家庭環境は楽な方ではなかったのである。

――「浪人をしようという気持ちは？」

「いや、もう経済的にもう。やっぱり（受験勉強は）バイトしながらとかいうことじゃないし。島根でいくと、やっぱり松江北高とかいうそういう（補習科[1]）ね。行ったとしてもやっぱり下宿代から全部かかりますもんね。下にも（弟妹が）いたんで。経済的なことがひとつと、浪人してまで行きたいという気もなかったものですから。現役で行くから私のなかでは価値があったんですけど」

このときの彼女の決断は、私立大学に進んで、親には最初のひと月分だけ学費・生活費を出してもらい、あとは奨学金と自分のアルバイトでやっていく、ということであった。そして、関西圏に絞って、ランク上位の私立大学を受験した。彼女が合格したのは関西大学経済学部のほかは、京都産業大学であ

った。

「もうそれこそ、もう国公立が第一志望だったんで。で、センター（試験）で失敗したんで、（国公立では）入れる学校が決まってきますよね。そこには行きたくないと。で、最初学部で選んでたんですけど、だんだん試験が近づくとそれどころじゃなくなって、学部はどうでもいいけど、この大学ってなって。で、関学（関西学院大学）も一応私立のなかでは志望だったんですけど、落ちちゃったんで、関大（関西大学）に」

初めての大都会の華やかな名門私立大学、にぎやかな家族を離れてアパートでの独り暮らし、生活のためのアルバイト。「こんなはずじゃなかった」という受験失敗の思いを整理する間もないまま、伊久美の周りで何もかも新しい環境が怒濤のように始まった。「帰りたい。大阪に来なきゃよかった。広島ぐらいにすればよかった……中略……とにかく毎日寂しい寂しいはありましたね」と当時の心境を振り返る。

彼女のアルバイトは、他の学生と違って社会経験でも人間関係づくりでもない。ひたすら生活のためである。少しでも時給の高い仕事なら何でもやった。「喫茶店もやったし、あと、（パートの）おばちゃんたちと、『マロニー』って（加工食品が）ありますよね。近くにその工場があるんですよ。そこに行ったりとか。あとは家庭教師、スイミングのインストラクターとか。あとパチンコ屋さんに景品で、ビデオとかCDとか置いてあるんですけど、それの卸しのところの出荷のなかの方でやる作業とか」

アルバイトに追われながらも、伊久美は大学の講義には出席し続けた。実際、卒業時にはゼミの指導

教授から大学院への進学を薦められたり、有利な条件の職を紹介されたりするほど目をかけてもらっていた。

学業の方については、「大学に入るのは入ったんですけど、同じ学科の人と語学とかの試験を受けても、自分が横田高校にいたときほどは、いい点が取れない。というより周りに賢い人がたくさんいて、で、『あれっ？』というふうに思った」という。それで単位を落とすほどではないが、調子は少しだけおかしくなった。小学校からずっとトップレベルだった優等生が、都会の大きな大学に出て来ると、いつの時代にも、こうした経験をするものである。彼女はこう言葉にしている。「街の子は頭がいい。あんまり勉強しなくてもいい成績を取る」

大学生活を始めて間もない一年生の初夏、伊久美は「寂しかったから」、「だれかに頼りたい」という気持ちから、アルバイト先の喫茶店で知り合った男性と交際を始めた。交際はそのうち「金銭的にも負担が少ないから」という理由で、彼のマンションでの同棲へと変わった。彼は一八歳年上の管理職サラリーマンであった。彼女の若い父母とはほとんど同世代ということになる。交際が続いたので、けじめをつけるために、と母親に入籍を勧められた。それで大学の二年生の終わりに籍だけを入れた。育ててくれた実家の両親には、これ以降、細かいことは言われない。

「主人を立てて、って言われますね。もっと立てなさいって言われます。それくらいかなあ」

二人は卒業した後で結婚式を挙げ、その後しばらくして彼女は長女を身ごもった。夫も鹿児島から大阪に出てきた人なので、近くにはサポートを頼む身内もいない。子育てについては保健所に問い合わせ

たりしながら、だいたいのことは彼女が自力でやってきた。筆者のインタビュー調査は、その子がちょうど一歳になったときのことだった。彼女は上手に愛娘をあやすのだが、二時間も黙って眠っていてくれるものではない。目の前で泣いたりむずかったりする娘という「現実」を、まさに受け止めながら、自分の青春を振り返る。

――「この六年間で、いろんなことがあったと思うんですけど、自分自身の考え方とか、変わったなって思いますか？」

「思いますね。だから前は、さっきもお話したとおり、自分がしっかりしなきゃというのがあったんで、肩肘張っているところが（ありました）。弱音吐くことなんて全然なかったし、人にそういうの見られるのも嫌やったし。そういったものが、大学入って結婚とかして、助けてもらいたい時は、助けて欲しいって言えるようになったし。よく昔から知ってる人は、『性格丸くなったよね』って。……中略……自分でもそう思いますね」

――「それは（原因は）結婚ですか？　お子さんをもたれたことですか？」

「結婚！　結婚です。で、また歳が近い人だったら違ったと

思うんですけど、もう、遊びもいっぱいしたし、買いたい物も買ったし、仕事も安定してるし、あとは家庭だけだって人だったんで、あと足りないものは、家族って。こっちも頼ってて安心だし。何かほっとしたということ」

自分に合った形の幸福を手にするには、いろいろな順路があるのだろう。難関国立大学をひたすら目指した高校時代、苦学した大都市大阪での大学時代、意外なほど早い結婚と初職就業しないままでの出産・育児、彼女のライフヒストリーは、必ずしも単調に進んだ道ではない。彼女は彼女なりに自分を曲げて、おかれた生活環境に適応したのだという。しかし筆者には、生活環境や生きる目標はいろいろ変わりはしたが、彼女のもつ芯の強い努力家という本質は小学生の頃から変わってはいないように思える。

インタビュー時点では、子どもはこの長女一人だけでいい、と伊久美は考えていた。それならば、やがて育児に手はかからなくなり仕事をもつことも視野に入ってくるだろう。実際に彼女は知人の紹介で中学生の家庭教師を始めたところだった。

大学受験前の希望の職業の欄には「テレビ局内の何か」と書かれていたのだが、今の彼女は、子育て

後に行政書士を目指そうと考えている。彼女はまだまだ若いし、試験勉強は嫌いではない。

1　県内の大規模校に併設されている、大学進学浪人のための教育機関。県立高校の専攻科として、県内他校からの編入者も受け入れている。

第5章

都会の空気と故郷に引き戻す力

出雲横田駅に降りる「汽車通学」の生徒たち

Jターン型とUターン型

この章では大学進学を機に島根県外へと流出し、就職などの機会に再び県内へと戻ったJターン型と一部のUターン型の若者の生活史を追う。Jターン型とは、遠隔の都市部の大学に進学したが、初職就業（多くは大学卒業）を機に島根県内に戻るアクションをおこした一群である。これは職種でいえば県職員、県教員に採用された者、あるいは県内に支店や支社を展開する県内企業への就職者などである。このJターン型に分類されるのは、三五サンプルのうちで男子が二名、女子が六名の合計八名である。

他方Uターン型とは、大学進学のためにひとたび都会に出たものの、就職などの機会に故郷に戻って生活をしている事例である。郡内では大卒者の求人はほとんどないので、この類型の多くは、家業を継いだり見習っているか、町役場や町関係の職場（例えば町立保育所など）で働いたりしている。明確にUターン型に分類できるのは、クラス全体では男子二名、女子三名の合計五名と多くはない。ただし、故郷にひとまず戻り、再び体制を整えて県内他地域に職を得ていくという場合もある。かれらのほとんどが実家に戻って家族と生活している。

二〇代中盤のこの時期、大学進学時に都会に出たクラスの友人たちのかなりの数は、故郷を省みることなく、今も他地域での生活を続けている。しかし直系同居家族の多いこの地域では、「家を継ぐ」ということは、田畑や牛や家屋敷や先祖の墓の世話をするという極めて明確な実態を伴って、今でも息づ

いている。きょうだいのうちでだれか一人は、少なくとも県内にまで戻って（残って）「家を継ぐ」準備段階に入らなければならないということは、かれらの世代に対しても半ば常識のように語られるという。

井上めぐみのライフヒストリー

井上めぐみは、仁多町で小売業を営む両親のもとで長女として育った。彼女の父も母も最終学歴は高校卒である。彼女は祖父母と父母と妹という三世代同居の大家族に育った。高校三年生の一〇月の質問紙調査では、将来やりたい仕事は「高校の先生」と回答している。高校時代には保母になろうと考えた時期もあったというが、ほぼ一貫して教員を目指していたという。教員になろうと思ったきっかけは、中学校の三年生のときの担任の先生が「すごく一生懸命」だったのを見たことで、「生徒以上に、行事なんかをがんばってされていて、そういう先生になりたいなと思って、それからずっと教員してみたいなあと」思い描くようになったのだという。

志望大学としては、センター試験の前までは「国公立（大学）の教育学部の中学英語（教育課程）」を目指していた。具体的には広島大学の教育学部や「大阪や愛知の教育大学」を考えていたようだ。ところがセンター試験の自己採点結果を見た時点で、それ

には「全然点数が足りない」ということになって、この時点で急遽進学先を変更した。センター試験後に「点数が低くてそれで（担任の）吉田先生に怒られて」しまうような状況だったと述懐するところをみると、島根県を出て遠方の大学に進む実力と心構えは十分にあったのだろう。彼女自身はコメントしていないが、彼女のなかでの大学進学のイメージは、地元の島根大学よりも難易度の高い県外の大学に出るというものだったようだ。

どうして島根県内に留まることを考えなかったのかを尋ねると、少し間をおいて考えてから「何でしょうね？　ほんと仁多とか横田はほんとに田舎だったので、やっぱりそういう大きいところって言ったらあれですけど、出てみたいというのがあった。特に何か理由があったわけじゃないような気がします」、「ただ遠くに行きたかった、それだけのような気がします」という慎重な答えが返ってきた。

ともかく、こうしてセンター試験直後からめぐみは、慌てて私立大学への進学を視野に入れ始めた。ところが、私立大学には教員養成系の学部はほとんどない。「私立、滑り止めに受けたところなんですけど、そこしかなくて。もう一年勉強して……中略……というのが自分にできるかわからなくて。もうそれで」ということで、一般受験で合格した姫路獨協大学の外国語学部に進学することを決めた。「遠くに出たい」、「英語がしたい」という希望の末である。

高校を卒業すると彼女は姫路市に転出して、四月からはワンルーム・マンションでの独り暮らしが始まった。大学では中学時代から続けていた吹奏楽の部活動に入り、それに打ち込んだ。この活動は四年生まで続けた。楽器パートはクラリネットで、コンクール前などはみんなで合宿をして一日中練習した。

このときの友人たちとは卒業後姫路を離れても親しい付き合いがある。

アルバイトとしては、幼い頃から家業に親しんでいたことが作用したのか、大規模スーパー「マイティ」の食品のレジ打ちを始めた。驚いたことに、これも入学直後から四年間同じ職場で継続したのだという。そもそも大学生のアルバイトは、いつでも辞めることができる、という自由さが特徴である。地道なレジ打ちの仕事を四年間も続けるというところに、本人の勤勉さと、雇用者側の彼女への厚い信頼を窺い知ることができる。そう言われれば、テキパキしていて、社交的で、礼儀正しいという点で、教員志望の彼女にはスーパーのレジの仕事は向いているようにもみえる。

めぐみは順調に単位を取って進級していった。そして四年生の六月の時点で、母校での教育実習が課された。中学校教諭志望の彼女は、仁多中学校で教育実習を経験し、そのときに最終的に島根県の教員採用試験を受験する決心を固めた。

「なんかやっぱり、なんていうか大っきいところだと教員できないかなぁという気になって。やっぱり田舎に戻ってやる方が自分に合ってるかなぁと思って。それに私、一応長女なので」と、このときの決意を振り返る。

その一方で、大学時代四年間を過ごした兵庫県で教員採用試験を受けようという気持ちは、このときめぐみのなかには全くなかった。「私は、向こうの言葉がやっぱりあれだから。馴染めないじゃないけど、うーん。それでなんか、姫路は好きだったんですけど、なんか他所っていうか、ちょっと違うところだなぁという感じがしたような気がして。私は仁多の田舎で育ったので、なんかその方が、田舎が合っているなあと思った。……中略……なんかそういう田舎のちっちゃいとこでやるのもいいかなあと思ってます。ただ大っきいところは駄目な気がして、自分で。ちっちゃいところで……中略……向こうに出て、住んで、暮らしてみて、何かすごく仁多は良い所だなぁと思って、それで帰りたいなあ」と思ったのだという。

ところがこの年の教員採用はたいへん厳しい状況にあった。大学新卒人口が第二次ベビーブーム世代と重なって増えているのに対して、少子化で小中各校で生徒数が減り、教員採用数が減ったためである。そこへさらに、平成不況期のために一般企業の（女子）採用が熾烈を極めたため、教員採用試験の受験者数が増えた。そのため教員採用試験はどの県でも戦後最大の狭き門と言われた。そういうこともあって、めぐみは一年目の島根県の教員採用試験では、一次試験

の段階であえなく不合格となる。もしかすると彼女は一発勝負の試験にはあまり強くないのかもしれない。その後とりあえず兵庫県の高校の常勤講師の職を得られることになったので、大学は四年で卒業することにした。

ところが卒業式を目前に控えた三月、友人たちと海外旅行に出かけている時に、仁多中学校で英語担当の（教諭ではなく）常勤講師の採用枠があるということが、仁多の実家の母に知らされた。

「シンガポールの方、行ってたんですけど、ちょうど『着いたよ』って連絡したら、もう何か親がすごいびっくりしてて。早く電話せんと駄目になるからってことで。で、シンガポールから直接、教育委員会の方に電話して、『是非お願いします』ってことを言いました。遅れてたら多分、（採用は）なかったかもしれません」

こうして、またしても土壇場の急展開で、めぐみは七年ぶりに母校に戻って英語の講師になることが決まったのだった。

思いがけずUターンすることになった彼女は、以後二年の間、故郷の中学校で教鞭を取った。教諭と常勤講師の雇用面での格差は大きいが、子どもたちを前にして教壇に立てば同じ「先生」である。中学校に勤務しながらの教員採用試験の受験勉強は、じつはなかなかハードで、最近では、島根県でも受験勉強のための時間を十分に得るために、常勤講師の職を辞して一年間、あるいは半年間教員採用浪人をするケースすらあるという。それでも彼女の場合、中学生に英語を教える現場をもち続けたままで挑戦し、二年目の夏には念願の教諭としての採用試験に合格した。この間に妹が実家に戻ってきて地元の横

仁病院に勤め始めた。筆者とのインタビューの時点（一月）では、めぐみは母校の後輩にあたる中学一年生に、初めて習う英語を教えたり、試験問題を作ったりという教員としての仕事にやりがいを感じていると目を輝かせて語ってくれた。彼女が将来就きたい職は、言うまでもなく「中学校教員」である。

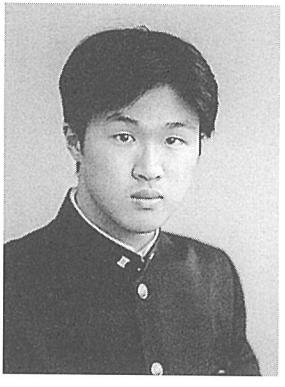
しかし次年度から島根県への正規採用となるということで、まもなく異動で仁多中学校を離れることが、調査時点ではほぼ確実であった。めぐみは再び故郷を離れ、島根県内の、どこか新しい土地での教育経験に二〇代の残りの年数を費やすことになる。このときすでに彼女は、これから県内周流の流れに加わることを覚悟し、それを前向きに受け止めていた。彼女の英語教諭としての初任校は、皮肉なことに「ちっちゃいところ」ではなく、松江市内の県内屈指の大規模中学校になったという話を聞いている。

古池建亮のライフヒストリー

よどみない口調の標準語で、早口だがはっきりと話す。東京の都心のホテルで待ち合わせた古池建亮は、一八〇センチを超える長身の好青年である。彼は横田町で小売業を営む家庭で長男として育った。両親の学歴はともに高校卒である。高校時代、家族には父母と本人のほかに四歳年上の姉がいた。姉は故郷を出て阪神間の名門私立大学に進み、そのまま神戸で企業に就職、建亮が二四歳のとき結婚した。古池家はもともと、近隣地域から父親の代になって家業の関係で横田町に移ってきた家である。遠くない親戚にはある町の町長をした人がいるという。そういったことの影響か、高校時代から生徒会役員を

務めるようなリーダー的存在であり、クラスの友人はもとより、授業を担当した教員たちにも後々まで記憶されているほどの優等生であった。高校三年時に就きたかった仕事は「外交官または国家公務員」である。この当時自分が描いていた将来像は六年経っても自分で「はっきり記憶している」という。このクラス、あるいはこの地域には珍しく、高校時代は中央でのエリートを志望していたタイプである。

高校三年の二月から三月にかけて彼は、国公立・私立を問わずいくつかの大学を受験している。志望学部については、「文学とか哲学って言われても、これまたぴんと来ないしなぁという話だし。例えばじゃあ心理学とかそういったのも面白いかもしれないけど、まだ自分が何者かもわかっていないような人間が心理学をやっても果たしてわかるのかなあ、と。なんかそういうようなんで、高校生の時なりに考えたうえで、今までの家庭環境とかいろんなことから考えて、法律系、大きい枠で捉えて社会科学が一番いいだろうとそういうふうに思ったので、法律経済、特に法学部を考えた」ということらしい。結論からいうと彼は、早稲田、慶応を避けて「本命として」狙っていたという教央大学法学部政治学科に合格し、そちらへの進学を決めた。この他は私立大学では、教央大学法学部法学科や同志社大学に絞り込んで受験した。さらにそのうえで、センター試験の得点をもとにして合格できそうなレベルにあった、岡山大学を受験して合格している。



高校三年時の志望大学について詳しく尋ねると、建亮は素直に

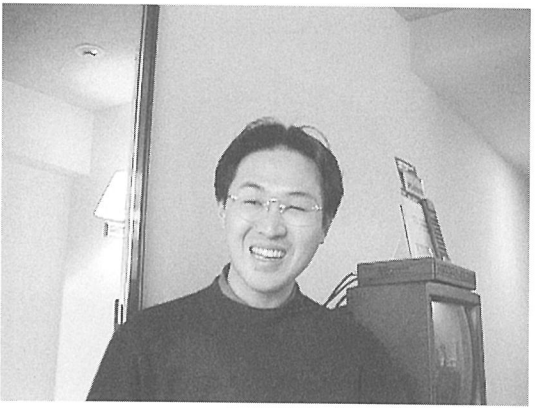
言葉にした。

「僕、一橋（大学）に行こうと思ってたんです。数学がどうしても、もうなんかできなくってですねえ。……中略……うーん。（志望は）国公立にしてましたけど、自分としては（模擬試験の合否の）判定とかがどうしてもいいのが出てこなくて、数学がどうしても難があるっていう点からすると、難しいのではないかということは覚悟してましたね。でもやっぱり、これはやっぱり最後までチャレンジしなきゃいけないと思って、（センター試験対策や国公立の二次試験の対策を最後まで）やってました。……中略……クラス自体も、国公立は必ず受けましょうという、まあ、あれは学校の方針というんですかね。だから田舎の高校って国公立、何校受かった、国公立大学に何人合格者を出したっていうので（学校の良し悪しが）判断されるっていうのはけっこうありますよね。……中略……僕としては、学校がそういう形で、方針できてましたんで、クラスもそこに入ってるわけですよね。五クラスあってやっぱり一番の、まあ四年制大学を狙うクラスっていうのは、やっぱりそういう形になってましたんで。これはまあ国公立を第一志望にする以外はないんだろうなあという形で。だから自然と、洗脳されていたわけではないですけど、考えがそういうふうになっているというか。まあ特に深く考えずに、自分が行きたい大学として一橋大学を掲げていったという形ですね」

このように、国公立大学に強く執着していた様子は見せない。岡山大学を受験して国公立大学への合格実績を作ったことは、横田高校の指導に対する、彼なりの恩返しのつもりのようだ。ともかく彼は、だれもが国公立に進学するという横田高校の（というより、当時の三年A組の）学校文化には少し否定的で

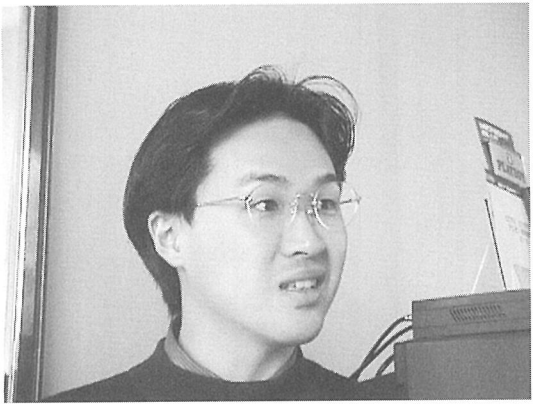
あるように見えた。ただし、きょうだい二人を遠隔の大都市の私立大学に出すというのは、授業料と生活費の仕送りのことを考えると（六六頁参照）、この地域では裕福な家庭の子どもたちだけに許された選択肢である。

こうしてこの秀才は奥出雲を離れ、晴れて首都圏の有名私立大学の学生になった。確かにこの学部は、司法試験志望を公言してもおかしくないほどの高いレベルの進学先であり、彼自身としても、満足できる結果であった。キャンパスからは少し離れたところにワンルーム・マンションを借りて、自転車や電車で通学した。元生徒会長も、さすがに初めはキャンパスの空気に馴染めず、また一般常識のような知識の不足と、言葉の訛りなどから社交的になれない経験をして、文化的バックグラウンドの違いを痛感することになったという。



「やっぱりどうしても高校出たばっかりで、まだわかんないですから、話も聞くばっかりですしね。話もできないような感じですから。生活自体がやっぱりもう難しかったですね。本当に」

それでも建亮は「外交研究会」や、そのなかで開かれる自主ゼミに参加したりして、堕落することのない大学生活を送った。



講義にも真面目に出たのだが、「面白いものが少なかった」という。皮肉な言い方だが、これはちゃんと受講した証しともいえる。

大学二年生の時、ちょっとした呼吸器系の病を発症し、それを機に運動を始めようと思い立つ。そしてスポーツ・ジムでエアロビクスを始めた。これにはすっかり「ハマって」しまい、それ以降、本格的にレッスンを受けるようになった。アルバイトは、引越し業者の荷物運びなどを少しやった。両親からの仕送りが十分にあったのだろう。話を聞くかぎり、金銭的に苦労した様子は見せなかった。

大学の四年生のときに初めて司法試験を受けた。しかし第一関門である筆記試験で不合格になった。この時点で司法浪人を決め込むこととして、そのまま大学に籍を置いて、司法試験対策を独学しながら首都圏に留まり続けることにした。この大学の図書館には自分と同じような司法浪人がかなりいたという。だが二年目も合格しなかった。三年目もまた合格しない。その間、教央大学法学部に在学したままである。

さすがに司法浪人をこれ以上続けるつもりはなかったようで、三度目の挑戦に失敗したことを一区切

りとして、島根県の職員採用試験を受けた。彼はこちらには合格している。じつはその前年にも、力試しのつもりで島根県の職員採用試験は受けてみていたのだという。

インタビュー実施は二四歳の二月の末、大学六年生のときであり、彼はまだ首都圏在住であったが、島根県の職員として次の四月から採用されることが決まっている状況であった。島根県の職員としての赴任地が松江市にある島根県庁の本庁になるのか、全県に散らばる県の機関への配属となるのかはこの時点ではわからなかった。それでも建亮のライフコースは、横田高校から首都圏に出て六年の大学生活、その後二四歳で島根県内を周流する県職員に加わるというJターン型になることが確定していた。

筆者の勝手な予想では、彼のこのようなステップの取り方からは、いずれ県行政のエリート職を経て、地方政治家になることも不可能ではないように見える。元生徒会長の建亮の将来像のひとつとしては、人の勧めがあればそういうことを考えてもいいように思える。もちろん本人は県職員として勤める決意だけを熱っぽく語り、そうした突拍子もないことは、間違っても明言はしない。

いつの頃からか彼は「長男」ということが気になりだし、それで外交官への志望は捨て、弁護士になるとしても、とりあえず島根県内に戻ろうと考えるようになったという。もし今後また司法試験を受験して合格することがあっても、やはり島根県内で働きたいと思っている。首都圏に戻ろうという意向はもはや全くない様子である。この時点で、建亮に交際相手がいたのかどうかはよくわからなかった。しかし、姉のケースとは違って、故郷での家族関係や島根県内での自分の将来設計を大切にしたいと考えている様子が見受けられた。結婚観について尋ねてみると「僕は長男ですから、さあどうしようかって

いうところですね」という答えが返ってきた。

このインタビューの後、彼の最初の配属先は島根県隠岐支庁に決まり、二年後に連絡を取った時点ではそこでの勤務を続けていた。古池建亮は、故郷の横田町からも六年を過ごした東京からも遠く隔たった、日本海に浮かぶ離島の支庁を最初の赴任地として県内周流をスタートさせたのである。

甲斐理英のライフヒストリー

甲斐理英は祖父母と父母と弟の六人の三世代同居家族に育った。実家は横田町である。両親はともに団塊の世代で学歴は高校卒である。どちらも役場に勤めていた。この地域の家庭としては、生活条件は安定している方で、経済的にも余裕のある方であった。彼女は小学校の頃から本を読むのが好きで、友だちと競うようにして図書室の本を読んだ。将来は「イラストレーター」になりたいと思っていた彼女は、大学に入ってからも「本とか、マニアックな世界とか、美術館とか、そういうところに一緒に行ってくれる」友人を探した。

高校時代には、国公立大学を志望する三年A組に在籍しながらも、進路志望としては、いつも私立大学の名前を挙げていた。「私の行ってたあのクラスは、国立専用のコースなんですよ。だから私立を受けると言うと、何っ？　て感じで。先生の前で私立の学校の名前ばっかり挙げるからめちゃめちゃ嫌われてたと思うんですよ。……中略……進路（指導）の先生の前で『志望コースを三つ挙げよ』って言われて、いちばん最初に『奈良大』って言ったら、こっちに（担任の）吉田先生がいらっしゃって、『ば

か！　何言ってんだ！』って言われて、『島大です』って言いなおしたりしてね」

この当時について自分では、反抗期だったと振り返る。結局受験勉強はあまりせずに、図書館にこもって好きな本を読んでいた。センター試験も受験するにはしたが、「あまり調子よくなさそうだった」ので私立大学の受験に賭けることにした。私立大学を何校も受験したのだが、最終的には広島の学教女子大学の文学部国文学科に進学することになる。このとき彼女は国文学科が何を学ぶところかは全然知らなかったという。本来の希望は歴史を学ぶことだった。

「奈良大とかあとは岡山の、えっと、もう忘れましたね。えへへ。なんかいっぱい受けたんですけど。学教女子大学はとりあえず滑り止めだったんですよ。で、そこしか受からなかったんです。あと短大はいっぱい受かったんですけど、短大は全然行く気がなくって。（短大は）親が、とりあえず落ちるといけないからと言って、受けさせられたというのがあるんですけど」

広島方面への進学は、彼女にしてみれば思いがけず決まったという面があった。さらに女子大というのも、幼い頃から公立共学校で育った彼女には思わぬ結果であった。「女子大って怖いとこだと思っていて、女子大は（志望から）外してたんですけど、でも女子大の方が何となくレベル的に低いところがあったんで、私の能力ではこのくらいだろうって感じのところはまあ、その大学だった」ということらしい。

ともかく四月に広島市に出て、一年目はその大学の寮に入った。しかし「囚人みたいな扱いで、もう絶対こんなとこ嫌だと思って」、二年生になると寮を出て近くにアパートを借りた。大学時代はアルバイトはほとんどせず、主に仕送りで生活した。専門は国語学だったが、大学時代には何に打ち込むということもなかった。あえて言うならば好きな本を読んで過ごしたくらいである。

四年生のとき就職活動を少しするが、どこにも決まらない。とりあえず大学は卒業して、住居もキャンパス近くの郊外のアパートから広島の街中に移し、図書館司書の資格を「名目上は」目指して、五年目の都会生活を続けることになった。

「あんまり何もしてなかったんですけれども、とりあえず親には、仕事探してるからと言って、ちょっとお小遣いもらって、あとはまぁ、たまにバイトしたり、実際のところは、あんまり真剣に就職活動してませんでした」

「新卒時は、それこそほんとにやる気がなくって。とりあえず卒業直後頃は、司書の採用を目指して、そのために試験を受けたんですけど、かすりもしなくって。それで、来年、次の年の採用に向けて勉強しようという名目で、一般企業はひとつも受けなかったんですよ」

こうして就職活動を必死になってするというわけでもなく、具体的な目標もみつからないままで、広島での五年目が過ぎた。この状態は、いわゆるフリーターかといえば、そうでもない。なぜなら、卒業後アルバイトをしなかったわけではないが、継続して生活費を稼ぐというほどではなかったからである。彼女は自分のバイト代だけでは生活できないので、親からの仕送りを続けてもらっていたという。こう

いう展望のはっきりしない生活が一年半ほど続いた。自分では、その時期はメンタル面のサイクルで、何となく波に乗れなかったのだと説明する。

「基本は自分の波なんですよ。その卒業してからの一年半とかは、バイトが決まると、ちゃんと、休んだりしないでちゃんと行くんですけど。例えばそのバイトの任期が終わってやめるじゃないですか。で、次のバイトを探すまでが、ものすごくなんて言うんですか、また一からやらないといけないと思うと嫌でね。あの間とかは一週間くらい家のなかにこもったりしても何ともなかったですから。……中略……普通のバイトやると、一から、面接から始まるじゃないですか。電話かけてとか、そういうのが嫌で。始めるまでに時間がかかったりして、ほんとに自分のお金だけでやろうと思うと、そんなんだと生きていけないじゃないですか。親の仕送りがちょっとあったから、まあ一、二週間休むか、とかね。ずるいことしてたんですけど。……中略……情報誌とか見て、すぐ電話する時が自分にとってはアクティブな時で、もうそのまま二週間休もうって思っちゃったら、またいけない周期に入ってるってことで、奮い立たせるまでに時間がかかるんですよ」

理英自身としては、仕送りを受けながら都会で浮かれて遊んでいたというわけではなかった。交際している人がいて広島を離れがたかったということでもないという。ただ自分のやる気の周期をコントロールするのに、少し時間が必要だったのであろう。

大学を出て二年目の夏、ようやくちゃんとした就職活動をして、神戸の一般企業の広島支店に採用がほぼ決まりかけた。ちょうどそのときに、たまたま島根県の臨時職員の募集があることを両親から伝えられた。両親は安定した公務員を望んだようだ。彼女自身としては、一般企業の方が給料の面では断然よかったのだが、その島根県の臨時職が文化財関連の仕事だったので、そちらに強い興味をもった。

「自分のまわりの大学の時の友だちは、とりあえず就職が決まった子が多かったんですけど、ふと気づいたときに、ほとんどの子がリストラやなんやらで無職になって。お気楽にバイトしている子が増えてたから、そのなかでのんびり浸かって、私もいいやとか思ってたんです。けどなんか、突然こうなんかアクティブになる期間があるじゃないですか。そういう時に活動してたら、たまたまここが引っかかって、もうこれは行くしかないと思って」

こうして理英は大学を出て二年目の一〇月から、島根県の文化財研究組織で資料整理の事務補助員をすることになった。広島市を離れ、今度は松江市で独り暮らしである。仕事は、「歴史の資料や本に触れるから」とても楽しいと言っている。

「職場の人がとりあえずみんないい人で。今までバイトで朝起きて、行くの嫌だなってことけっこうあったんですけど、ここはほんと楽しくて。なんか毎朝うきうきして来れてるし、こんな人間関係で困らないところってないよなあ、と思って。それで好きな図書も触らせてもらえるし」

将来的にはこの仕事は続けたい。だが県職員としての採用試験を受けるとまた別の課に配属されて一からやらなければならない。それよりは今の職場環境を大切にしたいという。街の雰囲気としては広島には愛着があるが、松江はあまり好きになれないという。しかし横田町に戻る気持ちは全くない。

「横田には職場がないんですよ。……中略……とりあえず町内見回して何をするところがあるかと思って。でも興味のある部署はなかったですね。例えばハローワークとかで横田町とか探すと、一つも出てこないんで、なんか閉鎖された地域だよなあって。横田で暮らせたらいいなあと思うのは、家賃を払わなくていいっていうのくらいで、他には、特別自分にとってメリットがないんですよ。……中略……そりゃ大きい街の方がいろいろと遊べるところがあっていいですね」

彼女の臨時職員の採用は一〇ヶ月ごとに更新されるという。インタビューの時点では、採用から間もないために継続で雇用されるかどうかははっきりしていなかった。だが、雇用制度上の問題はどうあれ、彼女としては、この職場にしっかりとした居場所を得ているという、落ち着いた自立心のある気持ちを

養い始めていた。

「高校時代は、みんなと一緒じゃなきゃ嫌っていう感じが、多分強かったと思うんですけど、今はほんとに、こっちに来たら独りだって思ってるんで、独りでやらなきゃって感じが強くなったりとかしましたね。だれかに助けてもらおうとか、とりあえず○○ちゃんに頼もっかなっていうのがなくなった分、大人になったと思いたいですね」

インタビューから二年後、たまたまその職場を通りかかったときには、彼女は同じ仕事を続けていた。松江市で三度目の春を迎えたことになる。

第6章

県が育てて県で働く

ごく普通の高校生たちが通ってくる（横田高校正門前）

県内周流型

県内周流型とは、高校卒業と同時に県内の高等教育機関に進学し、その後も引き続いて県内に職を得た一群である。かれらの多くは高校卒業時には、ゆくゆくは仁多郡内あるいは近隣に戻りたい、あるいは戻れるだろうという予測や希望をもっていた。両親の考えは今も同様であろう。あるいは本人の意図はともかくとして、親やきょうだい、親戚、友人にはそう理解されていることだろう。しかし、広い県土と、若い職員の流動化を促す地方県特有の人事システムのため、就職後、直ちに自分の故郷周辺の地域に戻る可能性を、かれらは現時点ではほとんど考えない。

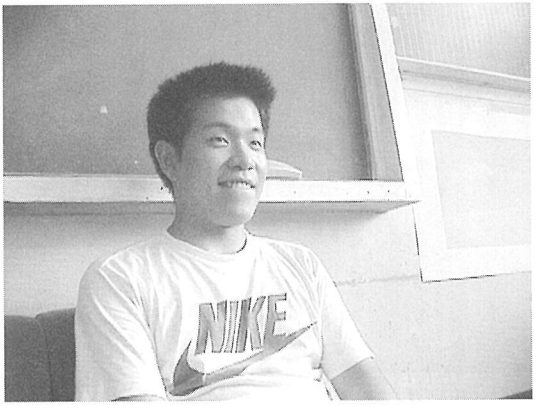
県内周流型のうちで、目立って数が多いのは島根大学の教育学部に進学して県内の教諭・講師として採用されている「先生」たちである。また医療関係の専門学校に進学して国家資格を取得した女性たちもいる。かれらのような県内エリート（専門職）の二〇代は、県内の山間部や離島の僻地での勤務に費やされる。このクラスで追跡できた県内周流型のケース数は、男子が六名、女子が五名の一一名であるが、ここではそのうちの三名と、県内進学の後、地元地域で職を得た、県内市部からのUターン型一名のライフヒストリーを取り上げる。

澤島祥二のライフヒストリー

澤島祥二の父母は、どちらもこの地域で教員をしていた。島根県の正規採用の教諭である。彼自身は三人きょうだいの真ん中で、家族は祖父母、父母と子どもたちという直系同居であった。澤島家の代々の実家は仁多町にある。祥二は高校三年の時には漠然と、「サラリーマンになる」のかなと考えて、センター試験を受験した。センター試験以前には「やっぱり県外の都会の大学に行きたかった」という。広島大学か岡山大学というのが彼の希望であった。実力的には実際に合格する可能性があってのことであろう。もしもそのときに県外に出ていたら、島根県内で教職に就くことは考えず、「民間の会社に入ってやろうかな、というような」方向になっていたと自分では推測している。「もう全然なんかもう、社会の情勢なんかわかってない時で、全然大雑把な考えなんですけど」

センター試験の後、自己採点の点数をもとにして考えてみて、彼は島根大学教育学部の小学校教員養成課程を受験することに決める。これが、祥二の父母と同じ教職への志望の始まりであるが、この決断には「ちっちゃい頃から、そういう（教職についての）話を親から聞いていたんで、その影響は確かにあります」という。結果としてそこに合格し、高校を卒業した四月に親元を離れ、キャンパスのある松江市へ転出する。このとき数人のクラスメイトが彼と一緒に松江に出ている。

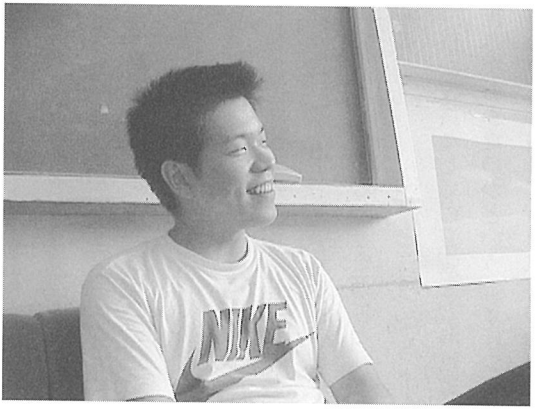
島根大学に入ってからは、祥二はもはや教員以外の進路は考えていなかった。島根大学教育学部の小学校教員養成課程に在籍す



る学生は、実際にほとんど全員が教職に必要な単位を取り、教育実習などを終えて、教員採用試験を受ける。言うまでもなく、その多くは島根県内の県立高校から進学してきた学生であり、島根県の教員採用を目指しているのである。そういう意味ではこの課程は、同じような地域的背景をもち、同じ進路を目指している均質な集団であったと思われる。島根県内ではよく知られていることであるが、この課程こそが、県立高校の成績優秀者が県内周流に至る、過去三〇年のメイン・ストリームとされてきた道筋である。それは、ただ数の上で多いということだけではなく、ライフコースをイメージするうえでの定番として、多くの人に理解されているという意味でもある。

大学時代は、松江市内のキャンパス近くのワンルーム・マンションの密集地域に一室を借りた。そしてバレーボールのサークルで活動したり、イベント企画のアルバイトをしたりして、普通の大学生活を送った。もちろんきっちりと単位を取り教育実習もこなした。

その後、彼は迷うことなく教員を目指し、難関だった大学四年時の島根県の教員採用試験に一発現役合格し、大学卒業と同時に島根県の中学校教諭に正規採用された。二二歳の時である。祥二の最初の赴



任地は、東部の平田市にある歴史のある中規模の中学校である。インタビュー調査はその初任校で、二年目の夏休みに木造の校舎の教室で行なった。

彼はさっぱりとした身なりの、実直そうな若者であった。一旦話し出すと、はっきりと自信をもって受け答えをする。その様子は、すでに経験のある教員の風格を帯び始めている。聞けば、その時点では一年生の担任の先生、専門は数学、剣道部の顧問でもあるという。彼は、将来もこのまま中学校教諭を続けることを希望している。

ただし、将来的に故郷の仁多郡内に戻るかどうかについては、「これから色々なところに転勤していくとは思うんですけど、母校というか地元の学校に帰るというか、帰りたいというか、そういうのは、もしかしたらあるかもしれない」と微妙に言葉を濁した。県内での教員の異動が自分の意思どおりにはいかないことは、聞き手である筆者もよくわかっていた。仁多郡のような過疎地が、地元出身の彼のような優秀な人材を歓迎しない理由などない。しかし僻地を多くもつ島根県は、特に若い教員に対しては県内他地域での勤務を奨励する。少なくとも二〇代の一〇年は、彼は故郷から離れた別の山間地域や離島に、四年、

五年という周期で赴任することになるのだろう。彼の場合、そのことは両親もよくよく理解している家庭環境にある。そしてその周流期間のうちに、恋愛や結婚という新たな選択の時が来ると、その後どうなるかはいっそう不確定になる。それゆえに彼は、現時点で自分の欲しいままに行動しようというつもりがないのだろう。

彼の一八歳から二五歳までの間の地域移動の範囲は、仁多町から松江市そして平田市と半径四〇キロの範囲内に収まっていることになる。今後はもう少し大きな周回で、県内を周流していくことになるだろう。澤島祥二のたどってきた、県の教員の子どもが県立高校から地元国立大学を経て、ストレートで県の教員になる、というライフコースには、「県が育てて県で働く」という再生産の、よどみのない循環が成立していることを見てとれる。ある意味では、最短距離で適職に至ったといえるライフコースである。

彼が教員としての資質をどれほどもっており、その他の仕事についてはいったいどれほど豊かな潜在能力があったのかということについては、筆者には想像の域を出ない。しかし、インタビューを通じて澤島祥二からは、教員以外の仕事でも器用にこなせるような非常に優秀な人材を、生まれ育った地方県がうまく引きとめて、県内で次世代を育む指導者を確保したのだという印象を与えられた。

堀真里江のライフヒストリー

堀真里江は現在、島根県能義郡伯太町の町立保健センターで保健婦をしている。地元の町役場に勤め

る父は一九四三年生まれで高校卒であり、母は一九四九年生まれで短大卒である。高校三年生の時までに、兄と姉は実家を出てしまい、受験の時には父母と三人暮らしだった。

真里江は高校三年のかなり遅い時点まで、はっきりとした進路の志望を固められずにいた。父は大学進学を希望し、母は専門学校進学を希望するという状況のなかで、本人は漠然と大学進学を考えていたという。実際、テレビ番組を観て「たくましい女の人って素敵！」と思い立ち、突然、防衛大学校を受験してみた。ただし、担任にはやめておけ、と言われたという。本人としては「落ちたけど行ってみたけん、そーでよかった」のだという。

彼女はいろいろ試行錯誤したが、最終的には鳥取大学の医療技術短大部の看護学科に進学し、米子市に出た。この学科は三年課程である。この進路については、彼女の姉が同じ学校に進学して、この年にちょうど卒業し臨床検査技師として地元の地域医療に携わることになったことも決定の要因になったようだ。姉が引き払うはずだったアパートを、大家さんに頼んで継続して借りることにして、そこで医療専門職への道を学んでいくことにしたのである。米子市は隣県にあるものの、距離的には仁多郡から出雲市や松江市とほぼ等距離にある。彼女の進学先はこの当時は、山陰地域唯一の国立医療技術短大であり、センター試験こそ課されていないものの、入学するのは容易ではなかったはずである。

末っ子の彼女は、近隣の米子市（人口は約一四万人）での「憧れの独り暮らし」が嬉しかった。「いやもう、米子でも私にとっては都会でしたし、それにあの、上の（きょうだい）二人とも進学してて、うちは父親しか働いてなかったから、経済的にもちょっと。年子だったりして、厳しいものがあって、都会にはよう出さんっていうのも言われちょって」

両親の方から見ると、彼女が家を出ると同時に前述の姉が郡内に戻ってきたことになる。米子という「都会」に出て一人で暮らし始め、彼女の生活環境は確かに大きく変わった。しかし、四年制の大学でのキャンパス・ライフとは異なり、三年課程の医療技術短大では、実習や講義のスケジュールがびっしり詰まっており、生活はのんびりしたものではない。また卒業を控えて国家試験も受験しなければならなかった。この学校を卒業し、さらに国家試験に合格して初めて正看護婦になれるのである。

この時期について真里江は今ではこう振り返る。

「初めの頃はそれこそ、ほかの四大行った子たちとかに、けっこうコンプレックスを感じてたけど、でも今になってみれば別に、私あの学校で良かったよって思って。すっごいいろんな人と出会えたし」

最終学年のとき彼女は、大阪のある病院に正看護婦として採用されることが内定した。しかし保健婦になりたいのでさらに上の学校に進みたいという気持ちも強くあった。叔母が保健婦をしていることから、この職業のイメージがあったのだという。保健婦になるには、正看護婦とは別の保健婦のための課程をもう一年受け、さらに国家資格を取得しなければならない。それでも保健婦になれば、狭い意味での臨床的な仕事ではなく、地域における講習や指導というような昼間の常勤職を得る場合が多いし、就

職先も確保しやすい。もちろん収入面でもランクが上がる。

そこで、医療技術短大部の教官に進学希望があることを相談して、承諾を得たので、出雲にある島根県立総合看護学院（当時）を受験して合格した。翌年四月からそこの保健学科の一年制の課程に進学した。これに伴い、彼女は米子市から出雲市（人口は約九万人）に地域移動している。

この学校は県内の医療専門職不足を解消する目的で、島根県が設立していた医療専門職養成のための機関であった。現在では、県立看護短大に組織を改め、いっそうの拡充を図っている。島根県の場合、過疎医療に貢献する人材を、他府県から獲得するのはほとんど不可能である。そのため県主導で県内での人材育成に力を入れ、卒業生を隠岐、川本、雲南の公立総合病院、あるいは各市町村保健所など県内の地域福祉・医療機関に配属するのが狙いである。

そこでの教育を、彼女はこのように振り返る。

「いやぁ、それこそねえ、その学校に入ったときは、まあ三年くらいは都会に出てやりたいなあと思ってたんですよ。でも不思議なもので、その出雲の学校っていうのが、入ったときは別に島根とかにそんなに愛着も興味も関心もなかったんですけど、

むちゃくちゃ郷土愛が湧く教育っていうか、何かすごい、いい意味で島根を引き出して見せてもらった、みたいな感じで、いやなんか、島根を捨てちゃいかんかなあという気になってきて」

このような微妙な心変わりから、彼女は就職先を探す時点では、県内過疎地の医療にむしろ憧れのようなものを感じるようになる。そして県職採用の保健婦への就職を希望したのだが、それは果たせなかった。結局、米子市に近く仁多郡と隣接する能義郡伯太町に保健婦として採用されることになる。大学に進学していれば新卒で就職する年、つまり二二歳のときのことであった。

それから、真里江は「どんな仕事でも最低三年はやってみよう」という意志を固め、地域での検診、デイケア、予防接種、施設巡回などの保健婦の仕事をしている。収入面でもやりがいの面でも、現状に不満は感じていない。職場に同年代の同僚の少ない仕事だが、仁多郡、米子市、出雲市周辺の友人関係は同性異性を含めてすぐに手の届く範囲にある。しかし実家に戻ろうという気持ちは、これまでには全く起きなかったという。将来の希望は現在の保健婦の仕事をこのまま続けることである。横田の実家に戻るつもりがあるかどうかを尋ねると「一旦離れてだいぶ経つし。それにうちの家ってす

ごい古いんですよとにかく。……中略……古いというのは外風呂、外便所、家はもうすごい隙間風が入って……後略……」と全くそのつもりがないことを強調する。臨床検査技師の姉が郡内に戻っていることも、彼女が親のことを気にかけず、安心して独り暮らしを続けられる要因なのだろう。

堀真里江の医療専門職志望は、同じ道を進む姉や叔母の存在から漠然と発生したものである。しかし、保健婦となった時点での地域医療へのこころざしは、島根県が育んだものであり、彼女の専門職としての技量は、他ならぬ県自体が磨いたものである。堀真里江という医療専門職の人材は、仁多郡という狭い範囲で見れば流出人口に数えられるが、島根県という行政単位でのなかでは、ちゃんと帳尻が合っている。

杉本祐子のライフヒストリー

杉本祐子はこの地域で最大の奥出雲病院に助産婦として勤務をし始めて二年目になる。現在は、ドクター（産婦人科医）の指示に従いながら、昼夜兼行で分娩に立会ったり、新生児の授乳の指導をしたりしている。

「うちの病棟は（産科と小児科の）混合病棟なので、看護婦さんと助産婦さんで夜勤するんですよ。そのなかで、私たちの方はベビーも看ながら、お産があったらお産も看ながらということで、すごい忙しいというか。ちょっと目を離したら、もしかしたらなんか危険信号があったかもしれないけど、みたいな。そういうのがあるので、すごい責任はありますね」

「シグナルが必ず出てるんで、何かあったときには。……中略……で、お産の入院があったっていうかそんな時には、入院した時点で私たちが診察したり、陣痛がどんぐらいか測ったりして、それを一回（ドクターに）報告して……中略……今度は生まれる前に、夜中だったら（ドクターを）呼びます」

「正常分娩は、助産婦だけでもとれるんですよ。ドクターは異常の時になんか対処する。だけど、先生によってなんですけども、今の先生はとても、なんていうのかな、几帳面な先生で、必ず自分が目の前におるときにお産になって欲しいみたいで。だからちょっと早めに（ドクターを）呼んで、という感じで」

「あと『待機』っていうのがあって、もしお産の時に、外回りも病棟回りもしないといけないし、ベビーのお母さんは授乳もしないといけないしで、そういう時に重なった場合とか、『ベビー受け』（分娩時の介助の助産婦）がいないといけないんですよ。赤ちゃんを受けて沐浴してって。その間私が直接介助だったらいろいろ……中略……胎盤出したりとか先生がもし切開入れられたら縫う処置とかされるんで、そういうの手伝いとかしたりしないといけないんで。で、そういうのをするもう一人の人がいないといけないので、『待機』の人も呼んでっていう感じで。夜間はこうなるんですよ。ちょっとね、人数が少ないために」

――「（今の仕事の責任は）すごい、重大ですね」

「ちょっと怖いよ、ほんと。私こんな、普段はこうしゃべるけどね。仕事になったらけっこう真面目らしいよ。そう言われたもん」

見た目は二〇代前半の独身女性らしい無邪気さをもつが、仕事のことに関して話し始めると、専門用語も交えて目を輝かせながら語ってくれる。そこには現在の仕事に対する祐子の熱意と厳しさを十分に垣間見ることができる。

彼女は、高校時代は祖母と両親と兄の六人家族で暮らしていた。ちょうど団塊世代にあたる父母はどちらも常勤の仕事に就いている。父母の学歴はともに高校卒である。彼女は高校三年生の一〇月には、まだはっきりとした進路イメージをもっていなかった。専修学校に進学して、養護教員になろうというコースをただ漠然と考えていたという。しかし友人のひき起こしたある交通事故から、地域医療のことについて自分なりに考え始めた。国立大学受験コースからのその時点に及んでの進路変更ということで、大学進学を希望する両親や担任とは小さな衝突があったようだ。

「私は、とりあえず、その、私が申し出た時点で、行きたい所があったの。出雲の総看（島根県立総合看護学院の看護学科）に行きたかったんですよ。で、（担任の）先生はまあ先生の好意として、推薦があるって言ってね。それが米子（国立米子病院付属看護学校）。まずここを受けてみないかって言われて、私は最初すごく嫌だったけど、父に説得されたんですよ。（父と）話してね。それで、じゃあまあ受けるだけ受けーわぁ、っていうことで。なんかね一二月の十何日かにそこの試験があったんだわね。推薦の。それを渡されたのが一一月の終わりくらいだったからもう、ぎりぎりだってね。それで受けて。そしたら

もう、私、推薦とかってけっこうこれ（手でしゃべるまねをする）じゃないですか。私これがすごかったんで。それで受かったようなもんかなって、自分ではそう思ってます」

翌年一月のセンター試験は、このクラスの全員が受験するという原則であった。おそらくすでに願書も出していたためだろう。祐子は進路が決まっていたにもかかわらず、センター試験は受験したという。二次試験については「受けろっていうような感じは言われたんだけどね。拒否したんだと思う。受けてないもん」ということである。国公立大学の入試に合格するほどの、そこそこの実力をもっていたということだろう。しかし彼女は希望どおりに看護婦への道を歩むことにした。

四月から故郷を離れ、全寮制の三年課程の看護学校に進学した。場所は米子市で、近隣ではあるが生活条件は大きく変わる。このときの心情を祐子は素直に振り返る。「あの、私、都会駄目なんですよ。なんか人が多いのにびっくりしたし。……中略……最初はもう、なんていうの、ホームシックにかかりましたよね。……中略……遊びに行くには楽しいところですけど、住むには、私には駄目でしたね」

さらに三年時の就職活動の時にも、このまま故郷を離れて就職して自立した道を歩むか、それとも「田舎」に帰るかということでいろいろと彼女なりに考えた。その結果、地元の奥出雲病院への正看護婦としての就職を決意する。「私は田舎が好きだっていうか、もうなんか地元にすごい愛着がすごくあったので、帰ってこようと。でもあの三年生の時の就職活動の時に、看護学校の先生から、自分を成長させるためには親の近くにおるよりも、やっぱり遠くで就職しておった方が、自分としては成長できるし、あなたはその方がいいわ、みたいな感じで、すごく言われたんです。もうとてもその先生はかわい

がって下さってて、すごく言われたけれども、自分の考えとかいろいろ話したら、先生もわかって下さって。それで結局は奥出雲病院」

もっとも、ここから奇妙といえば奇妙なストーリーが始まる。彼女は、雲南地域の大病院である奥出雲病院に看護学校の三年のときに、正看護婦としての内定が決まった。いや、決まっていたわけではないようだ。彼女はこう振り返る。

「あの、決まったというか、まあ、就職活動、まあ島根県内で就職しようと思っとって……中略……ここらへんで大きな病院っていったら奥出雲病院さんだったので、それで試験を受けて。（そのときに）将来的には助産婦になりたいということを、前もって言ってたんですよ。あの、まあでも、うちん家はあまりお金がなかったもので、それで、一応自分で貯めてから、助産婦になろうとは思っているけども、それでもいいかみたいな感じで聞いた」のだ。すると病院側は「ちょうど助産婦が足りないっていうこと言われて、で（病院が）奨学金出すから助産学校の試験受けてみないかって言われて」

要するに就職内定（予定？）先である病院からの奨学金貸与を受けて、県立総合看護学院の助産婦学科に進学することにな

井上めぐみ（左）と杉本祐子（右）

ったというのである。彼女は、その後に助産婦の国家試験にも合格して、翌年あらためてこの病院の助産婦としての採用試験を受け、助産婦として採用される運びになった。彼女がいかに優秀で、地域医療にとってどれほど貴重な人材であったのかを実感させるエピソードである。

こうして米子市から出雲市に地域移動して、さらに一年の課程を彼女はあわただしく終えた。看護学校、助産学校という流出していった先の教育機関での四年間で、彼女は地元の医療に貢献することの意義だけではなく、医療に携わる者としての心構えを学んだという。「なんかあの、もう高校までは周りに流されたり、なあなあで、いたんですよ。で、なんか看護学校、助産学校っていうところは、なんか自分を見つめるっていうのをすごく言われてきたんですよ。それで貪欲になりなさいとか、とにかくそういう言葉を言われてきて、自分もそういうのに、なんかそうだそうだって共感できる部分があって、そしたらなんか、考え方もちょっと変わってきたんですよね。でもまあこの地元を好きだっていうのは、たぶん前とあんま（り）変わらんかもしれないですけど、自分自身のなかでは、ちょっと人間性が変わってきたと思いますね」と学生生活を振り返る。

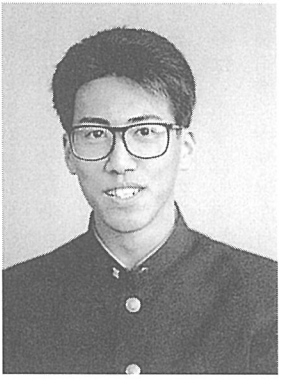
祐子は現在、地元の助産婦になって二年。分娩介助も数多く経験したが、まだまだ助産婦としての経験は未熟なので、将来の希望は今の職場で助産婦を続けることだという。今は病院の職員寮で生活しているが、いつでもすぐに実家に戻れる距離にいる。

このように優秀な人材であって、しかも一貫して地元へのUターン志向が強い場合、島根県も地元地域も、その意向を尊重しながら大切に育てる。実際彼女は、一旦、県内市部にまで出て学び、地元に戻ってくることを条件に奨学金を得て、医療専門職としての特別な資格を取得したのだった。横田高校の卒業生で地元に留まっている友人たちや、親元に戻って出産をするという同じクラスの女性たちは、いずれ彼女にお世話になることもあるのだろう。地域が地域のために必要な人材を産み育てた例である。

松原弘樹のライフヒストリー

松原弘樹は横田町出身である。郵政職員であった父と専業主婦の母の間には、九歳上の兄、七歳上の姉と弘樹の三子があった。弘樹が末子であるので、彼の両親は他のクラスメイトの両親よりも少し年齢が高く、ともに地元の人で兼業で水田耕作をしていた。両親は高校卒学歴（横田高校）であるが、弘樹も含めて子どもたち三人は、いずれも大学に進学した。兄姉の年齢が弘樹とは離れておりどちらも遠方で職を得ているので、高校時代には彼は実家で父母と三人暮らしとなっていた。

彼は、小学校の頃から金管楽器のトロンボーンに親しみ、ずっと手放したことがない。小学校のときは鼓笛隊、中学校から高校では吹奏楽部で活動し、その実力は、高校三年時の演奏会ではソロパートを



受けもつほどであり、この年の県の吹奏楽コンクールでの金賞受賞の原動力となっている。ベースパネル調査の対象となった高校三年の秋の時点では、彼のなかにはまだ進路について具体的な考えがあったわけではない。

「一〇月頃からちょっと勉強し始めました。それであんまり受験生っていう感じじゃなくて、部活（吹奏楽部）だけをやってたので、勉強もあんまりしてなくて。それで一〇月になってからどうしよう、大学行こうということにしました」

彼はその頃、中国史に関心があって歴史学者に憧れていた。しかし同時に、地に足の付いた進路として教員志望も考えて、両者の間で少し迷っていたという。センター試験の前までは、金沢大学、京都府立大学あるいは大阪府立大学などを受験するのが目標だったという。だが彼が実際に受験したのは、島根大学の法文学部文学科であった。

「高校のときはたぶん、中国史がやりたかったんだと思うんですけど、センター試験の結果を見て、センター試験は悪かったんですけど、それでまあとりあえず島大でも受けようかなと」いうことになったのである。この説明が真実だとするなら、彼のなかにはもともと、島根県内に留まりたいという、積極的な志向があったわけではない。むしろ彼は、流出先をどこにするかではなく、何を専攻するかということで進学先を選んだという。

弘樹は、二次試験の前期日程で、島根大学法文学部を受験し合格した。ところが、ここで思わぬことが発生してしまう。彼が合格していたのは、当初希望した歴史ではなく、同じ法文学部文学科の地域社会教室だったのである。

――「島大には、確か中国史もありましたよね」

「はい。だから文学科のなかで希望を出すんですけど。第一志望、僕、歴史志望だったんです。で、第二志望には地域社会って書いて。で、合格通知をもらったんで、僕はもうてっきり歴史に入れるもんだと思ってたんですけど、手続きで本部に行ったときに、（通知を）渡されたら、地域社会だったんで、それで、あれーって思って。で浪人しようとも思ったんですけど、高校時代によくしてもらった先生に、人類学できるんだったらそっちの方が面白いって思うって言われて」

このとき、この学科では、入試の成績を基準に専攻分野の振り分けをしたようで、彼は結果的に第二志望に回されてしまったようだ。ともかくこういう事情で、弘樹は歴史学への志望を早々とあきらめ、その代わりに人類学という学術用語を手にして、松江市での学生生活を始めたのだった。

松江市内で生活を始めて、「最初の三日くらいは都会に出たなぁという印象もあった」というが、だんだん、学術書や趣味の専門雑誌などの欲しい物が手に入らないこともわかってきて、弘樹は松江市に便利さの限界を感じるようになったという。しかし、住みよい街だという印象は、今でももっている。住居としては、キャンパス近くの安下宿や安アパートを選んでいる。大学時代を通じて何度か小さな引越しをしたのだが、いずれもとにかく地味に生活した。「クルマを買ったのは四年生になってからです」

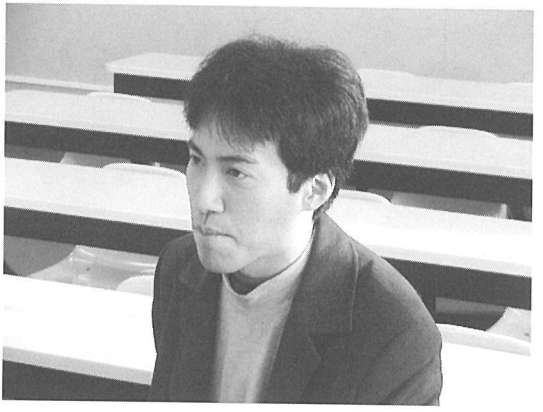
と彼は言う。自宅通学の近隣出身の学生や、広島、岡山、京阪神などの都会からの流入学生とは違い、県内郡部の県立高校からこの地元大学に進学した学生には、彼のような慎ましやかな生活は珍しくない。ただし、クルマがなければ交友関係や生活の範囲は大学周辺の自転車・徒歩圏内になってしまう。実家に近いとはいえ、帰省も容易ではない。

一年生のときから、弘樹は大学の吹奏楽部に入り、やがてそこの中心メンバーとして活躍するようになる。人望、実力ともにあったようで、一年生から三年生までほとんど全ての演奏会で学生指揮者を務めたほどである。また、夏休みには、故郷に戻って母校の後輩の指導をしたこともある。その他にも市民吹奏楽団、高校や中学校の演奏会などで指揮、指導、演奏の経験をもつ。さらに、この趣味が昂じてアンサンブル・コンテストというアマチュアの大会に、トロンボーン四重奏で繰り返しエントリーし、全国大会で金賞を獲ったこともある。

学業に関しては、ほぼ順調に卒業に必要な単位を修得し、同時に教職課程の科目も履修して、「高校地歴」の教員免許を取った。四年生のときには母校、横田高校に教育実習に行っている。

二年生の終わり頃から、弘樹は大学院を受験してみようか、という考えをもつようになった。きっかけは、民族音楽学の専門書で興味をもてるものを見つけたことである。趣味として親しんできた音楽と、専門として学んでいる人類学の思いがけない接点に、「あっ、こういう分野もあったんだ」という強い感銘を受けたのだという。

四年生になったときには、大学院進学の方針を固めており、彼は就職活動は全くしていない。そして

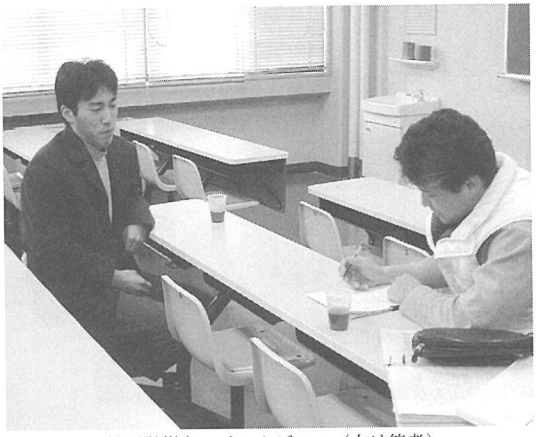


指導教官をはじめ、さまざまな方面に相談をしてみた結果、「付き切りでめんどうをみてもらえそうなので」という理由で、同じ大学の他学部の助教授に師事することとし、同大教育学研究科の修士課程の大学院生となった。ちなみにこの助教授が、彼が初めに感銘を受けたという民族音楽学の本の訳者のひとりである。こうして弘樹は松江市で、学部卒業後の二年間、大学院生として生活することにした。

学部生のときは、生活費は親からの仕送りに頼っていたのだが、大学院に進学すると奨学金を得ることができた。同時に、島根県の文化関連施設でコンピューター入力作業などのアルバイトをしたりして、多少の収入も得たので、それで生計を支えることにして、以後は仕送りを受けていない。

大学院では、民族音楽の題材として石見神楽を選び、人類学的にアプローチした。そして、一年次の後半から半年間、浜田市の農家に住み込んで、農作業を手伝うかたわら、ある神楽社中と行動を共にして、フィールドワークをしたという。同じ島根県内とはいっても、県西部にある浜田市は、松江市や奥出雲からは一〇〇キロ以上離れた小さな港湾都市で、石見地方の文化圏に属する。

「その社中の人に教えてもらえることは何でも習って、笛ま



松原弘樹とのインタビュー（右は筆者）

ではまだ行ってませんけど、小太鼓や舞をやったり、いろいろ手伝ったり」して、「文化会館とか、お祭りやフェスティバルを回ったり、スーパーで奉納したり」した。典型的な参与観察研究である。修士論文は、そのフィールドワークに基づいて「石見神楽の習得過程におけるアイデンティティの形成」という研究をまとめた。

読者に少し知識を補足する必要があるだろう。島根県の郷土芸能としては、出雲神楽、石見神楽という東部と西部の地域文化を反映した、異なる神楽舞がある。県内にはいくつかの社中があり、秋から冬にかけて各地で神楽を「奉納」する。演題は多くあるが、最も代表的なものは、スサノオノミコトがヤマタノオロチを退治する出雲神話を題材にしたものである。そもそも奥出雲は、この伝説の発祥の地とされる。[1]

しかし彼は、「違う文化圏の方が冷静に、客観的にものごとを観察できるのではないかという思いがあった」ため、出身地域の伝統芸能である出雲神楽ではなく、あえて石見神楽に注目したという。出雲神楽は、構成が整然としていて、歴史学的にも注目すべき特徴があり、そのため先行研究が多数蓄積さ

れた、「正統派」の神楽である。これと比較すると石見神楽の方は、構成がはっきりとは分かれておらず、本来の神楽を演劇風に前進させた華やかな舞が多く、囃子の調子も異なるという。それゆえに、民族音楽学の視点では、まだ研究が十分になされていないのだと、弘樹は説明してくれた。筆者には、細かいニュアンスは実感できていない。しかしともかく、幼い頃から趣味としてきた音楽、大学で専攻した人類学、そして自分の出身地域の文化的なバックグラウンドを、うまく組み合わせることのできる研究領域を見つけ出しているところに、彼の研究の発展可能性と独自性が感じられる。

筆者が松原弘樹に話を聞いたのは、彼が前述の修士論文を書き上げた直後の、二四歳時の冬であった。じつはこの時点では彼の進路は未定であった。希望は博士課程への進学だったのだが、受験して正式に確定させなければならなかった。はっきりしていたことは、島根大学には、この分野を学べる大学院博士課程が設置されていないので、民族音楽学をさらに修めるには、島根県内を離れなければならないということであった。

この調査から二年後、筆者は松原弘樹にもう一度話を聞いてみることにした。連絡をとってみると、彼は六年間の松江市での学生生活の直後、兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科の民族音楽学専攻を受験して合格し、博士課程三年生になろうというところであった。彼は、神戸市から一時間ほど内陸に入ったところにあるこの大学の学生寮に住み、相変わらず慎ましく生活している様子だった。

研究内容は、修士論文を発展させた形で、引き続き石見神楽である。すでにいくつかの学術論文執筆や学会発表をしており、駆け出しの研究者としての歩みを始めている。この大学の大学院での研究環境

については、彼は「うーん。まあ満足している」という感想をもっている。だが、キャンパスが田舎にあることには参っているともいう。

兵庫教育大学に移ってからは、大学院生でもあるので、この大学の吹奏楽部からは距離をおいている。しかし大きなコンサートがあると、エキストラとして招かれる。すでに二〇年近くトロンボーンに親しんでいる弘樹の実力は、吹奏楽部の学部学生と比べれば格段に上である。

――「ひょっとして、プロになろうという気があるの？」

「それはありえません。楽器はあくまで趣味としてやってます。仕事をするとすれば他のことを」

――「石見神楽をやりたいの？」

「あ、それは全然ないです」

――「じゃあいちばん手っ取り早いのは（大学教官などの）研究職だね」

「そう簡単にもいかないんですけど、今年から博士論文を書こうとしているところです」

松原弘樹は、最寄りの島根大学に進みはしたが、もともと県内進学、県内就職を強く希望していたわけではない。確かに彼は松江市で六年を学生として過ごし、さらに県内に研究フィールドを得た。だが、他の例に見られるような県内周流の力学を自覚してそうなったわけではない。彼は、高校地歴の教員免許はもっているが、県内の教員採用試験は受けたことがないし、郷土芸能の神楽を研究してはいるが、それは出雲神楽ではなく石見神楽なのである。いくつかの点で、彼は他の県内周流型の例とは異なっている。ただ、なりゆき上島根県を出る機会をもたなかっただけなのである。

しかし彼は、島根県内には自分を受け入れるだけの高等教育機関がないので、やむなく二四歳で島根県内からスピンアウトしていくことになった。そのことについての強い想いは彼のなかにはないのだが、筆者の勝手な意味付けが許されるとすれば、島根県が県内で育てた若年上層エリートの人材を受け止めることができず、最後の最後に捉えそこなった例といえる。一般に地方県では、このような流出ケースは、研究者の他にも、弁護士、国際経済に関係する仕事、最先端の理工系のエンジニアリングなど、ある水準以上の職業威信をもつ職種に関して一定数存在している。

異性関係について聞いてみると、大学時代から長く付き合っているような女性は特にいないが、結婚願望はあるとのんきそうに答えてくれた。「こっち（兵庫教育大学）に来てから（異性関係は）調子よくない」とのことである。異性関係が、ある土地に留まろうというきっかけになったり、ちゃんと仕事をして生計を立てようという焦りになったりしている様子は、今の弘樹からは見受けられない。とはいえ彼は、高校教員を目指すには、少し年齢も高くなってきている。両親は彼の現在の状態については、「よくわかってないのか、何も言いません」ということらしい。

島根県について、どういう想いをもって見ているのかを尋ねると、県内では、研究フィールドとしている浜田周辺に特に愛着があるという。松江も横田もそれぞれ好きなので、浜田にフィールドワークに行くときには必ず立ち寄るようにしている。しかし、戻りたいということは考えない。二四歳、二六歳の二時点で彼は繰り返し次のように言っている。

「もともと土地に対する愛着は、あまり強くないですから」

弘樹の兄は、父と同じく郵政職員となっているが、今は広島県の三次（みよし）市におり、姉は島根県西部の山間の邑智（おおち）郡桜江町で小学校教員をしている。それぞれすでに結婚して子どもをもうけている。そして、末っ子の弘樹もどうやら横田町には縁がなさそうである。松原家からは、次々に子どもたちが流出し、今はすでに退職した父と母の二人だけが暮らして久しい。弘樹がこの故郷を離れた後、農地の区画整備が進み、父母は水田耕作を人手に任せることにした。

1　文字どおりの蛇足になるが、この神話のストーリーは、毎年収穫の時期になると大蛇（ヤマタノオロチ）が奥出雲の山村を襲い、地域の里家から娘をさらって行くという本書の主題を象徴するような話である。
この神話のクライマックスではスサノオノミコトに退治された大蛇の尾から、みごとな鉄剣が切り出される。この剣が、はるか静岡県の「日本平」、「草薙」、「焼津」などの地名の由来ともなった、ヤマトタケルノミコトのアメノムラクモノツルギという著名な神器であるらしい。

第二部

地域移動の力学（ダイナミズム）

第7章

意識の社会移動

山霧に包まれた冬の朝

質問紙パネル調査データの特性

この章では質問紙パネル調査を計量的な方法を用いて分析していく。この量的調査は、一九九二年の一〇月の時点での横田高校の三年A組の在籍生をベースのサンプルとしている。

調査票には、約七〇項目に及ぶ社会的態度についての五分位の選択肢による調査項目が含まれている。社会的態度とは、人々のものの考え方の社会における分布のことで、主に社会意識の計量分析で用いられる概念である。それぞれの意識項目は、権威主義的伝統主義、自尊心、不安感、集団同調性、道徳性の基準、自己疎隔、生活満足度、考え方の柔軟性、両親に対する親密度などの社会的態度のさまざまな局面のうちの何を明らかにするものか、という分析目的があらかじめ与えられている。

例えば「私は少なくとも他の人と同じくらい価値のある人間である」という質問文への賛否の反応は、自尊心を問うための指標と見ることができる。また「この複雑な世の中で何をなすべきか知る唯一の方法は、指導者や専門家に頼ることである」や「伝統や慣習に従ったやり方に疑問をもつ人は、結局は問題をひき起こすことになる」という項目に対する回答は、権威主義的伝統主義の指標となる。本来は、これらの項目は、因子分析などの多変量解析を用いるために用意されていたものであった。しかし本書では、六年間の態度変容の細かい様子を把握するために、あえてもう少しシンプルな手法を用いる。

一九九八年の第二波パネル調査は、この三年A組の回答者本人に同じ質問項目を再び尋ねる質問紙調

査である。すでに触れたように、この第二波パネル調査では、最終的に三五サンプルの回答が得られており、この全てについて二四歳時点の社会的態度と、高校三年時の同一意識項目への回答を比較分析することができる。

第四章から第六章までのライフヒストリーが描き出してきたとおり、対象サンプルは横田高校卒業後の六年間に、一人ひとりが異なる経験をしている。進学、就職という各自の経験は、ある意味では仁多郡内での一八年とは比較にならないほど衝撃の大きいものであったはずである。その反面この若者たちが、故郷を遠く離れた都会での学生生活で完全に漂白されてしまい、都市部で生まれ育った若者と何ら変わらない意識をもつようになるのかというと、そうとも考えがたい。

個々のインタビュー調査を通じて確信したことであるが、かれらには仁多郡で育ったエリート層としてのパーソナリティ、あるいは島根県人らしさのようなものが払拭されないで見え隠れしている。言い換えれば、六年の流出経験を経ても、この地域がかれらに与えた形質が変わらないで残っているようなのである。この章では、計量的モノグラフ研究によって、どのような形質が持続しており、いかなる流出経験がかれらのパーソナリティを変化させているのかを示していくことにしよう。

意識の移動表分析

ある人がどのような社会階層に生まれ、どのような社会階層に至ったかを明らかにすることは、産業社会の実態を知るための重要な論点とされてきた。社会学において、このことを分析する領域は社会移

動の研究と呼ばれている。この領域では、基本的な社会移動の様態を表現するものとして、世代間移動表（mobility tables）という分析法が用いられる。

このように説明すると難しい話のように聞こえるが、その仕組みは至って簡単で、父親の職業を表側（行系列）に、本人の職業を表頭（列系列）に置いた正方のクロス集計表である。この表を用いることによって、父親が農業であったのに、子どもがブルーカラー職（工場労働者など）になった、あるいは父親がブルーカラー職であったが、子どもが被雇用事務のようなホワイトカラー職に就いた、というような社会的地位の世代間の変化を整理することができる。この世代間の職業の変化はその方向によって、上昇移動（親よりも高い地位を得た）、下降移動（親よりも低い地位に至った）、非移動（親と同じ地位のままである）などに分類される。また、この表から算出される数値を国際的に比較したり、調査時点ごとに比較したりすることによって、産業社会全般における社会的平等の実現の成否が論じられたり、戦後日本社会における産業化の進展が論じられたりもする。表7-1は一九九五年のＳＳＭ調査（社会階層と社会移動全国調査）を用いた、世代間移動の分析結果を一例として示したものである。

この移動表分析においては、表内の左上から右下までの対角線上のセルが特別な意味をもつことになる。なぜならばこれらは、父親（前世代）と子ども（本人世代）が同じ職業カテゴリーに入っている、つまり社会的地位の非移動を表すセルだからである。例えば世襲社会では、理念上は全てのサンプルがこの対角線上に入ることになる。[1]

前置きが長くなったが、筆者のここでの意図は、この社会移動の研究自体を述べることではなく、そ

表7-1　世代間移動表の例

父　職	本人現職									
	専門	大ホワイト	小ホワイト	自営ホワイト	大ブルー	小ブルー	自営ブルー	農業	計	%
専　門	65	27	12	14	7	12	4	2	143	7.2
大ホワイト	47	70	34	30	20	29	7	3	240	12.1
小ホワイト	14	22	19	10	9	15	4	1	94	4.7
自営ホワイト	28	42	30	108	15	28	18	4	273	13.8
大ブルー	14	25	19	8	18	31	4	1	120	6.1
小ブルー	26	37	37	11	37	73	21	2	244	12.3
自営ブルー	20	43	41	25	28	63	71	3	294	14.8
農　業	25	78	62	51	45	133	75	108	577	29.1
計	239	344	254	257	179	384	204	124	1985	
%	12.0	17.3	12.8	13.0	9.0	19.4	10.3	6.3		100.0

1995年SSM調査成人男性データ。原純輔・盛山和夫　1999，28頁より転載。

の方法を借用することである。すなわち、カテゴリー数が行、列ともに同一の正方のクロス集計表を、周辺度数と対角線上のセルに注目しながら分析して、変化の様子を見るというその方法を利用するわけである。

社会的態度の時点間変容を考えるとき、ベース調査時に「どちらかといえばそう思う」と回答した項目について、第二波パネル調査でも対象者が同じく「どちらかといえばそう思う」と回答するのか、それとも意識が変化して「まったくそう思う」と回答したり、逆に「どちらともいえない」の方に回答したりするかということが見極めるべき論点となる。[2] つまり社会的態度の、一致（非移動）、上方への変化（上昇移動）、下方への変化（下降移動）を整理することが分析の焦点となるのである。

すでに読者もおわかりのとおり、この意識変容の結果を示した正方のクロス集計表は、前述の世代間移動表と全く同じ構造となる。したがって非移動、上昇移動、下降移動という移動表分析の概念を援用できることになる。

さっそく一例を挙げて示してみよう。表7-2は「私はたいていの

表7-2　私はたいていのことならば他の人と同じくらいできる

1998年（24歳） 1992年（18歳）	まったくそう思う	そう思う	どちらともいえない	そう思わない	まったくそう思わない	計
まったくそう思う	1	2	0	0	0	3
どちらかといえばそう思う	0	12	5	0	0	17
どちらともいえない	0	2	5	2	0	9
どちらかといえばそう思わない	1	1	1	2	0	5
まったくそう思わない	0	0	0	1	0	1
計	2	17	11	5	0	35

U（否定化サンプル）：D（一致サンプル）：L（肯定化サンプル）＝9：20：6,
対角セル残差合計＝8.0
一致率＝1+12+5+2+0／35＝.571,　Cramer´s V＝.495, Pearson´s r＝.519

ことならば他の人と同じくらいできる」という自己効力感を問う項目への賛否の六年間の変化を見たものである。表側（行系列）には一九九二年時の回答カテゴリー、表頭（列系列）には一九九八年時の回答カテゴリーが配列されている。もしある対象者が高校三年時に「どちらかといえばそう思う」と答え、その考えに全く変化がないならば、六年後にも同じように「どちらかといえばそう思う」と回答する。（表内では「そう思う」と略記している。「どちらかといえばそう思わない」についても、「そう思わない」と略記する。以下全ての表について同様の表記を用いる。）そして、そういう非移動サンプルは対角線上のセルに入ることになる。この表の場合は合計二〇サンプルが対角線上にある。意識が否定の方に進んだ場合は、対角線よりも右上に、逆に肯定の方向に進んだ場合には左下に分布する。ただしどちらの方向が上昇で、どちらの方向が下降と呼べるのかは、質問文のワーディング次第である。この表の場合、自己効力感が高まったのは六サンプル、低下したのは九サンプルで、非移動の二〇サンプルと合わせた合計が三五サンプルという内訳になる。

ここで、表内における非移動者（対角線上のサンプル数）の全体に

占める割合を一致率と呼ぶことにしよう。全員の回答に時点間で変化がなければ、一致率は一〇〇％になるのだが、社会的態度の質問紙調査の場合は、学歴や年齢のような明らかな社会的属性を尋ねる場合とは異なって、回答には測定誤差（回答傾向のゆれや歪み）が不可避に含まれる。そのため実際には意識が全く変容していなかったとしても、パネル調査データにおいて、一致率が一〇〇％に至ることは望めない。この測定誤差は調査技法の限界であり、調査のインターバルには関係なく発生する。この調査の社会的態度項目では六〇％あたりの一致率が上限のようである。[3] 一致率にはこのような不確定な上限（および下限）があるのだが、それでもなお意識変容のケース数が少ない場合は、一致率は大きくなり、著しい意識変容傾向がある場合、一致率は相対的に見て小さい値をとるという特性はある。

また、二度の調査の間に、意識の反転と呼びうるような大きな意識変容を経験した場合には、クロス集計表においては、理屈としては右上、左下の隅の方のセルにまで回答が分布することになる。しかしこのデータでは、五×五の合計二五セルに対して、三五名という限られた数のサンプルを用いていること、分布が平均付近に集中した偏差の小さいものであること、同一回答者の同一心理局面を扱っているため事実として大きな意識の反転が存在しないことなどから、右上、左下のセルにはサンプルは入りにくく、実際には対角セルの周辺にサンプルが集中している。よって以下では非移動、上昇移動、下降移動という三つの移動の方向のみに注目することにして、個々人の意識変容の「距離（大きさ）」は問わないことにする。[4]

さて、例に挙げた自己効力感の場合は、結果を見ると一致率は五七・一％である。なお対角セル残差

表7-3　意識項目の時点間一致率

質問項目	一致率	Cramer's V	Pearson's r	N
あなたの考えや意見は、社会全体と違っていることがありますか	60.6	0.385	0.389	35
私は、たいていのことならば他の人と同じくらいできる	57.1	0.495	0.519	35
あなたはお母さんにどの程度親しみを感じますか	57.1	0.485	0.608	35
子供に教えるべきもっとも大切なことは、両親に対する絶対服従である	57.1	0.180	0.021	35
あなたはお父さんのようになりたいと思いますか	56.3	0.495	0.519	32
あなたの小学校6年生のときの成績はどれくらいでしたか	55.9	0.536	0.649	35
うまくいきさえすれば、正か悪かは問題ではない	54.3	0.411	0.369	35
私は、いったんこうときめたら、それをめったに変えない	52.9	0.457	0.407	35
あなたの考えや意見は、あなたの友達と違っていることがありますか	51.4	0.592	0.268	35
私は国の政策に影響を与えるようなことができる	51.4	0.433	0.328	35
あなたはお母さんのようになりたいと思いますか	50.0	0.590	0.664	35
高潔な人なら、婚前交渉のあった女性を尊敬するはずがない	50.0	0.334	0.378	35
先祖代々と違ったやり方をとることは間違いだ	48.6	0.357	0.295	35
あなたは母校のことを誇りに思いますか	48.6	0.312	−.001	35
実際に法を破らないかぎり、法の網をくぐってもいっこうにさしつかえない	47.1	0.354	0.074	34
あなたはどの程度お父さんに親しみを感じますか	45.7	0.533	0.455	35
あなたは気ぜわしくて、じっと座っておられないことがありますか	45.7	0.465	0.405	35
あなたの考え方や意見は、親類の方と違っていることがありますか	45.7	0.405	0.447	35
この複雑な世の中で何をなすべきか知る唯一の方法は、指導者や専門家に頼ることである	45.7	0.391	0.487	35
はっきりとした答えがでない問題には興味がもてない	45.7	0.391	0.090	35
私は、少なくとも他の人と同じくらい価値のある人間である	45.7	0.280	−.020	35
自分が困らないかぎり、好きなことを何でもやってもよい	45.7	0.149	0.085	35
あなたは、心から愉快だと感じることがありますか	42.9	0.477	0.324	35
あなたの友人関係についてどの程度満足していますか	42.9	0.360	0.159	35
あなたと両親との関係についてどの程度満足していますか	41.2	0.340	0.239	35
あなたは、日頃自分の作ったささいなルールにこだわって、その通りにしないと気がすまないということがありますか	40.0	0.459	0.402	35
人間は本来お互いに協力しあう性質を持っている	40.0	0.392	0.313	35
あなたは、この世の中は全くわけがわからないと感じることがありますか	40.0	0.383	0.057	35
あなたは数えなくてよいものをどうしても数えてしまうということがありますか	40.0	0.362	0.291	35
あなたは、何か間違ったことをしたと思うことがありますか	40.0	0.361	0.032	35
あなたは、意気消沈してしょげ返ってしまうことがありますか	40.0	0.344	0.129	35
目上の人には、たとえ正しくないと思っても従わなければならない	40.0	0.277	0.363	35
他人と同じぐらいに幸福であればと思う	39.4	0.289	0.390	33

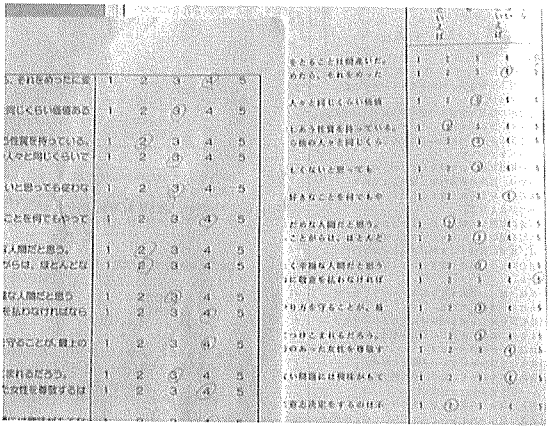
あいまいで先の見通しのつかないことは嫌いである	37.1	0.446	0.395	35
あなたの考えや意見は、同じ宗教を信仰している方々と違っていることがありますか	36.4	0.420	0.589	25
ものごとがうまく行かなくなったとき、それは自分が悪いせいだと感じることがありますか	35.3	0.372	0.139	35
あなた自身の健康状態についてどの程度満足していますか	34.3	0.441	0.445	35
私はときどきほんとうにだめな人間だと思う	34.3	0.426	−.013	35
あなたの家庭環境についてどの程度満足していますか	34.3	0.375	0.321	35
用心していないと、人につけこまれるだろう	34.3	0.364	0.253	35
私は自分自身を好ましい人間だと思う	34.3	0.358	−.038	35
私は一般に、計画をたてれば、それをやりとげられると確信している	34.3	0.327	0.268	35
ものごとがきちんと整とんされていないと、おちつかなくなる	34.3	0.315	0.139	35
性犯罪を犯した者を刑務所に入れるだけでは甘すぎる。公衆の面前でむち打ったり、またはそれ以上の刑を科すべきだ	34.3	0.257	0.119	35
よく考えてみると、何がおころうと誰も心配してくれない	32.4	0.422	0.183	35
十分な情報がないときに意思決定をするのは不愉快である	31.4	0.571	0.420	35
あなたは、自分が無力だと感じることがありますか	31.4	0.380	0.088	35
あなたは、何ごとにもつまらないと感じることがありますか	31.4	0.324	0.416	35
権威ある人々には、つねに敬意を払わなければならない	31.4	0.283	0.085	35
あなたは、理由もなく何か不安に思うことがありますか	31.4	0.274	0.366	35
全体像が見通せない問題に取り組む気にはならない	31.4	0.207	0.188	35
あなたは、重大なときに、他人がどのように行動するかわからないと感じることがありますか	31.3	0.345	−.006	34
以前からなされてきたやり方を守ることが、最上の結果を生む	29.4	0.306	0.191	35
世の中には、弱者と強者という二種類の人間がいる	28.6	0.385	0.443	35
よい指導者は、尊敬を得るためには下の者に対して厳格でなければならない	28.6	0.364	−.088	35
伝統や慣習に従ったやり方に疑問をもつ人は、結局は問題をひき起こすことになる	28.6	0.352	0.039	35
自分自身をもっと尊敬できたらと思う	28.6	0.320	0.386	35
私は、全体として全く幸福な人間だと思う	25.7	0.383	0.257	35
ほんとうに確信のもてることがらは、ほとんどない	25.7	0.326	−.048	35
あなたの生活全般についてどの程度満足していますか	22.9	0.510	−.278	35
あなたは不安になったり悩んだりすることがありますか	22.9	0.346	0.384	35
人をまどわせるおそれのある本を青少年に読ませるべきではない	22.9	0.340	0.243	35
あなたは、何かの考えや思いにとりつかれて、そこから逃れられないと感じることがありますか	22.9	0.334	0.229	35
あなたは、このままでは自分が駄目になってしまうと思うことがありますか	20.0	0.343	0.025	35
あなたは、生きていく目標があまりないと感じることがありますか	20.0	0.263	0.182	35
あなたの職場の生活についてどの程度満足していますか	19.4	0.417	−.276	31
自分が無用な人間だと感じるときがある	14.3	0.306	−.167	35

合計は、意識変容しなかったサンプルが期待値（無関連を仮定した場合の値）よりも何サンプル多いかを示す値であり、このクロス集計表では八・〇で、自然状態で割り振った場合よりも八人多く対角線上に乗っている。分析結果としては、いずれの数値も比較的高いので、この態度の不変性が結論付けられる。[5] もちろんこれから順次示すとおり、あらゆる意識項目がこの自己効力感のように、パーソナリティの不変傾向を強く示すわけではない。

表7-3は、意識項目全体（六七項目）について時点間の関係を、三つの統計的な指標（注5参照）を用いて表したものである。これによれば、対象者の半数以上が六年を経て再び同一の選択肢を選んだ一致率〇・五〇〇以上の意識項目が一二項目（一七・九%）、一致率が〇・三〇〇以上の意識項目が五二項目（七七・六%）あり、大前提としてこのサンプルの社会的態度の不変性が指摘できる。[6] つまり、六年のインターバルをおいて同じ質問を繰り返しても、三人に一人、ときには半数の個々人が、あたかも質問を記憶していたかのように同一の反応をしているというわけである。念のために、かれらと父親（および母親）のデータ間の世代間の意識移動についてのクロス集計表を作って結果を比較してみたが、こうしたインターパーソナルな関係では、同一対象者のパネルデータで得られたような高い一致率は得られない。

このような時点間の高い一致率については、個々の対象者の二時点の調査票を実際に見比べてみたときにも実感することができる。図7-1は、ある回答者の二度の調査票を並べて回答傾向を比較したものである。丹念な回答を得られた調査票の多くは、この写真のように、六年間のインターバルを経てい

図7-1　同一回答者の二時点の調査票



るにもかかわらず回答が不変か、左右どちらかに一つ移動しているだけであり、回答パターンが大きく変化しない。この再現性は、二時点の調査票をばらばらにしても、同一回答者のものを探し当てられるほどである。もちろん、対象者たちは調査に協力した記憶もないほどであって、決してそれぞれの回答を憶えていたわけではない。すなわちこの結果は、本人たちの自覚の有無に関係なく、パーソナリティの基底的な特性が、あたかも遺伝子構造のように、本人たちのなかで持続していることを示しているのである。この点で、かれらの多くが仁多郡内で培った社会的態度を変わらず維持し続けていることを指摘できる。[7]

さて、私たちが本書を通じて見てきたのは、地域移動の異なる経験が、それぞれの生活にいかなる変容をもたらすのかということである。それゆえここでは意識項目の時点間の一致率あるいは変化傾向に、地域移動の類型ごとの差異があるかということに関心がもたれる。そこで意識の移動表分析と同時に、地域移動の類型別の意識変容傾向も見ていくことにする。

地域移動の類型は、ここまでは都市定住、Jターン、県内周流、Uターンという四つの分類を用いてきた。しかし

この章においては、Uターン型の五名を、Jターン型（四名）と県内周流型（一名）に振り分けて、三類型とする。これは五名という少数では一つの集団としての特徴を把握しきれないという操作のうえでの理由によるが、同時に、意識変容の様子が、大学などの学生時代を県内で過ごしたかどうか、最終学歴取得後に県内で職を得ているかどうかという二つの観点に議論を集約して説明可能なものであったためでもある。この再定義により、本章における移動類型は都市定住型一一サンプル、Jターン型一二サンプル、県内周流型一二サンプルという内訳になる。なおベース調査時つまり流出前に移動パターンごとの意識差がすでに見られるのかどうかを確認してみたところ、その時点では顕著な類型間の格差は見出せなかった。つまり、同一クラスで生活していたこの集団には、流出までに、予期的な社会化によって異なる意識傾向を示していた様子はほとんどないのである。専門的な表現をするならば、進路による細かいトラッキング（水路付け）が見られず、クラス内は未分化の状態だったということになる。

都市的アノミーと道徳性

都市的アノミーとは、（山間地域と比較すると）都会での生活に特徴的な、目標と規範が弛緩した心的状態をまとめたものである。かれらは一八歳までは地域や家族の緊密な繋がりのなかで育ってきた。しかし流出を経験することで、これらの第一次集団を離れた、匿名の人間関係のなかに単独で入っていくことになる。この生活条件の変化がもたらすであろう無力感や不安感、生活の不安定さからくる目標喪失感などが、回答の変化となって表れることが考えられる。また道徳性は、自己中心的な価値判断の有無

や、法の網すれすれでも要領よく処世しようとするか、高い倫理性をもつかを問うものである。

○「あなたはこの世の中は全くわけがわからないと感じることがありますか」（表7-4、図7-2）

これは社会の「複雑さ／了解しやすさ」について、各自がどう認識しているかを問う項目である。表全体の傾向を見ると、そう思わなくなる、つまり社会についての了解性が高まる方への全体の変化（表内右上方のセルへの集中）を見ることができる。この方向への変化の結果として、流出移動後は「そう思う」という意見は完全に姿を消している。すなわち社会に対する「わけがわからない」という流出前の不透明感は、六年の生活経験で低減し、（大卒）学歴や安定した職を得た二四歳の時点では、社会についての了解の感覚は全体として高まる傾向にあるのである。とはいえその傾向は緩やかなもので、一致率は四〇・〇％、対角セル残差合計は五・四と他の項目と比べて著しく低い値ではない。

引き続き、この意識変容と移動パターンの関係を見てみよう。図7-2に示されたグラフは、意識変容の様子を移動パターンごとに分解して示したものである。これを見ると、県内周流型と都市定住型で社会に対する了解性が増す傾向にあることがわかる。もっとも県内周流型では了解性を増した者の割合が、三分の二に達するのに対し、都市定住型では変化の傾向はプラス・不変・マイナスにばらつきがある。Jターンでは社会に対する了解性は全体の傾向としてはあまり高まっておらず、態度不変の割合が高いことがわかる。

表7-4　あなたはこの世の中は全くわけがわからないと感じることがありますか

1998年（24歳） 1992年（18歳）	まったくそう思う	そう思う	どちらともいえない	そう思わない	まったくそう思わない	計
まったくそう思う				1	1	2
どちらかといえばそう思う			2	3	3	8
どちらともいえない			8	4		12
どちらかといえばそう思わない			2	3	2	7
まったくそう思わない			1	2	3	6
計			13	13	9	35

U(否定化サンプル)：D(一致サンプル)：L(肯定化サンプル)＝16：14：5,
対角セル残差合計＝5.4
一致率＝.400,　Cramer´s V＝.383, Pearson´s r＝.057

表7-5　あなたは意気消沈してしょげ返ってしまうことがありますか

1998年（24歳） 1992年（18歳）	まったくそう思う	そう思う	どちらともいえない	そう思わない	まったくそう思わない	計
まったくそう思う				1		1
どちらかといえばそう思う		1	5	3		9
どちらともいえない		3	8	6	2	19
どちらかといえばそう思わない				5		5
まったくそう思わない			1			1
計		4	14	15	2	35

U(否定化サンプル)：D(一致サンプル)：L(肯定化サンプル)＝17：14：4,
対角セル残差合計＝2.3,
一致率＝.400,　Cramer´s V＝.344, Pearson´s r＝.129

表7-6　あなたはこのままでは自分が駄目になってしまうと思うことがありますか

1998年（24歳） 1992年（18歳）	まったくそう思う	そう思う	どちらともいえない	そう思わない	まったくそう思わない	計
まったくそう思う		1		1		2
どちらかといえばそう思う		1	5	6		12
どちらともいえない		1	4	3	2	10
どちらかといえばそう思わない		1	2	1	2	6
まったくそう思わない	1	1		2	1	5
計	1	5	11	13	5	35

U(否定化サンプル)：D(一致サンプル)：L(肯定化サンプル)＝20：7：8,
対角セル残差合計＝-.8,
一致率＝.200,　Cramer´s V＝.343, Pearson´s r＝.025

図7-2　世の中が理解できない

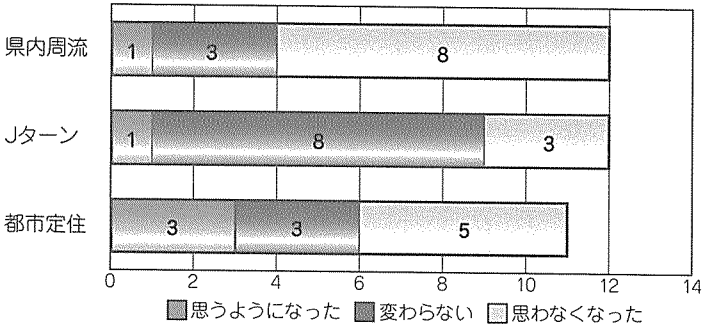


図7-3　意気消沈する

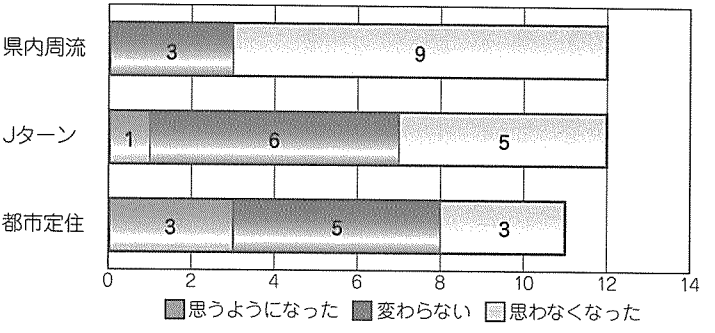
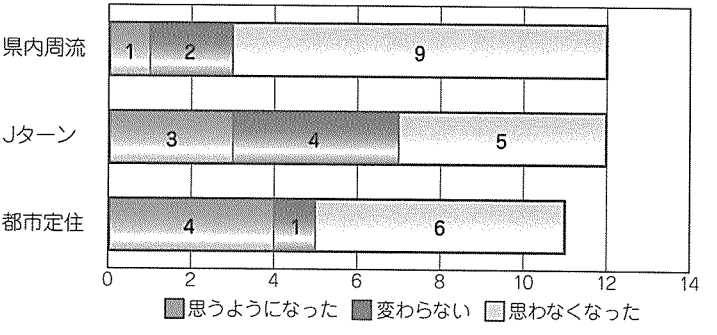


図7-4　自分が駄目になる



○「あなたは意気消沈してしょげ返ってしまうことがありますか」（表7-5、図7-3）

この項目は、日常生活における意欲の低下、すなわち心理的なデプレッションの傾向を見る項目である。一致率は四〇・〇％と前問同様に低くはない。全体の傾向としては、「そう思わない」という好転方向になだらかに変化している。二度の質問紙調査の間に大卒学歴と職業を得たことで、かれらの不安定な感覚が払拭され、心理的に安らいできた様子を見ることができる。逆にいえば、山間地域において流出を前提として大学受験をしていた高校三年生の時点が、むしろかれらにとっては不安定な時期だったということができそうである。

移動パターンごとの意識変容傾向を見ると、県内周流型では「そう思わない」つまりしょげ返らないという方向に意識は大きく好転している。ところが高校卒業後に県外流出を経験した他の二類型では、そういう一方向の傾向は見られず、上昇・下降・非移動が交錯し、明確な方向は見出せない。これは高校卒業後、県内に一貫して留まり続けた経験が、生活における意欲を低下させることなく、心理状態を良好に保つはたらきをもっていることを示している。このことの具体的な要因としては、県内出身の地元学生という、主流層として学生生活を過ごしたことや、高校卒業時から県内就職という目標が共有されていたことなどがこの層全体にもたらす安定性を指摘できるだろう。

○「あなたはこのままでは自分が駄目になってしまうと思うことがありますか」（表7-6、図7-4）

この質問は、自分の現状についてどのように認識しているかを見る項目である。自分のライフコース

の延長線上に、肯定しうる将来が見えているのか、それとも駄目になってしまうと思うのかを尋ねている。クロス集計表の全体の動きとしては、高校三年時よりも「そう思わない」という方向に移動する好転傾向がはっきりしていて（表内右上方のセルへの集中）、一致率も二〇・〇％にすぎない。ここでも、流出前よりも学歴・職業を取得した現在の方が、現状を肯定していることがわかり、流出前の大学受験期の不安定さを浮き彫りにしている。

移動類型別に見ていくと、やはり県内周流型の多くのサンプルが「このままでは自分が駄目になる」とは思わなくなる方向に意識を好転させている。別の言い方をすれば、かれらの多くが、このまま進めば自分には肯定しうる将来が見えると考えているのである。これに対して、都市定住型ではこの意識は肯定化と否定化にほぼ二極分解しており、Jターン型では変化の傾向は一定ではない。ゆえに県内周流型の極端な好転傾向がここでもまた特筆される。このことは、県内周流型で現職継続希望が多かったことも整合する。また県の職員を目指して、当初から県内での職業的な専門教育を受け続けた澤島祥一、堀真里江、杉本祐子のまっすぐなライフヒストリーと、県外大都市で自分なりに夢を追った後で、遅れて県内に戻った甲斐理英や古池建亮のライフヒストリーを見比べれば、県内周流型とJターン型との差異は理解しうる。また、中川博喜、塚本雅子などのように、ふわりと軽やかに流出し、大都市でしっかり常勤職を得ている事例を考えれば、都市定住型の一部にライフコースの見通しの肯定化傾向が見られることも得心がいく。

表7-7　実際に法を破らないかぎり、法の網をくぐってもいっこうにさしつかえない

1992年（18歳）＼1998年（24歳）	まったくそう思う	そう思う	どちらともいえない	そう思わない	まったくそう思わない	計
まったくそう思う						
どちらかといえばそう思う		1		1	1	3
どちらともいえない			2		3	5
どちらかといえばそう思わない		1	3	9	2	15
まったくそう思わない			3	4	4	11
計		2	8	14	10	34

U(否定化サンプル)：D(一致サンプル)：L(肯定化サンプル)＝7：16：11,
対角セル残差合計＝5.2,
一致率＝.471,　Cramer´s V＝.354, Pearson´s r＝.074

表7-8　自分が困らないかぎり、好きなことを何でもやってもよい

1992年（18歳）＼1998年（24歳）	まったくそう思う	そう思う	どちらともいえない	そう思わない	まったくそう思わない	計
まったくそう思う						
どちらかといえばそう思う						
どちらともいえない			1	3	2	6
どちらかといえばそう思わない			1	6	4	11
まったくそう思わない			3	6	9	18
計			5	15	15	35

U(否定化サンプル)：D(一致サンプル)：L(肯定化サンプル)＝9：16：10,
対角セル残差合計＝2.7,
一致率＝.457,　Cramer´s V＝.149, Pearson´s r＝.085

表7-9　はっきりとした答えがでない問題には興味がもてない

1992年（18歳）＼1998年（24歳）	まったくそう思う	そう思う	どちらともいえない	そう思わない	まったくそう思わない	計
まったくそう思う				1	1	2
どちらかといえばそう思う		2		2	2	6
どちらともいえない	1		2	1	1	5
どちらかといえばそう思わない			3	7	2	12
まったくそう思わない		2		3	5	10
計	1	4	5	14	11	35

U(否定化サンプル)：D(一致サンプル)：L(肯定化サンプル)＝10：16：9,
対角セル残差合計＝6.6,
一致率＝.457,　Cramer´s V＝.391, Pearson´s r＝.090

図7-5　法の網をくぐってもよい

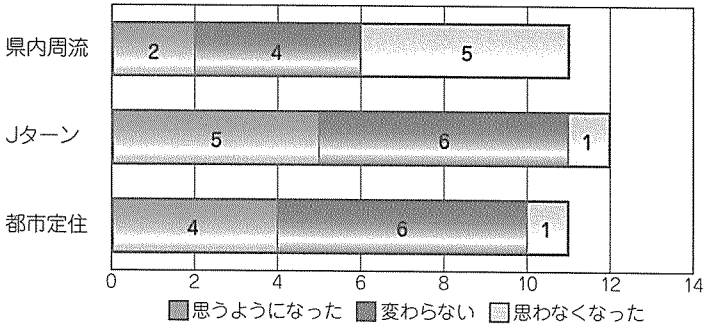


図7-6　自分さえよければ何をしてもいい

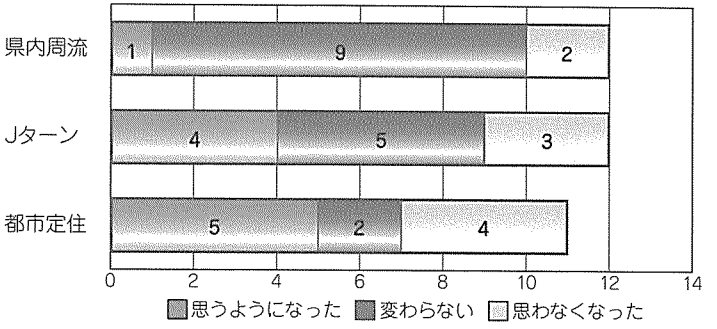
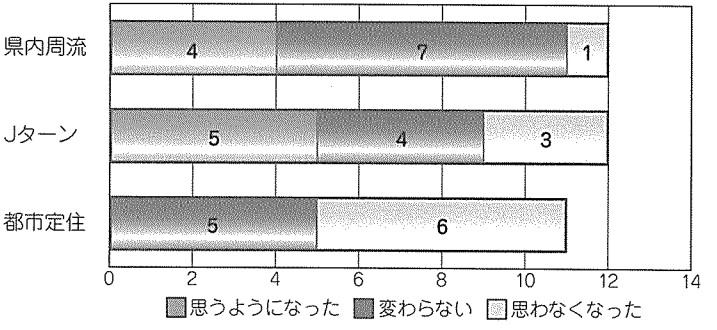


図7-7　はっきりとした答えが欲しい



○「実際に法を破らないかぎり、法の網をくぐってもいっこうにさしつかえない」（表7-7、図7-5）

これは、倫理的に正しく生きることを追求するか、それともできるだけ要領よく処世していこうと考えるかという個々人の道徳性を問う項目である。全体では、「そう思わない」という方（下方）に当初から分布が大きく偏っていたのだが、一致率は四七・一％と、意識変容しなかったケースが半数近くを占めており、対角セル残差合計も五・二と高い値を示している。このことは、個々人の道徳性が地域移動や地位の移動の激しい六年間を経ても、大きく変動していないことを示している。

ただし、移動パターン別に見てみると、県内周流型においては倫理観がさらに高まる方向への変化が多いのに対し、県外での学生生活を経験した都市定住型とJターン型では、要領よく処世する方向に変化しているケースが明らかに多いことがわかる。県内周流型に教員や医療専門職が多いことには気を配らなければならないが、大都市生活を経験していない県内周流型について、倫理性が高まっていることを指摘できる。

○「自分が困らないかぎり、好きなことを何でもやってもよい」（表7-8、図7-6）

これは自己中心的行動を肯定するかどうかを尋ねる項目である。全体では当初から「そう思わない」の方（下方）に分布が偏っているが、一致率は四五・七％であり、この社会的態度の不変性が確認できる。

移動パターンごとにブレイクダウンして見ると、ここでは県内周流型で意識が変化しなかったサンプ

ルがたいへん多いのに対して、県外流出の二類型では、自己中心的になる方向と、逆に自己中心的にならない方向が交錯した意識変容が起こっていて、意識の不変性はあまり見られない。

ここでひとまず、都市的アノミーと道徳性についてまとめよう。ここでは大学受験・流出前のベース調査時よりも二四歳時の方が、世の中に対する了解性が高まり、無気力感は低減しており、価値観に基盤をおく道徳性については、大きく変化しないことがわかった。それゆえにこの意識領域について、この六年間の「健全」とみなしうる意識変容・持続を結論付けることができる。

こうした全体の傾向があるうえで、とりわけ県内周流型で、都市的なアノミー傾向が高まることなく、倫理性が向上するという顕著な結果が出ている。これに対して県外流出した都市定住型、Jターン型の二類型の変化の傾向は全体にばらついている。ゆえに県内周流型という、安定した、しかし刺激や変化の比較的少ないライフコース経験が、各人に意識変容・維持の共通した圧力を与え、パーソナリティの安定化をもたらしていることを窺い知ることができる。

生活環境のあいまいさへの耐性

現代社会において職業生活や学校生活を送っていると、答えが一意に決まっている問題ばかりではなく、正しい答えの存在しないものごとに多く直面する。例えば大学の文科系の講義レポートや、企業内のディスカッションなどは、唯一の模範解答を求める営為ではない。そうした複雑で不確定な状況から抜け出すために、類型化された判断をしようとするタイプの人と、その場その場の状況に応じてものご

とを考えようとする人がいるだろう。また職業条件によっては、ルーティンの仕事を着実にこなせばそれで十分なものと、その都度自己決定を必要とするものがある。あいまいさへの耐性と呼ばれる項目群はこの点の意思決定の基準を尋ねるものである。

○「はっきりとした答えがでない問題には興味がもてない」（表7-9、図7-7）

明確な正答を求めようとするのか、それとも解答がはっきりしないからこそ考える意味があると思うかという問題の捉え方の違いを問う項目である。ここでは一致率は四五・七％、対角セル残差合計は六・六といずれも高い。ゆえにかれらの場合は、問題解決についての選好は、高校卒業時までにある程度形成されており、その後の六年のインターバルを経ても極端には変化しにくいということがわかる。

そのうえで移動パターンごとの意識変容の様子を見ると、県内周流型はここでも高い不変傾向と若干の肯定化（はっきりとした答えを求めるようになる）を示し、Jターン型では肯定化傾向はさらに強い。これに対し、都市定住型では、思わなくなる、つまりはっきりした答えを求めなくなるという変化が他の類型と比較すると著しく多く、逆の方向への変化は全く見られない。これは、都市で複雑性の高い生活（職業）条件におかれていることが、あいまいさを受容する方向にパーソナリティを一様に変容させるはたらきをもっていることを示している。別の言い方をすれば、そういう都市での生活に適応的な意識変容をしなかった層が、大学卒業後にJターンして島根県内に職を求める傾向があるのかもしれない。

○「十分な情報がないときに意思決定をするのは不愉快である」（表7-10、図7-8）

これは、意思決定のための情報量についてどう考えているかを問う項目である。この意識全体を見ると一致率は三一・四%、対角セル残差合計は一・〇に留まっている。さらにサンプル全体の意識変容の方向は一定していない。

移動パターンごとに見ていくと、都市定住型とJターン型、つまり県外での大学生活を経験した層では、あいまいな状況のなかでの意思決定を不愉快とは「思わな」くなる変化が共通した傾向として認められる。これとは対照的に県内周流型では、この態度は不変か、むしろ緩やかながら「不愉快と思う」という硬直化の方向に進む傾向がある。県外都市への流出経験の有無が意思決定時の情報についての考え方に差異をもたらしているのである。県内での生活の大都市と比較した場合の見通しのよさ、あるいは了解性の高さというような条件が、「事情をよくわかったうえでものごとを決めたい」という手堅い方向への変化をもたらしたと考えられる結果である。一例を挙げるとすれば、都会生活では地下鉄やバスの時刻表や停車駅、ときには経路すらよく調べることなく駅に向かい、臨機応変に乗り換えて行くことが必要になるが、島根県内では外出の際にはまず時刻表を確認することから始めなければ、不愉快な結果に終わってしまう。この例に限らず、どこのガソリンスタンドで給油するか、どこのコンビニエンス・ストアに立ち寄るかということも、あらかじめ計画しておかなければならないのが、地方での生活である。

表7-10　十分な情報がないときに意思決定をするのは不愉快である

1992年（18歳）＼1998年（24歳）	まったくそう思う	そう思う	どちらともいえない	そう思わない	まったくそう思わない	計
まったくそう思う	1	4		1		6
どちらかといえばそう思う	3	7	7	2		19
どちらともいえない	1	2	1			4
どちらかといえばそう思わない			4	1		5
まったくそう思わない					1	1
計	5	13	12	4	1	35

U(否定化サンプル)：D(一致サンプル)：L(肯定化サンプル)＝14：11：10,
対角セル残差合計＝1.0,
一致率＝.314,　Cramer´s V＝.571, Pearson´s r＝.420

表7-11　あいまいで先の見通しのつかないことは嫌いである

1992年（18歳）＼1998年（24歳）	まったくそう思う	そう思う	どちらともいえない	そう思わない	まったくそう思わない	計
まったくそう思う	2	1	1	1		5
どちらかといえばそう思う		6	4	1		11
どちらともいえない		6	2	2		10
どちらかといえばそう思わない		3	1	2		6
まったくそう思わない			1	1	1	3
計	2	16	9	7	1	35

U(否定化サンプル)：D(一致サンプル)：L(肯定化サンプル)＝10：13：12,
対角セル残差合計＝3.7,
一致率＝.371,　Cramer´s V＝.446, Pearson´s r＝.395

表7-12　この複雑な世の中で何をなすべきか知る方法は指導者や専門家に頼ることである

1992年（18歳）＼1998年（24歳）	まったくそう思う	そう思う	どちらともいえない	そう思わない	まったくそう思わない	計
まったくそう思う						
どちらかといえばそう思う		1		1		2
どちらともいえない			2	4	1	7
どちらかといえばそう思わない		1	2	5	6	14
まったくそう思わない				4	8	12
計		2	4	14	15	35

U(否定化サンプル)：D(一致サンプル)：L(肯定化サンプル)＝12：16：7,
対角セル残差合計＝4.4,
一致率＝.457,　Cramer´s V＝.391, Pearson´s r＝.487

図7-8　十分な情報が欲しい

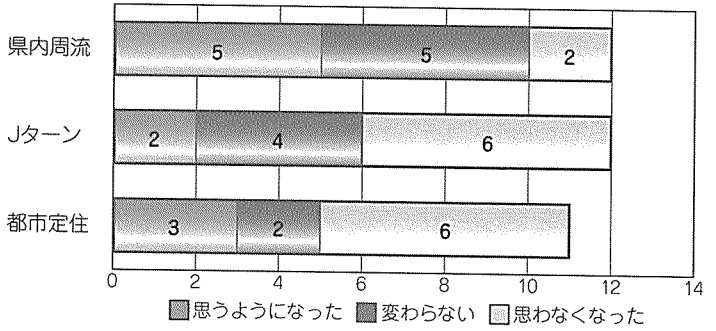


図7-9　あいまいさを嫌う

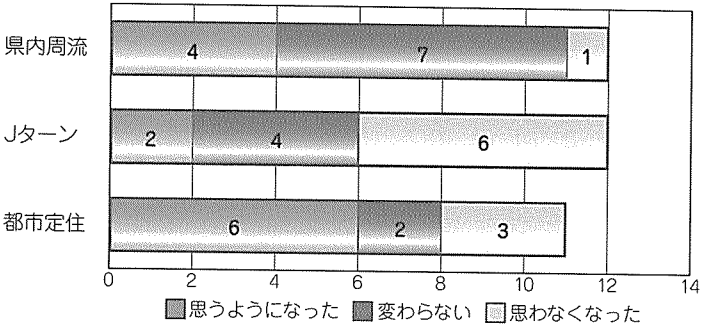
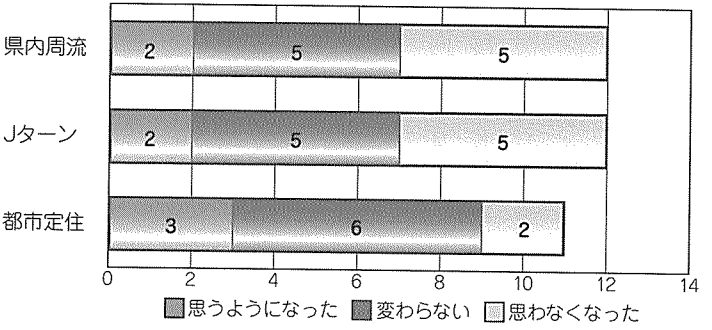


図7-10　指導者・専門家に頼る



○「あいまいで先の見通しのつかないことは嫌いである」（表7-11、図7-9）

この項目も、前項目と同様にあいまいさと見通しのつかない状況への耐性を尋ねたものである。全体を見ると変化の傾向は一方的ではなく、あいまいさを嫌う方向への変化、受け入れる方向への変化、不変傾向が入り混じっている。一致率は三七・一％、対角セル残差合計は三・七である。

移動パターンごとに分解してみると、都市定住型ではあいまいさを嫌う方向への変化が多いが、Jターン型では逆に見通しがつかないことを受け入れる方向への変化も多い。これに対して、県内周流型では意識の不変傾向が相対的に見ると強い。Jターン型は、県外への進学流出の後に県内に再び戻って就職活動や就職試験に臨むという、見通しのつけにくいなかでの生活環境の変化を経験している。この類型において、あいまいさに対する耐性が獲得されていることについては、このような移動経験との関連を指摘できる。

あいまいさに対する耐性についても、やはり県内周流型で、意識の不変傾向が強く見られた。また都市での生活によって、十分な情報や正答のない状況を受け入れるようになる傾向や、激しい地域移動を経験したJターン型で、見通しのなさへの耐性が向上することも、移動経験がもたらした特有の意識変容の可能性として指摘できる。いずれにせよ、ここでもこの六年間に、パーソナリティに移動類型ごとに、それぞれ全く異なる圧力がかかった形跡がうかがえるのである。

権威に対する心構え

ここで見ていくのは、社会学や心理学で権威主義的態度と呼ばれている一群である。これは権威のある人や自分よりも地位の高い人に対して、どのような態度をとるかということである。ある人が権威主義的だ、という表現は、その人が自分よりも権威のあるものを、自らの判断を介することなく高く評価し、しかも他人に対してそれを振りかざし押し付けようとする傾向をもっていることを意味している。その定義には、因習性、伝統性、権威の尊重、指導者への服従性など多様な内容が包含されている。日本社会においては伝統的なものや因習的なものが権威をもつとされてきたので、権威主義的伝統主義とも呼ばれることがある。

○「この複雑な世の中で何をなすべきか知る唯一の方法は指導者や専門家に頼ることである」（表7-12、図7-10）

表全体を見ると、この態度については不変傾向が強く、四五・七％のサンプルが六年を経過しても回答を変化させていない。また対角セル残差合計も四・四とプラスの値である。つまりかれらの権威に対する態度は、六年を経ても劇的には変化していないということになる。

移動パターンごとの意識変容の傾向を見ると、都市定住型では、流出前後で指導者や専門家への服従性が変化していないサンプルがわずかながら多い。これに対してJターン型、県内周流型では、指導者や専門家への服従性は低下して、反権威主義的になる傾向がある。一般には、高い学歴を得るほど、権威主義的態度は低減することが明らかにされている。それゆえに都市定住型のこの不変傾向には、権威

主義的態度が低下しないような何らかのプラスの圧力が加わっていることが考えられる。おそらくこれは、都市に残った者の多くが、被雇用職に就いて、上司などの権威者に従う社会の歯車としての性格を身に付けがちであるためだろう。山間地域からの流出層としての都市生活は、都市社会の価値観への過敏なまでの服従をもたらすこともある。またそうであるがゆえにかれらは、都会で生まれ育った若者たちと競った場合に、組織人としての実直さを高く評価されることになるともいえる。

これに対して、県内で職を得た層で、反権威主義への変化が見られることには、次のような解釈が考えられる。このトピックに関して重要なことは、この六年の間に、対象者自身が指導者や専門家になったケースが少なくないということである。すでに指摘したとおり、こうした事例は特に県内周流型に多いのである。それぞれの地域社会のエリート層にあたるかれらは、すでに責任のある職務を任されており、何かに頼るのではなく、自らが意思決定の主体として自己指令的な判断をすることが必要とされている。前述した都市定住型の場合と違って、自らの判断による積極性と民主性を発揮することが求められていることが予想される（直井優　一九八七）。さらに県内の了解性の高い生活条件においては、そもそも「この複雑な世の中」の認識が、都市定住者のもつ視野よりも、いくぶん狭いものであるということも考えられる。典型例として町役場の職員や過疎地の小規模小学校の教員と、大都市の若年サラリーマンやＯＬの生活世界の違いを考えれば、わかりやすいかもしれない。

○「よい指導者は、尊敬を得るためには下の者に対して厳格でなければならない」（表7-13、図7-11）

これも指導者のあり方について尋ねる意識項目である。全体の変化の傾向を見ると、肯定と否定が混ざっていて、一致率は二八・六%、対角セル残差合計もほぼゼロに近い値である。

そこで移動パターンごとにブレイクダウンした結果を見ると、都市定住型で指導者は厳格であるべきだという権威主義の方向への変化を示すケースが半数以上ある。これに対して県内就職の二類型では、双方向の変化の傾向があるなかで、厳格さを否定する方向への変化も少なくない。つまり、都市定住型では指導者の厳格性を肯定化する力が加わっているのに対して、県内就職者では否定化する力が加わっているということになる。この結果は、前項の回答と共通する動きである。この変化の結果、これらの項目に関するかぎり県内就職者はどちらかといえば反権威主義的であり、都市就職者は厳格な権威を肯定する権威主義的な傾向をもつという分布の差異が生じている。

○「伝統や慣習に従ったやり方に疑問をもつ人は、結局は問題をひき起こすことになる」（表7-14、図7-12）

これは権威主義的態度のなかでも特に伝統性に関して尋ねた質問項目である。かれらの育った山間地域は、伝統的な考え方を肯定的なものとして伝達する傾向をもっている。そのため都市への流出経験は、身に付けた伝統性について、自分のなかでの折り合いを付けることを要求すると考えられる。この項目については一致率が二八・六%、対角セル残差合計もマイナス〇・八と低く、回答傾向が特定の方向性を示すことなく散らばっていったことがわかる。

表7-13　よい指導者は、尊敬を得るためには下の者に対して厳格でなければならない

1998年（24歳） 1992年（18歳）	まったくそう思う	そう思う	どちらともいえない	そう思わない	まったくそう思わない	計
まったくそう思う						
どちらかといえばそう思う		2	1	3		6
どちらともいえない			5	6	1	12
どちらかといえばそう思わない		1	4	1	2	8
まったくそう思わない		3	4		2	9
計		6	14	10	5	35

U(否定化サンプル)：D(一致サンプル)：L(肯定化サンプル)＝13：10：12,
対角セル残差合計＝0.6,
一致率＝.286,　Cramer´s V＝.364, Pearson´s r＝−.088

表7-14　伝統や慣習に従ったやり方に疑問をもつ人は、結局は問題をひき起こすことになる

1998年（24歳） 1992年（18歳）	まったくそう思う	そう思う	どちらともいえない	そう思わない	まったくそう思わない	計
まったくそう思う						
どちらかといえばそう思う			1	1	1	3
どちらともいえない		2	5	3	2	12
どちらかといえばそう思わない			6	5	1	12
まったくそう思わない		1		7		8
計		3	12	16	4	35

U(否定化サンプル)：D(一致サンプル)：L(肯定化サンプル)＝9：10：16,
対角セル残差合計＝−.8,
一致率＝.286,　Cramer´s V＝.352, Pearson´s r＝.039

表7-15　あなたはお母さんにどの程度親しみを感じますか

1998年（24歳） 1992年（18歳）	まったくそう思う	そう思う	どちらともいえない	そう思わない	まったくそう思わない	計
まったくそう思う	8					8
どちらかといえばそう思う	10	9	1			20
どちらともいえない	1	3	3			7
どちらかといえばそう思わない						
まったくそう思わない						
計	19	12	4			35

U(否定化サンプル)：D(一致サンプル)：L(肯定化サンプル)＝1：20：14,
対角セル残差合計＝8.0,
一致率＝.571,　Cramer´s V＝.485, Pearson´s r＝.608

図7-11　指導者は厳格であるべきである

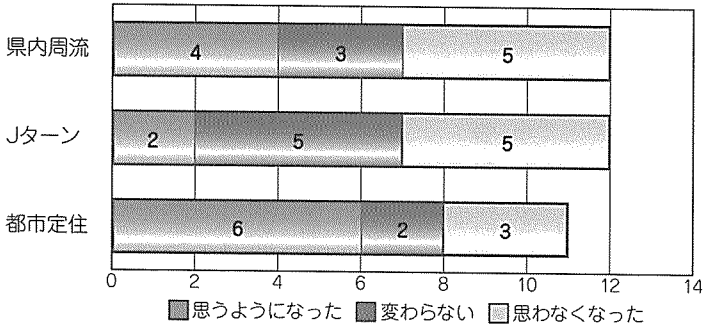


図7-12　伝統や慣習に従う

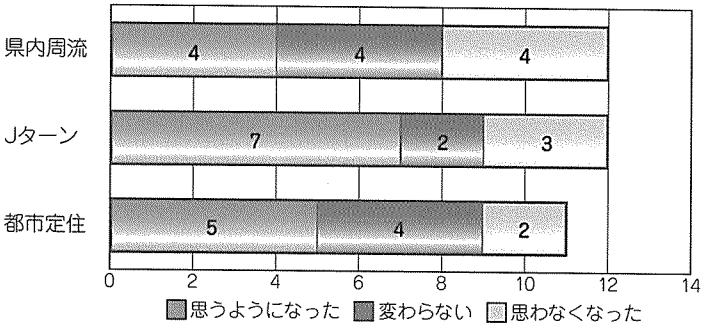
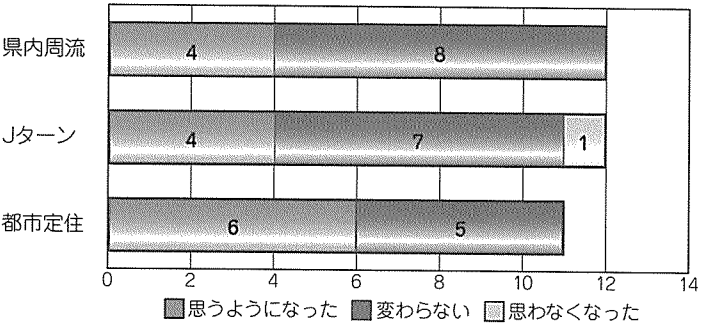


図7-13　母に親しみを感じる



表には示していないが、じつはこの項目では、流出前から県内周流型が伝統主義的傾向であり、都市流出層では伝統性を否定する傾向が強いという若干の類型間の格差がすでに存在していた。しかし移動パターンごとの変化の傾向を見ると、都市流出の二類型で、伝統や慣習に従うという権威主義的な方向への変化が少なからず見られた。これに対して、県内周流型では変化の方向は一定しない。このことは、県内に留まり続けた経験が因習的な価値観を強めたり、故郷を離れて都市に流出した経験が反伝統主義をもたらすというようなありがちな思い込みが、全くあてはまらないことを示しており、権威に対する態度の重層性を示す結果となっている。

このように権威主義的態度の三項目では、教員、医療専門職、県の行政担当職員などが含まれている県内就職者（県内周流とJターン）において、指導者に従う傾向が弱まり、下位者に対する厳格さを否定するようになるという変化傾向が見られた。一方、都市定住型においては、高学歴取得に伴う権威主義剝奪効果（轟　二〇〇〇、吉川・轟　一九九六）を覆い隠すほどの強さで、伝統や権威に従う歯車としての受動的性格が強まる傾向が見られた。限られたデータから得られた結果を普遍化するのは危険なことだが、山間の地方から流出した労働力は、都市への適応の過程で、上位者に権威主義的に従う傾向を強化しがちであることを指摘できそうである。

家族・親族への想い

家族・親族への想いとしてまとめたのは、母親や父親に対して感じる情緒的紐帯の強さと、親類との

考え方の同調性である。

○「あなたはお母さんにどの程度親しみを感じますか」（表7-15、図7-13）

母親への親しみの項目では、五七・一％の一致率が得られており、対角セル残差合計は八・〇であった。この値は、全ての態度項目のなかで、二番目に高い一致率であった。母親との心理的な距離は、一八歳以降の経験では大きく変化しないということを示す結果である。

あえていうならば都市定住者において母親への親しみの度合いを高めるサンプルが若干多い。故郷の父母は「遠きにありて想うもの」なのかもしれない。

○「あなたはお父さんのようになりたいと思いますか」（表7-16、図7-14）

父親のようになりたいかどうかを尋ねる項目である。ここでも、一致率が五六・三％と半数以上のサンプルが六年を経ても同一回答をしている。また対角セル残差合計は七・六とやはり高い値である。

変化の傾向は、前項と同様に、都市定住型において父親のようになりたいという肯定の方向への変化傾向が見られるのに対し、県内就職の二類型では不変傾向が主流である。一家の大黒柱である故郷の父親については、この若者たちは、たとえ大都市に流出したとしても、必ずしも否定的に捉えるように変化していくわけではなく、高校卒業時の考え方が継続しているようである。

○「あなたの考え方や意見は親類の方と違っていることがありますか」（表7-17、図7-15）

親類に対する考え方の同調性でも、一致率は四五・七％とやはり比較的高い。対角セル残差合計は二・九である。親類、つまりは故郷の第一次集団に対する同調性は、流出後の経験では変化しにくいものようだ。

移動パターン別に見ても、どの類型でも意識の不変傾向が主流である。高校卒業後に流出を経験しても、かれらにとっては、故郷の親類の準拠集団としての重みは、変化することはないようだ。県内の親族との考え方の違いを感じるようにならないということは、都市定住しても大きな価値観の変容がないということである。この点では島根県人の特性をそのまま残しているということになる。

このように、故郷や家族に対する想いには、青年期の六年間では著しい変化が見られないことが特徴的である。このことは、それぞれの流出経験が、かれらを心情的に漂白された流出先の人々に変えてしまうのではなく、想いを変わらず抱いたまま故郷を離れているという、家郷喪失者の状態においていることを示している。

自尊感情

最後に自尊感情の変化を見よう。自尊感情として一括しているのは、自分の能力をどう見積もっているか（自己効力感といわれるもの）と、自分の存在を肯定的に見ているかどうか（自尊心）というセルフ・エスティームに関する項目群である。

○「私は、少なくとも他の人と同じくらい価値のある人間である」（表7-18、図7-16）

これは、自尊感情の一側面として自己の社会的価値について尋ねた項目である。一致率は四五・七%、対角セル残差合計が三・二であり、意識変容は比較的少ない。

移動パターンごとに意識変容の方向を見ると、どの類型でもほぼ一様に、肯定化と不変が半々に混在している。

○「私は自分自身を好ましい人間だと思う」（表7-19、図7-17）

自己肯定を尋ねるこの項目では一致率が比較的低く、三四・三%、対角セル残差合計は一・三に留まる。そしてサンプル全体を見ると「そう思う」という方向への変化を経験したサンプルが二〇サンプルあり、この六年間の生活経験によって対象者全体が自己肯定へと進んだことを示している。

これを移動パターンごとに見ていくと、県内周流型で自己肯定へ向かうサンプルの数が顕著に多いのに対して、Jターン型では態度不変のサンプルが比較的多い。県内に留まり続けた場合、自己肯定を助長する方向への力を受けるものと考えられる。県外に留まり続けた都市定住型でも自己肯定の傾向は強いが、それは県内周流型に見られた一方向へ強い力ではない。

○「私は、たいていのことならば他の人と同じくらいできる」（表7-2、図7-18）

表7-16　あなたはお父さんのようになりたいと思いますか

1998年（24歳） 1992年（18歳）	まったくそう思う	そう思う	どちらともいえない	そう思わない	まったくそう思わない	計
まったくそう思う				1		1
どちらかといえばそう思う		5				5
どちらともいえない		7	10	2		19
どちらかといえばそう思わない		1	2	1		4
まったくそう思わない			1		2	3
計		13	13	4	2	32

U(否定化サンプル)：D(一致サンプル)：L(肯定化サンプル)＝3：18：11,
対角セル残差合計＝7.6,
一致率＝.563,　Cramer´s V＝.495, Pearson´s r＝.519

表7-17　あなたの考え方や意見は親類の方と違っていることがありますか

1998年（24歳） 1992年（18歳）	まったくそう思う	そう思う	どちらともいえない	そう思わない	まったくそう思わない	計
まったくそう思う						
どちらかといえばそう思う	1	2	4	2		9
どちらともいえない		6	10	2		18
どちらかといえばそう思わない			2	4	1	7
まったくそう思わない				1		1
計	1	8	16	9	1	35

U(否定化サンプル)：D(一致サンプル)：L(肯定化サンプル)＝9：16：10,
対角セル残差合計＝2.9,
一致率＝.457,　Cramer´s V＝.405, Pearson´s r＝.447

表7-18　私は、少なくとも他の人と同じくらい価値のある人間である

1998年（24歳） 1992年（18歳）	まったくそう思う	そう思う	どちらともいえない	そう思わない	まったくそう思わない	計
まったくそう思う						
どちらかといえばそう思う		4	3	1		8
どちらともいえない	3	6	12	2		23
どちらかといえばそう思わない		1				1
まったくそう思わない		2		1		3
計	3	13	15	4		35

U(否定化サンプル)：D(一致サンプル)：L(肯定化サンプル)＝6：16：13,
対角セル残差合計＝3.2,
一致率＝.457,　Cramer´s V＝.280, Pearson´s r＝−.020

図7-14　父のようになりたい

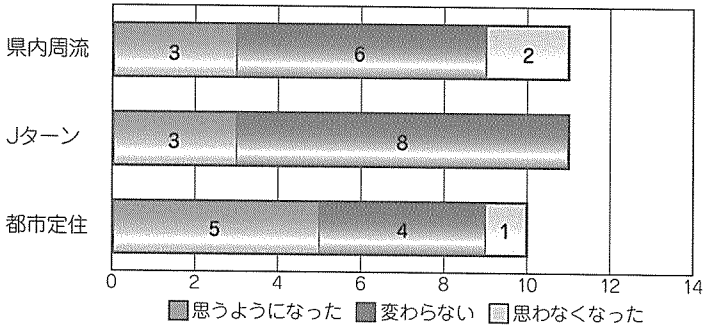


図7-15　親類と考えが違っているか

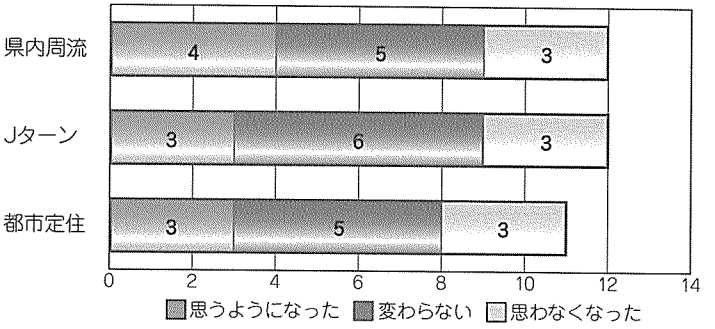


図7-16　自分は価値ある人間

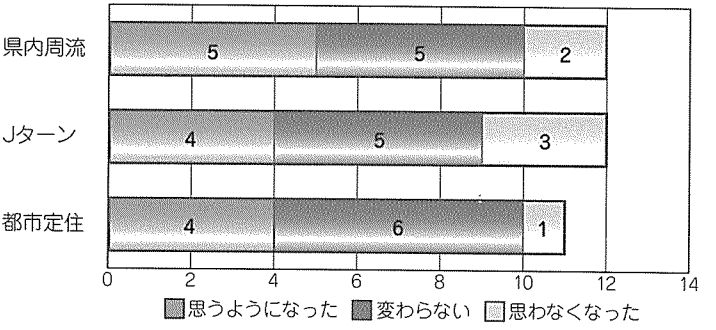


表7-19　私は自分自身を好ましい人間だと思う

1998年（24歳） 1992年（18歳）	まったくそう思う	そう思う	どちらともいえない	そう思わない	まったくそう思わない	計
まったくそう思う						
どちらかといえばそう思う		1		1		2
どちらともいえない		5	8	2		15
どちらかといえばそう思わない		2	9	3		14
まったくそう思わない		3		1		4
計		11	17	7		35

U(否定化サンプル)：D(一致サンプル)：L(肯定化サンプル)＝3：12：20,
対角セル残差合計＝1.3,
一致率＝.343,　Cramer´s V＝.358, Pearson´s r＝−.038

表7-2　私は、たいていのことならば他の人と同じくらいできる

1998年（24歳） 1992年（18歳）	まったくそう思う	そう思う	どちらともいえない	そう思わない	まったくそう思わない	計
まったくそう思う	1	2				3
どちらかといえばそう思う		12	5			17
どちらともいえない		2	5	2		9
どちらかといえばそう思わない	1	1	1	2		5
まったくそう思わない				1		1
計	2	17	11	5		35

U(否定化サンプル)：D(一致サンプル)：L(肯定化サンプル)＝9：20：6,
対角セル残差合計＝8.0
一致率＝.571,　Cramer´s V＝.495, Pearson´s r＝.519

図7-17　自分は好ましい人間

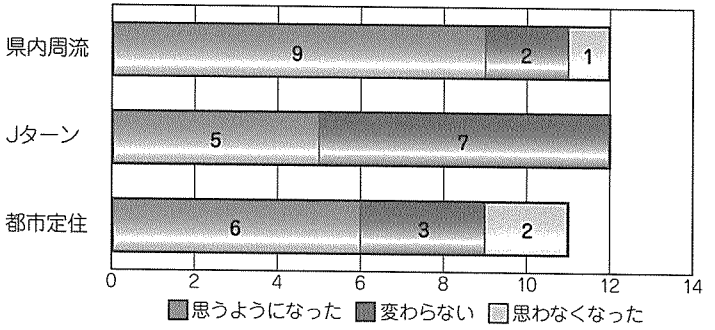
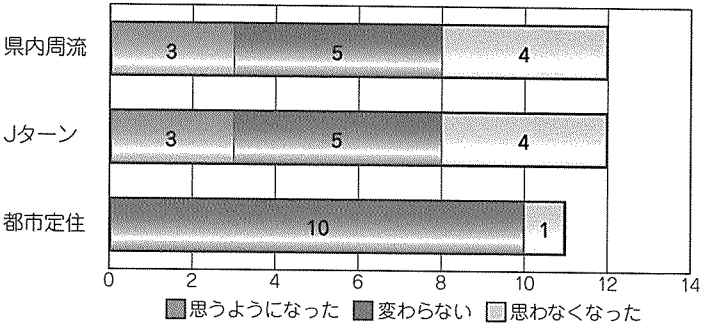


図7-18　自分はたいていのことはできる



すでに分析の例示で見たとおり、自己効力感を尋ねるこの項目では、一致率は五七・一％、対角セル残差合計は八・〇とともに高い。表内から明らかになる傾向は、やはり意識の非移動であり、特に自尊感情を失わせる方向への圧力が強くはなかったことを明瞭に示している。

移動類型ごとに意識変容の様子を見ていくと、都市定住型では自己効力感の強化や喪失という変化は少なく、明らかな不変傾向にあるのに対し、卒業後に県内で就職したJターン型と県内周流型では、自己効力感を増すケースと、自己効力感を弱めるケースが見られる。ここからは県内で目標とした職種に就職できたことにより、自分の能力に自信をもった対象者と、逆に県内に就職してしまったことで自尊感情を低下させた対象者がいることが示唆される。

このように、かれらの自尊感情は六年のインターバルをおいても著しくは変化しておらず、あえていえばサンプル全体の回答がやや肯定化する傾向にある。この原因は学歴の取得と初職への就職という社会的地位達成のプロセスを経たことにあると考えられる。そんななかで県内周流型の場合、自尊心を安定させる傾向が顕著であることが指摘できる。

県内にかかる圧力と県外流出の分散性

この章のまとめとして、移動パターンが社会的態度の変容にもたらす影響力を整理しておこう。最も特徴的な結果は、高校卒業後県内に留まり、大卒学歴取得後も引き続き県内で現職を得た県内周流型について、この層全体に一様に圧力が加わっている様子を見ることができたことである。この力は①都市

的アノミー傾向を強化することなく道徳性を高め、②あいまいさへの耐性には変化をもたらさず維持し、③権威への盲従を嫌って自己指令的に判断するようにし、④自尊感情においては自己肯定化に向かわせる傾向である。

これらと比較すると、都市定住型とJターン型では、全体を一つの方向に変化させる顕著な圧力を確認することはできず、意識の不変状態、肯定化・否定化が混ざり合った状況にある。

県外の異質な文化に接することなく、将来の見通しの立てやすい状況で無理をすることのない六年間を過ごした県内周流型において、全体に共通する圧力が見られたことは、注目に値する。どうやらかれらは島根県内で育ち、地元地方県で働く若年層エリートとして、高校卒業後にも共通した意識変容の力を浴びているようなのだ。社会意識の研究者としての筆者は、県民性のようなものが、計量的な実体を伴って見つけ出せるとは思っていないのだが、この結果は県内周流型の若者たちを、ある共通した方向へと向かわせる「島根県人らしさ」あるいは「県内エリートらしさ」を育む環境を傍証するものといえる。これに対して、都市定住型、Jターン型には、島根県外への進学流出をとりまとめたにすぎないという点で、それぞれの生活条件の多様性、適応の度合いの多様性がある。この層にとっては、大学入試の難易度で決めた流出先の大学や学部、居住地そして友人たちが、本人の人格形成にプラス方向に関与することもあれば、マイナス方向に関与することもある。就職活動についても、就職先の地域や部署配属についても、県外に出たことの「あたり」、「はずれ」が同様にあるのである。

また、Jターン型の大学卒業後の県内就職は、ときに都市生活に対する敗北感を伴う回帰であること

もあれば、県内周流への勝ち誇った参入である場合もある。また、都市に留まった層では、都市での地位達成をある程度成し遂げたことが、自尊感の高まりをもたらしている場合もあれば、いまだ流出先で滞留しているために、肯定的な変化が見られない場合もある。

そして、再度確認しておくべきことは、この章の各表の一致率や表7-3を見ればわかるように、そんな個別の意識変容の契機や、共通の意識変容の圧力にさらされながらも、かれらの一八歳時のものの考え方は、漂白されることなく、個々人の二四歳時のパーソナリティの基盤となっているということである。

1　ただし実際には、産業構造が変化したために社会全体の農業人口が父親世代よりも減少した、あるいはホワイトカラー人口が父親世代よりも増大した、というような構造的な強制要因によって、世代間の職業分布は否応なく変化する。これは構造移動あるいは強制移動と呼ばれるもので、それゆえに移動表の分析は、単純に表を作ってセルの中身を検討するのではなく、ログリニア・モデルなどで潜在的な構造を探る段階へと進んでいくことになるのである。

最近では、原純輔、盛山和夫の『社会階層』（一九九九）、佐藤俊樹の『不平等社会日本』（二〇〇〇）あるいは鹿又伸夫の『機会と結果の不平等』（二〇〇一）、原純輔編の『日本の階層システム1　近代化と社会階層』（二〇〇〇）などが、この移動表分析の結果を中心として議論を行なった文献である。興味のある読者はこれらを参照されたい。

2　質問項目の構造の違いから、「まったくそう思う」～「まったくそう思わない」の五分位の選択肢のものと、「（そう考えることが）いつもある」～「（そう考えることが）まったくない」という五段階の頻度を回答するもの

があるが、本書のなかでは全てについて「まったくそう思う」「（どちらかといえば）そう思う」「どちらともいえない」「（どちらかといえば）そう思わない」「まったくそう思わない」という回答ラベルを用いることにする。

3　例えば、この調査では、小学校六年生時の学業成績を二時点ともに五分位で尋ねている。ところが理論上変化するはずのないこの質問でも、一致率は五五・九％に留まっている。また、「なりわい」、「不惑」などの単語の意味を三択で答える語彙テストの結果（吉川徹　前掲書）を見ても、初回調査の正答者が第二波調査で誤答したり、「わからない」と回答したりする例が少なからず見られた。

4　ただしベース調査時から、多くが「とてもそう思う」と回答している場合などは、選択肢が少なくなって非移動が多くなりがちになる。そのような天井効果について検討してみたが、五分位の意識項目に関しては、天井効果による偏りは認められなかった。

5　Cramer's V は二時点間の分布の関連の強さを示す数値であり〇～一までの数値をとる。Pearson's r は一方が大きければ他方も大きいという線形関連の度合いを示す数値でマイナス1からプラス1までの値をとる。これらは、クロス集計表の特性を示すのに補助的に利用することができる指標である。

6　青年期のパーソナリティの変容過程については、心理学の分野では、既成の性格診断のための心理テストなどを継続的に調査したデータが存在する。本書のデータは郵送質問紙調査の回答であり、さらにサンプル数も少ないという点で精度が低いため、統計的検定などは残念ながら行なうことができない。

7　一致率が比較的低かったのは、不安感、自己確信性、権威主義的態度の一部の項目である。

終　章

ローカル・トラック論

奥出雲を静かに流れる斐伊川支流

三年A組の群像

本書では、三年A組の大学受験と二〇代前半の数年にさまざまな角度から光を当ててきた。第二章、第三章で明らかにしたとおり、かれらの母校、島根県立横田高校は、近隣に大学、短大、専修学校などがなく、そのうえ大卒ホワイトカラーの求人が極めて少ない山間地域にあった。それゆえにクラス全員が、高校卒業と同時に県内外の都市に流出していったのである。さらに、この地域を包摂する地方県島根は、進学・就職による一定数の若年層の大都市圏への流出が必然とされる一方で、若年ホワイトカラー層の県外からの新規流入を多くは見込めないという人口移動の状況にある。[1] こうした地域的な環境のなかで、一九九〇年代初め、本書が描いてきた三年A組の群像は、成績優良者であるがゆえに故郷を離れるという共通の進学流出を経験した。

進学先と就職先についての分析の結果、かれらの地域移動は四つの類型に大きく分けることができた。それは一八歳の大学進学時に県外の大都市地域に出て、そのまま県外で職業生活を始める都市定住型、ひとたび県外の大学などに進学するが、卒業後に県内に戻って初職に就くJターン型と故郷に戻る少数のUターン型、そして一八歳の進学時に県内市部の教育機関に進学し、卒業後も県内で職を得て、一貫して県内で地域移動を繰り返していく県内周流型の四つである。高校三年時のクラス内の生活構造やものの見方の均質性に反して、かれらは一八歳から二四歳までの六年間に、大まかに見るならこの四類型、

細かく見ればそれぞれの個人ごとに異なるライフ・チャンスと選択機会を経ている。

モデルなき流出と漂流的地域移動

このクラスの大学進学は、概して思うに任せないものであった。同年人口の多い第二次ベビーブーム世代の大学受験の厳しさも、そのことの一因となったのだが、国公立大学を目指し、できるだけ大学浪人をしないという、この山間地域に特有の進学先の基準設定は、かれらの受験をさらに厳しいものにしていた。またかれらの親世代の多くは、高校卒業後に地元就職し、家を継承して地域社会を守っている人たちである。それゆえに、大卒学歴を手に入れなければ、親世代よりも低い地位に下降移動してしまうという危機感は、この山間地域ではもとより強くはない。

クラス全員が受けたセンター試験は、部活動の県大会やコンクールに打ち込む姿に似たものに見える。県立高校の熱心な進路指導に従って、刺激の少ない山村で大学受験勉強に励み、その成果を最後のたった一度の機会に試すために、かれらの学歴主義の心性は急速に加熱される。勝てば自己実現と栄光を獲得するが、もしそこで負けたとしても、目標をもってチャレンジした経験は高校生活の思い出の一ページとして胸の内に収められ、やがてクラスは散り散りになる。それぞれの進学流出先での大学生としての新鮮な毎日の経験とともに、一時的に加熱されたかれらの受験競争への想いは冷却されていく。受験勉強の努力が百パーセント報われなかった悔しさはあるが、継承した地位を失うわけではない。かれらは大学受験に青春を賭けるが、人生を賭けているわけではないのである。

大学受験をめぐる加熱と冷却のシステム自体は、大都市でも地方でも大きな差はないのかもしれない。しかし三年A組の青年たちにとっては、この地域に生まれ育ったがゆえに、このときのごくわずかな希望と現実のズレが、本人たちにも思いがけないほどの重みをもつことになる。かれらの受験の途中経過は、センター試験の数十点の点差に集約され、何十段階かの細かい輪切りによって行き先が確認される。そしてここで、県内の大学などへの進学か、県外への流出か、あるいは自分は大学卒業後に県内で安定したエリート職（教員、国・県・市町村などの行政職員、医療専門職など）を得られそうかどうかが、唐突に水路付けられることになるのである。それぞれの希望の強さと方向はさまざまであったが、この時点で幸運にも当初からの第一希望の大学に進んだ例は、決して多くなかった。

例えば、教員を志して教育学部を目指していた井上めぐみや長谷川舞は、センター試験の結果が思うようにならなかったために、それまで視野の外にあった私立大学の外国語学部や法学部に進学した。県の農政関係の仕事に就くことを熱望し、それゆえに県内の地元国立大学を繰り返し受験した中川博喜の場合も、やはり最初の不本意進学を契機として、思いがけない流転を経験することになっている。難関国立大学を目指していた鈴木伊久美は、私立大学に進んで苦学の末、大阪で母親としての幸せを築き始めた。「何となく」広島の女子大に出た甲斐理英は、自分が本当にやりたいことを見つけ出すまで、少しの間、流出先の大都市に留まり、不安定な時期を過ごした。

その他の例では、県外の大学への流出は、具体的な将来の職業イメージを伴っておらず、ただ華やかな都会の大学生になるということだけを意味していた。高校卒業時のかれらに、都市の職業生活の実態

的なイメージが湧かなかったことには、それなりのわけがある。この地域からは、戦後一貫して相当な数の流出都市定住者が出ている。しかし、一八歳で県外の大学に流出して、故郷に戻らなかった人たちがいったい何を考え、実際にどういう生活をしているのか、親も教員も本人たちもよくは知らない。それは、この地方県の山間地域を守る人たちがみな、県内で人生を送ってきたか、県外に一旦出たことはあるが、地元に戻って職を確保し、家を継承した人たちだからである。ギリシャ神話に出てくるメドゥーサ神は、恐ろしい形相をしているといわれるが、姿を見た者を石に変えてしまうので、実際にその形相を知るものはだれもいないという。山間地域の若者たちを年々さらって行ってしまう都市社会を魔神にたとえるつもりはないのだが、都市に定住した人たちの姿を本当に知る者は、静かな奥出雲にはだれもいないのである。ここで見てきた俊英たちもまた、大衆教育社会の波に乗って勇んで進学し、故郷を出て行ったのだが、その先に待ち構える現実は知りようがなかったというわけである。

ある者たちは流出先について、ただ「都会」、「大っきいところ」というイメージをもつだけであった。あるいは受験の失敗から、学部学科という、アカデミック・トラック[2]上の自分の「拠り所」さえも置き忘れて、空っぽのまま流出してしまう者もいる。こうした状況が、かれらに険しい進路をもたらすこともあるが、逆にそのこだわりのなさから、劇的なまでに器用に、与えられたライフ・チャンスに適応できてしまうという例も少なくない。

自分の目標となる何かを見つけ、地に足の付いた将来イメージを形成するためには、四年間の大学生活は十分とは言わないにしても、短すぎはしない。事実、このクラスの三分の一は、この間に都市生活

の手がかりを見つけ、多くは大学卒業という学歴を頼りにして、名古屋、松江、岡山、あるいは八王子、大阪、広島、千葉と、故郷に繋留されることなく自力で泳ぎ、ときには流されながらも、自分の生活を続けている。高橋智義や塚本雅子は、サラリーマンやツアーコンダクターという都会の職業を漠然とイメージして流出したのだが、今は迷いなく大都会で大卒ホワイトカラー被雇用者（いわゆるサラリーマンやOL）として働いている。かれらは勤勉実直な労働力として、現代都市社会における信頼を勝ち得たのである。また長谷川舞のように、大学入試で苦戦をしながらも、最終的には分譲マンション販売という都会でしか考えられない職種を見つけて前向きに歩みだすケースもある。

アファーマティブ・アクションとしての公教育

すでに随所で触れたとおり、流入人口の少ない地方県が行政・福祉・医療・教育・産業のシステムを良好に維持していくためには、エリート予備層を県内で生産し、さらにその地元エリート層をできるだけ多く県内に引きとめなければならない。この状況は、地方県で生きる人たちにとって自明のなりゆきなのだが、全く意外なことに、小学校、中学校、高校、国公立大学という県内の教育現場では、そのことが表立っては語られることはなく、地方行政の政策としても言明されることは少ない。それはおそらく、「〇〇県は〇〇県出身者が動かしています」と積極的に言葉にすることが、その県に閉鎖的なイメージをもたらすと危惧されているからだろう。しかし、地方県内のホワイトカラー上層職が、広く開放しても県外出身者はだれも参入して来ない労働市場であるならば、そんな心配は端から無用である。筆

者はむしろ、地方県が命運をかけて水面下で取り組んでいる若年層人口の流量調整を積極的に言葉にして、「島根県は島根県が育てた人材が動かしています」というような表看板を前面に押し出すべきだと考えている。

調査データの分析の結果、若年層の人口流出を防ぎ、かれらを地方県に留める力学は、おおよそ次のような仕組みで作用していることがわかった。

県からの人材育成の働きかけは、県立高校の高進度学級への大きな教育投資による、県内におけるエリート予備層の確保と育成からすでに始まっている。また、本書では十分な検討ができなかったが、県内市部の数校の大規模進学校には、補習科という大学受験浪人のための専攻科が設けられている（第四章注1参照）。これは県内出身の難関大学受験浪人を、引き続き同様のカリキュラムのもとで一年間学習させる公立の予備校のような制度である。定員に制限があるため、やはりエリート予備層だけが、（制服を着たままで）この補習科で四年目の高校教育を受けることになる。

こうして県立普通高校は、一見すると若年エリート（予備）層の県外への流出を助長しているかと思われるほどまでに、県内各地で育った俊英たちに対して大きな教育投資をして、大学進学をバックアップする。そこには将来この県を担う「嫡出」の人材への期待が込められているのである。そして、日本全国の隅々まで広まった大衆教育社会の学歴観は、この若年層を高学歴取得へと容易に加熱し、「行けるのだったら都会の一流大学に」という高学校歴志向を促す。そして結果的に、成績上位層であるほど地方県からスピンアウトするという現象を加速させることになる。

島根方式のきめ細かい習熟度別クラス編成システムは、大都市圏ならば保護者に任せているはずの大学進学指導を県立高校主導で行ない、高校卒以下の学歴の地域残留層の保護者の子弟を、県内各地でくまなく掘り起こして加熱する。その結果として、仁多郡のような山間地域の大学進学率が、全国レベルにまで引き上げられる。

また山間離島の（エリート予備層）教育の実践のために、地方県島根は、過疎地の小中学校に、若くバイタリティのある二〇代の教員を赴任させる。さらに県内の各郡にくまなく小さな普通高校を設置・存続し、そこに進学指導の実績のある高校教員を赴任させ、習熟度別クラス編成のシステムを構築・維持する。同時に財政の豊かではない町村には、県の裁量下にある資金（その一部は国からの交付金である）をうまく投入して、立派な教育施設を次々に整備していく。このようにしてこの地方県の教育行政は、山間離島地域に対して特別に有利な条件を与えることで、過疎地の不利を克服しているのである。これはいわば地方行政からのアファーマティブ・アクション（温情的な措置）と見ることができる。こうした教育が目指す目的のひとつに、将来県を背負って立つエリート層の育成があることは疑いようがない。

もっとも、受験生としての力量は精一杯伸ばされるとしても、山間地域の高校生の現代社会に対する視野は、良くも悪くも限られたものである。だからこそ、周囲も本人たちも、高校卒業後に県内の国公立大学に進学するか、そうでなくても県外の大学に四年間だけ出て、その後に県内に戻って仕事を探すことを、暗黙の前提と考えがちになる。このようにして島根県では、県内出身エリート層を育て、県内に引きとめる力は、大学進学前からすでに作用し始めているのである。

県内周流の力学

地方県では、県内出身エリート層への第一の堰として、県内の高等教育機関への進学を促す力がはたらく。実際に、三年A組の地域移動の中核をなす類型は、山間地域を離れて県内市部の大学、短大、医療関係の専修学校などに進んだ県内周流型であった。

こうした県内志向が見られるのは、このクラスに限ったことではない。一九八〇～九〇年代、島根県内の県立普通高校ではほとんど例外なく、卒業生の最多の進学先大学は島根大学であり、最多の進学先短大は島根県立（女子、国際、看護）短大であった。これは、島根県内では細かな資料を挙げるまでもない常識なのだが、念のために実例を示しておこう。二〇〇〇年の実績を見るならば、市部の大規模校である県立松江南高校では、大学合格者のべ四五〇人中、二四人が島根大学に合格しておりトップである。ちなみに第二位の広島大学と広島修道大学は一三名であり、四位以下は一桁となる。横田高校の場合は、大学合格者のべ七二名中、島根大学には最多の五名が進学しており、二位は島根県立大学の三名である（横田高校の進学実績については、表3-1も参照のこと）。東部山間の小規模普通高校である県立飯南高校を見ても、一七名の大学進学者中三名が島根大学に進学しており、やはり進学先第一位である。

要するに、山間離島地域でも平野部でも、高校の規模にかかわらず、おそらく県内全域において、島根大学や島根県立の大学（あるいは短大）を凌駕する有力進学先はないのであり、この点において島根県内の地元（国公立）大学志向がはっきりと認められる。県立普通高校と地元（国公立）大学のこのような

関係は、他の地方県ではこれほどまではっきりしているわけではないとも聞く。どの大都市圏からも遠く、県土が広大で、私立大学が県内にないという特殊な条件下にある島根県における両者の関係は、地方県内の周流パターンの典型例といえるかもしれない。それは、あたかも特別な指定校枠のある提携関係であるかのようにさえ見える。[3]

さらに、同じくだれの意向ということでもない、大きな力学によるものなのだが、県庁などの県内の地方自治体行政職、保安職員、教諭などの教育職、医療専門職、電力・金融・大手製造業などの島根県内における新卒採用者数では、やはり島根大学が新規大卒入職者の最有力の出身大学である。実数は調べにくいが、その内訳は県内出身の島根大学卒業生で占められているものと予測される。反対に、県内から島根大学に進学した学生には、その後に県外に流出するという流れはほとんど想定されていないし、実際にその数も多くはないという。

島根大学が公開している資料に基づいて、この県内周流エリート層の流れの大きさを考えてみると次のようになる。島根大学の学生定員は現在一、一〇〇名強であり、一九九九（平成一一）年の卒業者の進路の内訳では、島根県内の企業、官公庁などへの就職者は、全体のうちの四一・八％であるという。この学年について遡って一九九五（平成七）年の入学者を見ると、県内の高校からの進学者は三六五名であった。地元の島根大学では、ほぼ三人に一人（三二・三％）が島根県出身学生ということになる。この数が多いのか少ないのかは議論の分かれるところだが、この県内出身学生が県外で初職に就くことがほとんどないと仮定すると、島根大学はこの年、県内周流層に数十名ほどの県外出身者を上乗せして、県

内労働市場に四五〇名弱の若年大卒エリートを送り出した計算になる。さらにここ数年は、入学者、就職者のうちに占める県内出身学生の比率（三〇％強）は、大きく変動していないという。

島根県立大学、島根県立女子短大、国立松江高専、島根県立看護短大などの規模の小さい高等教育機関の役割もこれに準じたものである。もはや言うまでもないことだが、これらに比肩しうるほど多くの若年エリート層を島根県内に供給している高等教育機関は、これらの他にはない。

こうして、この地方県では、県内出身者が地元（国公立）大学・短大に進学して、県内に就職するというメイン・ストリームが、実体を伴ったイメージとして存在することになる。都道府県という地方行政単位の成立と、公教育の学制の成立はほぼ同時期であり、双方ともに一〇〇年の不動の歴史をもつ。この間に、学歴主義の時流に乗った高等教育進学と、地方県という小さい範囲でのエリート周流の共鳴関係が成立したのであるが、このことの詳細は他書（天野郁夫　一九九二、竹内洋　一九九九）に譲ることにしよう。ともかくこの県内の人の流れの存在ゆえに、山間地域から県内市部への進学流出者においては、いずれ県内で職を得ることになるという経路が、高校卒業時から想定されることになる。そしてまた親や教員の側でも、高校卒業時に県内に進学した場合は、「この子はこれで県内に残った」という理解がなされるのである。

都市流出層を引き戻す力

地方県は、一度県外の大学に流出した県内出身エリート層に対して、次には新卒就職の機会に出身県

への引き戻しの力を加えていく。それは、学費を負担した両親が子どもを呼び戻すというようなミクロな（個人レベルの）出来事なのではなく、地域システムがかれらを求めているという意味においてである。もっとも、県外流出若年層をよく見極めてみると、進学先を決める時点からすでに、農学部、教育学部、教職免許取得の可能な英語専攻というような、県内に戻って職を得ることが容易な学部に的を絞っているケースも多くある。反対に、新設の学際研究の学部や非英語圏の語学専攻あるいは国際関係学部などは、その特長を県内就職に活かす可能性が低いという理由で、もとより選ばれることが少ない。こうした「保守的」な選択をする若者たちについてはやはり、大学四年間は県を離れても、いずれは戻って来るというトラック（経路）が、暗黙裡にイメージされていることになる。

また都会の大学生になっても、大都市圏で生まれ育った若者たちとは違って、かれらは自宅の両親のもとにパラサイトして生活コストを節約したり、のんびりと天職を探したりするわけにはいかない。この生年世代の大卒ホワイトカラー職への初職就業は、周知のとおり、超氷河期と評される時期にあった。それゆえに大都市では、全国各地からの流入学生がせめぎ合うことによって、厳しい競争が生じており、大都市に留まったとしてもホワイトカラーの新卒採用枠が有利に確保できる状況にはなかった。そのうえかれらには言葉や慣習などの文化の違いもある。これらはいずれも地方出身者だけにかかってくる大都市からのプッシュ要因であり、都市流入高学歴層を、故郷に押し返す力として作用する。

こうして県外の大学への流出進学者たちは、ある者は高校のときからの自分のライフコース・イメージに従って、またある者は都市から押し返され、あるいは大きな学資を負担してくれた親との約束を守

るために、あるいは自分のなかの望郷の念やあととり意識に引き戻されて、自分が正当に「嫡出」した地方県に戻ってくる。

なお、三年A組の場合、大学卒業後に大学院修士課程に進学した者が、把握しているだけで六名いた。このうちの女子の四名は、大学院修士課程修了までに、島根県の教員採用試験を受けて合格し、専修免許をもった教諭となったことがわかっている。この場合、大学院修士課程は、必ずしも専門的な学問の修得だけを一途に目指して進んだ道ではなく、県内に戻って就職する（できる）までの猶予（モラトリアム）期間を、うまく調整するために使われていると見ることができる。第五章で見た古池建亮は少し違う例ではあるが、司法浪人のための在籍という正当な名目を確保して、島根県職員になるまでの合計六年間を首都圏の大学で過ごしている。

そして言うまでもなく、島根県という地域システムは、県外の流出先で未だ根を張っていない二〇代前半のエリート層をうまく取り込んで、県内エリートの総数を増やすことにたいへん意欲的である。それゆえに中央大学を卒業したこと、広島大学の大学院に行ったことなどは、いずれも県内就職に有利にはたらくことはあっても、決して不利にはならない。

トラッキング理論

学歴社会を論じていくうえでのひとつのキー・ワードとして、トラッキング（あえて日本語にするなら経路化となる）という考え方がある。これは大学進学か高卒就職かというような異なる進路に導く道筋の、

経路分化を意味する言葉である。トラッキング理論の主たる論点は、学齢期の早い段階から、子どもたちは定型のトラック（道筋）に従って進路を決めていくが、一旦あるトラックに入ると容易に進路が変更できないということである。例えば、いわゆる底辺校に進学すれば、大学進学は難しいし、中高一貫教育の名門私立高校からは、大学進学は容易にできても、資格の必要な工業系の製造業への就職は難しいというような実態がこれにあたる。世間一般に「エスカレーター式」、「純粋培養」などと言われたりする学校教育のシステムは、専門的にはこのトラッキングという言葉で論じられていると考えてもよい。

現代日本においては、初等・中等教育（中学校、高校）において、成績上位者には大学進学のための進学校のカリキュラムが設定され、職業高校などでは高卒就職のためのカリキュラムが設定されている。そして、その質的差異が明確で、一旦決まると別のトラックには移動することが難しく、そのことによって早くから進路が強制されるという実態が、学業に関するトラッキング（アカデミック・トラック）として指摘されてきた。

こうしたアカデミック・トラックには、学校内での格差を論じるものと学校間の格差を論じるものがある。もともとトラッキングという考え方は、アメリカではハイスクール内部での進路の分化を説明するものであった。しかし日本ではむしろ、アカデミック・トラックの分化が学校ごとになされるケースが注目される。これは要するに、高校入試時のいわゆる「輪切り」の状況（専門的には学校トラッキングという）のことである。この学校トラックがその後の入れ替えが困難な（排他的な）トラックであるとすれ

ば、高校入学時の進路分化が、その後の人生の経路を強く決定付けてしまうことになる。そうした閉鎖的な状況がある場合、トラッキングに基づいた予期的な社会化がなされ、下位のトラックにいる生徒たちの学校適応は阻害され、底辺校において脱学校文化をもつという事態が生じる場合もある（樋田大二郎・耳塚寛明・岩木秀夫・苅谷剛彦編著　二〇〇〇、尾嶋史章編著　前掲書）[4]。

さらに教育社会学の分野では近年、このトラッキングの概念を拡張する興味深い試みがなされている。トラッキングとは従来、人材の優劣を見極め、最適に配分するという学校の機能について論じるものであった。これをメリトクラティックな（学歴主義的な）配分原理という。中西祐子（一九九八）は、このトラッキング概念を敷衍し、ノン・メリトクラティックな（学歴主義とは別の）進路分化の次元についても検討している。彼女は実証研究のデータを整理する際のキー・ワードとして、従来のアカデミック・トラックを補完する、ジェンダー・トラックという進路分化を指摘した。これは、女子の進路決定に及ぼされている特有の影響力を整理して論じるためのものである。中西によれば、女子高校、女子大学などの女子教育の機関について、それぞれの学校文化の差異によって、例えば良妻賢母を目指す教育を実践する学校か、男子と競合する総合職へと生徒を導く教育をする学校かなどの基準で、分類を施すことができるのだという。そしてこの学校間の差異が、ジェンダー・トラックという経路化プロセスとなり、アカデミック・トラックとは別の、進路分化の役割を担う可能性があるというのである。ジェンダー・トラックがアカデミック・トラックと一対一で対比されうるほどの対抗的影響力をもっているかどうかについては疑問が残るものの、ノン・メリトクラティックな進路分化という視点を導入したことの意義

は大きい。

これとは別に、藤田英典（一九九〇）はトラッキングの概念を、学校教育による方向付け、枠付けから、学校教育以前の出身階層や、高等教育への進学、初職就業から現職に至る社会的地位達成過程にまで拡張し、社会的・教育的トラッキングという用い方をしている。藤田の定義に従えば「人がライフヒストリーにおいて辿る地位の連鎖」にトラッキングの概念を用いたものが、社会的・教育的トラッキングである。

このように、当初、初等・中等教育における高学歴取得の道筋の閉鎖性について論じる概念であったトラッキングは、学歴・学校歴のレベルの高低とは別次元の力学であるジェンダー・トラック、過去と将来という時間軸を含んだライフコース全体について扱う社会的・教育的トラッキングという広い視座を獲得し始めている。このようなトラッキング概念の拡大によって、大学などの高等教育への進学の意思決定にかかる多様な圧力が、整理して示されるようになりつつある。

ローカル・トラック

本書では、若者たちの進路選択について最終的に整理しようとするとき、ノン・メリトクラティックな、つまり進学先の難易度や学校歴の威信のレベルとは関係のない進路分化に注目することが、はなはだ重要なポイントとなる。

筆者は本書を通じて、現代日本の地方県においてアカデミック・トラックを補完している、異なる次

元の水路付けに注目してきたのである。今ここで、それをトラッキング理論の枠組みに乗せて、ローカル・トラックと呼ぶことにしよう。

ローカル・トラックとは、それぞれの地方の出身者が、アカデミックな進路選択とは別次元のものとして、自らの地域移動について選択していく進路の流れである。大都市には大都市のローカル・トラックがあり、地方にはそれぞれの固有のローカル・トラックがある。しかし、トラックの排他性について論じるとすれば、参入・退出の自由な大都市圏ではなく、不可逆的な人口流出の実態のある地方のトラッキングがより重要な論点となる。これはちょうど、男子のジェンダー・トラックが論点とされない一方、女子高、女子短大、女子大、女子労働市場という女子のトラックが重要な論点となるのと同じ仕組みである。

本書においては、ローカル・トラックの本流となっていたのは、県内郡部の高校で、「嫡出」エリートとして育てられ、県内のエリート職にまっすぐ向かう筋道の高等教育を県内で受け、実際に県内職を移動していく人材になるという経路、すなわち県内周流型である。

この類型の若者たちは、大学入試の難易度ランク一辺倒の単純な判断ではなく、例えば県内の地元国公立大学に進学し、そのまま県内で初職に就くという地域移動のコース優先の判断で進路を決めていった集団である。高校三年時から、将来は県内に就職しようという意思がはっきりしている場合、県の行政職員、警察や消防などの保安関係の職員、市役所や町村役場職員、教員、保母、医師、看護婦、保健婦、助産婦、作業療法士、レントゲン技師などの県内の高学歴労働市場への参入を前提として、目前の

進学先が決められる。そのため地元大学の教育学部、または高校教員として科目担当をしやすい歴史・数学・物理・化学・生物学などの専攻、あるいは医療技術短大を進学先に選択したケースでは、高校卒業時にすでに島根県内のローカル・トラックの本流に引き込まれていると見ることができるのである。

県内のローカル・トラック上にある地元国公立大学などでは、県内エリートを目指して同じように県内各地から進学してきた者たちが合流し、第七章で確認したように、共通の意識変容の圧力のもとで、島根県人らしさをさらに強めていく。それはまた、県内の医療専門職養成機関について堀真里江が、「むちゃくちゃ郷土愛が湧く教育っていうか、何かすごい、いい意味で島根を引き出して見せてもらった、みたいな感じで、いやなんか、島根を捨てちゃいかんかなあという気になってきて」と語っていることからも読み取れる。かれらはこうして、県内周流のための心的準備状態をさらに確かなものとして、最終学年では、県内での就職活動や採用試験を目指していくことになる。そしてうまく採用されれば、どこの職場でも、話の通じやすい県内出身者がかれらを「内部進学」のエリートとして迎えてくれる。

他方、県外に流出して四年間の大学生活を過ごし、卒業と同時に県内に戻る経路を取るJターン型についても、全国で通用する一流大学の学校歴を得ながらも、県外の労働市場には目を向けず、県内周流の経路に戻ってくるという、ノン・メリトクラティックな意思決定を指摘できる。こうした地域移動類型については、大学卒業後の県内就職を決めた時点で、県内周流のローカル・トラックに吸収されたと見ることができる。

この地方県における県内周流のローカル・トラックは、単に地元の中高等教育機関（高校・大学など）

に見られる力学ではなく、両親の学歴観や子どもの職業への期待、初等教育、県内労働市場の開かれ方など、地方県の社会・文化全般に関わる大きな流れである。その点で地方県のローカル・トラックは社会的地位達成過程やライフコース全体を覆う、社会的・教育的トラッキングでもある。

県内周流のローカル・トラックについてさらにわかりやすく示すために、ジェンダー・トラックと対比させて考えてみよう。

女子が進学・就職というライフコースを考える場合、一部の女子高には良妻賢母を育てる学校文化があり、生徒たちはそのジェンダー文化の影響を受け予期的に社会化されていく。そしてその先に進めば、女子短大や女子大という女子のみに限定された進路がある。さらに労働市場では、看護婦、保母などの男子と競合することの少ない女子適職や、（表立っては言われないが）一般職と呼ばれる女子向けの採用枠がある。女性たちは、男性と同じ労働市場のアリーナに出て対等に戦うこともできるのだが、初めから女子大や女子短大を経て、女子適職へという道を進めば、男性とは終始戦わなくて済む。もちろんその代償としてそうした女性たちは、昇進や雇用条件については不利なところに封じ込められる。さらに、出産育児などを機に職歴を中断し専業主婦になる道筋も、女性たちを誘引する水路となっている。女子は高校生のときから、これらの力学に意識的に抗って進まなければ、男子と競合する共学校、男子と競合する総合職・キャリア職、医師、法曹関係などの資格職、建築士、設計技師などの技術職を得るトラックに留まり続けることが容易ではないのである。

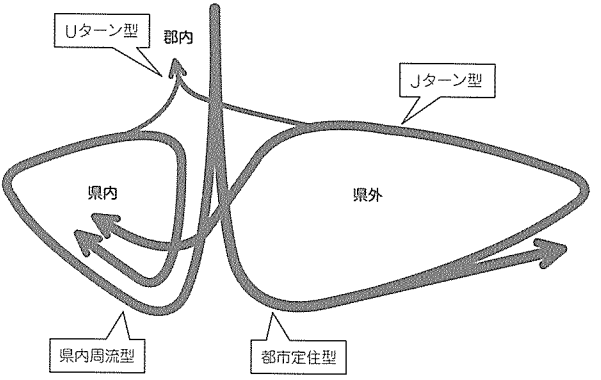
一方、ローカル・トラックにおいてはこの女子のライフコースの流れに対応するのは、県立高校の習

熟度別クラス編成で育てられた県内エリート予備層である。かれらは県内に「正嫡」しているがゆえに、県内に留まっているかぎりは、ちょうど女子が女子大に進んだ場合と同様に、厳しい競争にはさらされないで済む。逆に都会に出れば、地方出身者のデメリットを克服して、スタートラインから有利な大都市出身者と競合し、競り勝ち続けなければならない。P・ブルデューは、パリ出身の大学生と地方出身の大学生の文化的な資質の差異を、フランスにおける階級差として著書の随所で論じている。彼は、地方出身者は中央の文化に対する近接性が少なく、それゆえに、都会での競争では不利な条件におかれており、階級的には下位にあるという前提で議論を進める（P・ブルデュー、J=C・パスロン、訳　一九九一）。地方のはえぬきの優等生として、国立大学を受験する準備だけを進めてきた鈴木伊久美や塚本雅子が、大都会に出て抱いた「街の子は頭がいい。あんまり勉強しなくてもいい成績を取る」という印象や、「大学入ると、同じ語学好きでも、できる人とできない人の差が、自分でもわかるじゃないですか。あの人は英語ができるけど私は全然できないというのが……中略……五教科だったら負けないけど英語に絞られると駄目ですね」というギャップが、おそらくこれにあたる。

しかし、自分が「嫡出」した県内で周流しているかぎりは、あるいはそこに戻って合流しさえすれば、文化的なバックグラウンドや経済的な環境の違いのある、都会での、不利な競争を避けることができる。地方出身者で、最終的にこの県内の流れに戻っていく者たちについては、ブルデューのいう意味での再生産が確かに成立していると見ることができるのである。

また県内の高等教育機関に留まった者たちは、ちょうど女子大や女子短大を卒業した女性たちが、男

図8-1　島根モデルのローカル・トラック



子と競合するアリーナを選ばないのと同様の論理で、就職にあたって、あえて県外に出ることは少ないのである。それとは対照的に、共学の一流大学を出た女性が、新卒採用時に総合職ではなく女子採用枠を目指し、男子ではなく、女子大や短大卒の女子と競合しようとする例と同様に、県外流出者の一部は、都会の大企業への採用の厳しい競争を避け、より有利に就職戦線を展開できる県内のアリーナに戻って参入し、県内周流者たちと採用枠を競おうとする。そして、いわゆる「一般職」の女性がキャリア職への道を閉ざされがちであるのと同じように、県内就職することによって全国水準での成功の可能性は、犠牲にされるというわけである。

県内周流の力学とローカル・トラック

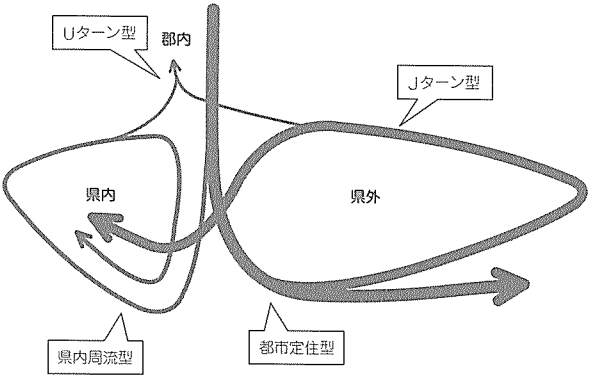
図8-1は本書が扱ってきた、地方の山間地域からの若年エリート層流出の流れを図示したものである。若年エリート層は一八歳で一様に郡内から進学流出していく。その

流出先は、県内と県外である。県外流出者の一部はそのまま都市定住層となる。三年A組では全体のほぼ三分の一がこの都市定住の流れに従っている。しかし図中左のサークルが表すとおり、県内には県内周流の進学・就職のトラックがあり、やがて、県外流出層の一部がJターンしてこの県内のトラックに加わってくる。しかしこの若年エリート層の大きな流れから、産業に乏しい郡内まで再び遡ってくるUターン型の若者は、実態として多くはない。

これは一九九〇年代の島根県のローカル・トラックのモデルである。ここには、県内で若年エリート層を周流させようとする、閉じた力学がはたらいている。しかし同時に都会の魅力や加熱された高学歴への想いが、微妙な均衡を保ちながら、若年エリート層の一方的な流出や、県内での閉鎖という状況に至るのを防いでいることも見逃せない。その結果、三年A組の場合は、都市定住、Jターン、県内周流の三つの流れは同じような大きさであった。容易に想像できるように、このモデルにおいて、関与する主体、つまり両親、県立高校、県内高等教育機関、県内労働市場のいずれかが、少しでも力のはたらき方を変えたり、現代社会全体を覆う大衆教育社会の価値観が変貌したりすれば、この流れは簡単に変化してしまう。

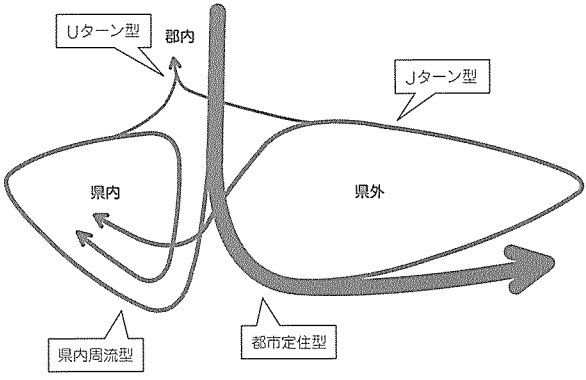
例えば、図8-2は、若年エリート層の県内周流の流れを守ってきた、県内高等教育機関と県立高校の緊密な関係が変わり、高校卒業者を県内に堰き止める力が弱まった場合のモデルである。この状況下では若年エリート層はこぞって県外に流出し、Jターンが県内のエリート層の形成パターンの主流となる。言い換えれば、県内労働市場で、県内の大学・短大・専修学校の出身者よりも、県外で高等教育を

図8-2　都市依存モデルのローカル・トラック



受けた若年エリート層が優遇され、県外大都市に出て（一流）大学卒の学歴を取得して、初めて県内でも認められると公言されるような状況である。このモデルのローカル・トラックの流れを確認してみよう。ここでは高校卒業後に若年エリート層の大半が県外の都会に出て、そのうちの一部が県内に再び戻ってくる。県内で高等教育を受ける流れは主流ではなくなって、おそらく県内には一八歳から二〇代前半のエリート予備層の人口が少なくなるだろう。他方で若者たち自身はもちろん、県知事、県行政エリート、教員、県内企業の採用担当者そして両親まで、大都市圏での最低四年間の大学生活を、県内エリートとなるための有力な条件と見る。これはあくまで、島根モデルから力のはたらき方を変えてみたモデル図にすぎないのだが、長野県、静岡県、福島県、山梨県、群馬県など、不幸にも首都圏にアクセスしやすく、県内に地方文化の核となる中心地をもたない地域では、（ここまで戯画的ではないにしても）ここに至る変化の兆候は見られるのではないだろうか。県内周流の

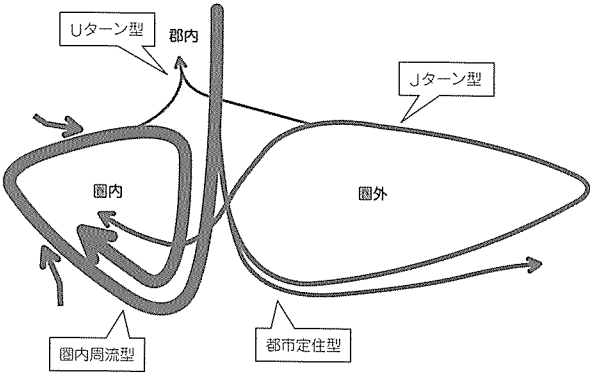
図8-3　過疎流出モデルのローカル・トラック



ローカル・トラックをもつ島根県ではなく、この大学教育のアウトソーシング（外部委託）の流れに至った地方県が、いずれも「教育県」を標榜していることは、筆者には気にかかる事実である。

力の加わり方を、さらに少し変えてみよう。図8-3は、この流れからとうとう県内就職までもが魅力を失ってしまった過疎流出モデルである。この状況下では、県外流出した若年エリート層がもはや戻っては来ないという、一方的な人口流出が現出することが考えられる。大都市圏から遠い島根県などの場合、ひとたび現下の流量調整システムが均衡を失うと、この状況まで一気に至ってしまう可能性は少なくないように思われる。若年エリート層にとっての大都市の魅力は否定しようがない。現実的な問題としては、かれらにとって地元県に留まることがどれほど確かなステップとなるかという点にかかってくる。このような過疎流出モデルに至る危険性を考えるとき、県立高校、地方国公立大学、地元労働市場によって形作られている県内周流の

図8-4　大規模圏モデルのローカル・トラック



ローカル・トラックの本流を維持している力学が、島根県のような地方県の生命線となっていることがわかるのである。

図8-4も理念モデルであるが、ここでは県内というよりも、より広くその地方の圏内の周流の流れが強く、そこには周辺他県からも流入があり、その地域が活性化している状況である。これも、あくまで理念上のモデルにすぎないが、早くから旧制高校や高等師範学校が県内に設置されていた北陸地方の石川県、中四国地方の広島県、あるいは北海道における札幌市などでは、力の及ぶ圏域の広い、大規模圏モデルのローカル・トラックが成立している。

ローカル・トラックはそれぞれの地域環境と歴史に根ざしているので、容易には動かしがたい大きく力強い流れである。ゆえに、現在、人口一五万人の松江市が政令指定都市に発展するか、さもなければ、つくば市やアメリカのノースカロライナ州チャペルヒル周辺（リサーチ・トライアングル・パークと呼ばれる、有力大学と大企業の集中地域）のような

学研都市にでもならないかぎりは、島根県内のローカル・トラックをこのようなモデルに発展させるのは現実的ではないように思う。

そして、これよりさらに大きなローカル・トラックのケースは、北九州地域、仙台、名古屋、近畿などの大都市圏と首都圏の、地方とは全く別の大都市圏特有の力学がはたらく磁場のモデルということになる。

大衆教育社会とローカル・トラック

最後に、現代日本社会全体とローカル・トラックの関係を論じて本書のしめくくりとしたい。一九九〇年代の中頃だっただろうか、あるテレビのニュース番組で、仁多郡について、地方行政における収支で、国庫からの補助金の占める比率が全国一高いことが報道されたことがある（現在でも、例えば横田町の平成一一年度の年間収支で、国からの補助金は約五割、県からの補助金はほぼ一割、合計で町の歳入の六〇％以上を占めている）。しかし、それを単なるばらまき行政と見るのは、都市社会の側からの一方的な視点であって、筆者から見ると少しばかり不当な決め付けのように思われる。なぜならば、大衆教育社会日本にあって、この地域には国立大学も県立大学もなく、若者たちはとにかく家郷を出て行かなければ大学教育を受けることができない状況にあるからである。

それゆえに、本書で示してきたとおりこの地域は、まさに郡内選りすぐりのエリート青年層を都市地域に「供出」し、高校卒の地元就職層だけを残す歴史を繰り返してきた。その見返りとは認識されてい

ないが、その一方で地方行政は過疎地ゆえに国や県からの補助金を受け、県主導の公教育の多大な恩恵を受け、県立横田高校は再びこの地域の子弟からエリート予備層を掘り起こし続ける。この取り引きの構造を考えるならば、大都会で得た税収入をこの地方の教育・文化の振興に充当することには、ある種の理屈が成立するように思えるのである。とはいえ無垢な地元行政は、地元を離れていった若年層の損失の大きさには無頓着で、公共事業で建設業などの当座の雇用を確保することを急務とし、一方では都会からのIターンと呼ばれる流入人口に期待を寄せたりしている。だが、この山間地域のマクロな人口の出入りについて見ると、あたかも若年エリート層の「身売り」をして、その代償として国や県からの補助金を得ているような奇妙な収支の帳尻合わせが、当人たちの知らぬ間に成立している。この原動力になっているのが、県内の不可逆的な人口移動の流れと、大衆教育社会の学歴観であることを、本書は随所で実証してきた。

一九九九（平成一一）年に出された島根県の県立学校再編成基本計画は、「県立学校が地域文化の拠点の一つであったり、生徒等の存在が地域の活力を引き出したりしている場合も多く、広範な中山間地域を有する本県の特性を考慮し、基本計画のとりまとめにあたっては、県としての中山間地域振興施策との整合性についても十分配慮するよう努めた」としており、「今後の生徒減少期を単なる学校規模の縮小で終わるのではなく、二一世紀に向けた魅力と活力ある県立高校づくりの好機と捉え、学校教育全般における改革を推進していくことが重要である」と述べている。この計画に示されているとおり、少子高齢化時代の今こそ、地方からのエリート層流出について、その流れの方向と強さを真摯に考え、制御

するときのように思われる。

仁多郡内を貫いて出雲市、松江市を経て日本海に流れる斐伊川水系は、いにしえより、人の手による治水事業により度重ねてその流れを変えてきた。杵築（きづき）の大宮（現在の出雲大社）が初めて造営された飛鳥時代には、斐伊川は今の出雲市の西方の日本海に直接流れ出ていたという。その後、今の簸川（ひかわ）平野の部分が次第に土砂で埋まり、島根半島と地続きになり、やがて江戸初期には斐伊川主流は、正反対の東方の宍道湖、中海へ向かって流れ出るようになった。これには奥出雲地域において、砂岩の山腹を大量に切り崩して斐伊川に流し砂鉄を採集した（鉄穴（かんな）流しという）ことが影響しているといわれる。これによって下流部には大量の砂が流れ出て堆積したのである。その後さらに灌漑用水と水運を確保するために切り通しや運河を作ってあらためて西（高瀬川）と北（佐陀川）への分流を作った。近代以降では松江市などの下流地域の洪水対策のために神戸（かんど）川からの西への放流量を増やし、さらに全国的に有名になった中海干拓、淡水化事業の着工と中止という紆余曲折の歴史を経ている。この水系は自然の流れをたゆまず続けているように見えて、じつは度重ねて、人為的な流水操作が行なわれてきているのである。

治水は国家百年の大計と言われるが、学校教育政策も似たようなところがあると思う。地元建設業の当座の活性化を考えて推進した大規模プロジェクトが、生態系や環境の変化という後々まで残る問題を生じていることは、すでに全国各地で指摘されて久しい。

同じように、現下の教育をどう改善するかという問題もやはり、単に今の小・中学校の教室のなかの今日、明日をしのいでいくことだけでは済まない。なぜならば、その子どもたちが成人式を終えて、日

本社会の人口の一角を構成し続ける六〇年間は、この初等（中等）教育の痕跡は継続し続けるからである。ところが小・中学校の教育制度については、今の教室での現状という極めて近視眼的な問題提起で、変革の必要性が指摘されることがあまりにも多い。国家レベルの教育改革の実際の成否は、厳格な指導を受けずに個性だけを伸ばされた子どもたちが、どういう大人になるか、例えば、小・中学校の全校集会で話を聞く訓練を十分に受けなかった子が、成人式で何をするかを見極めて、ようやくわかるのである。

河川改修も教育改革も、大きな流れを維持しつつ破綻することなく導く政策であり、現状把握と長期的な視座が不可欠となるはずである。それゆえに教育改革を教育者と教育現場の視点だけに従って実施することは、計画性のない公共工事を、不十分なアセスメントに従って実施するのと同じような愚行となる危険性を孕んでいるように見えてならない。

学校教育を取りまく深刻な状況は、国政レベルで考えられている問題に限ったものではない。それぞれの水系に固有の治水事業があるように、それぞれの地方県に固有の教育政策と人口流出対策があるはずである。ダムや干拓事業や水門・堰などの生態系への影響を考えるときと同じような深刻さで、若年層の県外流出を取りまく「環境問題」のアセスメントを実施しなければ、たいへんなことになりそうな地方県は、全国各地にいくつもあるのではないだろうか？

島根県の若年層の教育は、先に例示した斐伊川の流れと同じように、その大きな力学に従いつつ、慎重に流量調整をしていかなければならない。地方県のローカル・トラックを、図8-1～図8-4の段階

的なモデルのうちのどれに導いていくかを、地方行政と教育機関が百年の大計として主体的に決めていくことは、重要なことのように思われる。地方からの人口流出が「洪水」「渇水」になったり、教育政策が「事業中止」になったりするのを未然に防ぐためには、現状で流れがどこにあるかを知って、その主流を受け流す工夫をすることが重要な課題となる。戦後日本社会への若年エリート層の流出は、過疎化、少子化、国の高等教育政策、各県の教育政策、大衆教育社会の社会意識などの多くのダイナミズムのガラスの均衡のもとで、かろうじて流れを保ってきたように筆者には見える。

奥出雲からの若年エリート層流出は、この微妙な均衡のなかで、今日もまた滔々と進行しているのである。

1　若年層に関して流入人口があるとすれば、県内の（国立）大学にはるばる他府県から進学してきて、しかもそのまま島根県内に初職を求めるというパターンであるが、この少数の例は本書の視野の外にある。

2　本章のトラッキング理論の項（二一九頁）参照。

3　島根県内唯一の総合大学である島根大学は、「全国区」の国立大学であるが、同時に地元密着の地方大学である。この事実は本書の視座からは疑いようがない。第二章で見たように、島根県立の横田高校は、仁多郡という校区と浮沈を共にしており、それゆえに校区内の町立中学校と親密な関係を築いている。これと同様に島根大学も、県内周流のローカル・トラックの存在を通じて、島根県の産業や、出生率、県立高校からの大学進学の実績と運命を共にする状況にあるように見える。

4　ただし本書で注目してきた横田高校の場合に限っては、トラッキングは学校内での習熟度別学級編成によって形成されており、むしろアメリカでのオリジナルの議論に近い状況にあった。

あとがき

筆者の友人に面白い話をするのが好きな人がいる。京都生まれ、京都育ちの研究医である。彼の知人に島根県出身のお医者さんがおられるらしく、筆者が島根県出身者であるということを知って、その先生の話を出して、彼はあるとき次のようなことを言い出した。

「なんでも島根県には県人にしか話したらあかん秘密の話があるらしいですね。それがどういう内容なんかは、島根県人しか知らへんのでしょ。ほんで他府県の人たちには絶対に漏らしたらあかん。でも島根県の人ならだれでもその話を知ってはる。僕はそう聞いたんですけど、それ本当ですか？　ほんで、どんな話なんですか？　僕にだけ、こっそり教えて下さいよ」

筆者は、笑いをかみ殺しながら「そうですか。それは、まあ本当です。でもそう簡単には言えないんですよ」と答えておいた。もちろん口から出まかせである。それをわかったうえで「やっぱりあなたも、そう言わはりますか」と微笑みながら彼は首をかしげた。

その夜、彼の問いを何気なく思い返して、いろいろなことが頭を巡った。地方出身者には、最近でこ

そ少なくなってきたが、県人会や、高校の同窓会の関西支部や東京支部のような組織があったりする。そういうところに顔を出さない人たちでも、同じ〇〇県出身と聞けば、同郷の者としての帰属感のようなものが湧いてくる。そしてやがて「〇〇町の〇〇さんって、ひょっとして知り合いじゃないですか？」「えっ？　奇遇ですね」などと人間関係（ウィーク・タイ）を結びつけ、お互いを引き寄せあう行動を始めてしまう。地方からの都市流出者の奥ゆかしくも込み入った心情は、生まれてからずっと都会で育ってきた人にとっては、理解しがたいものに感じるだろう。

この友人が関西圏で出会う地方出身者の多くは流出エリート層であろう。都会育ちの彼がそんな人たちについて、どことなく内に秘めた「神秘性」のような難解さを感じるとすれば、それはわからないでもない。もっとも当人たちにしてみれば、「街の人」の勢いに押され、わが故郷特有の仕組みやならわしを、うまく説明できないだけなのかもしれない。

それにしても、島根県人が当たり前のように知っていて、他府県には漏れてこないこと、とは本当は何だったのだろうか？

筆者は、この現代の「出雲神話」に光を当ててみたくなった。心当たりは全くないというわけでもなかった。しかし、確かにそれは、他府県の人に説明して誤解なくリアリティが伝わることではないので、この作業にはある程度の紙幅を必要とする。本書の執筆意欲はこうして芽生えてきたのだった。もっとも、書き進めてみて、これは島根県に特有の「秘密の話」や「神話」ではなく、地方県が共通にもつ課題であるようにも思えてきた。この点については全国の読者の判断を待ちたい。

社会学の醍醐味は、だれもが当然と感じている日常から、潜在的な構造を描き出すことであると筆者は考える。世の中には、語られて初めて姿をあらわす実態があるのではないかと常々学生にも言っている。

本書では、奥出雲から日本海に流れ出る斐伊川について重ねて言及したが、最後にこの流れの話をもうひとつだけしよう。この水系は下流域で宍道湖、中海、境水道などと形態と呼称をめまぐるしく変える。宍道湖と中海の間の筆者の生まれ育った地域では、大橋川という奇妙な名前になる。大橋川のどこが奇妙かというと、これが橋にちなんだ命名の川であるということである。二つの大湖を結ぶこの大きな流れには、近世になって松江大橋ができるまでは呼び名がなかったのだろうか？　と不思議になる。おそらく、城下ができて橋が架けられたことによって、ここが湖でも湿地帯でもなく、大きな川だということが人々に了解されたのだろう。

とかく例示と比較が好きな筆者が最後に出した喩え話は、難解な謎解きのようになってしまった。口はばったいことだが、筆者はこう願っているのである。地方県の出身者はだれでも、本書で論じたローカル・トラックの大きな眼前の流れの存在を、自然のこととして眺め、体験してきた。しかし、これをうまく整理して説明する言葉をもたなかった。言葉にならない流出の実態は、外部から見ればまさに「秘密の話」そのものである。本書という構造物によって、この巨大な流れに新たな名前と再認識の機会を与えることができれば……。

本書執筆に際しては、多くの方にお力添えいただいた。何といっても調査対象者の方々、フィールドワークに協力してくださった島根県の教育関係者の方々には、情報提供についてたいへん感謝している。また、データの分析に知恵と労力を貸してくれた静岡大学と大阪大学の学生の皆さんの尽力にも感謝している。これらの方のお名前をここに挙げきれないことは残念である。そして、せっかちな筆者の執筆ペースに合わせて、編集を着実に進めてくださった世界思想社の中川大一さん、上質な校正でサポートしてくださった山崎優さんと俣野容子さんにも厚く御礼を申し上げる。

最後になったが、本書はやはり父なるわが故郷に捧げることにしよう。

二〇〇一年六月

吉川　徹

轟亮　2000,「反権威主義的態度の高まりは何をもたらすのか」海野道郎編『日本の階層システム2　公平感と政治意識』,東京大学出版会,195-216。
粒来香　2000,「近代都市東京の形成」原純輔編『日本の階層システム1　近代化と社会階層』,東京大学出版会,89-108。
W・F・ホワイト　2000,『ストリート・コーナー・ソサエティ』奥田道大・有里典三訳,有斐閣。William F. Whyte, 1993=1952 *Street Corner Society: the social structure of an Italian slum*, University of Chicago Press.
P・ウィリス　1985,『ハマータウンの野郎ども:学校への反抗・労働への順応』,熊沢誠・山田潤訳,筑摩書房。Paul E. Willis, 1977 *Learning to Labour: how working class kids get working class jobs*, Gower.
山田昌弘　1999,『パラサイト・シングルの時代』,筑摩書房。

中央公論社。
吉川徹　1998,『階層・教育と社会意識の形成：社会意識論の磁界』，ミネルヴァ書房。
吉川徹・轟亮　1996,「学校教育と戦後日本の社会意識の民主化」『教育社会学研究』58集，87-101。
E・リーボウ　2001,『タリーズ コーナー：黒人下層階級のエスノグラフィ』，吉川徹監訳，東信堂。Elliot Liebow, 1967 *Tally's Corner : a study of Negro streetcorner men*, Little, Brown.
宮台真司　1994,『制服少女たちの選択』，講談社。
中西祐子　1998,『ジェンダー・トラック：青年期女性の進路形成と教育組織の社会学』，東洋館出版社。
中野正大編　2001,『シカゴ学派の総合的研究』，科学研究費補助金研究成果報告書，研究代表者：中野正大，京都工芸繊維大学。
中村牧子　1999,『人の移動と近代化：「日本社会」を読み換える』，有信堂高文社。
直井優　1987,「仕事と人間の相互作用」三隅二不二編著『働くことの意味』，有斐閣，101-143。
尾嶋史章編著　2001,『現代高校生の計量社会学：進路・生活・世代』，ミネルヴァ書房。
尾嶋史章・近藤博之　2000,「教育達成のジェンダー構造」盛山和夫編『日本の階層システム4　ジェンダー・市場・家族』，東京大学出版会，27-46。
大村英昭編　2000,『臨床社会学を学ぶ人のために』，世界思想社。
大村英昭・野口裕二編　2000,『臨床社会学のすすめ』，有斐閣。
佐藤郁哉　1984,『暴走族のエスノグラフィー：モードの叛乱と文化の呪縛』，新曜社。
佐藤郁哉　1992,『フィールドワーク：書を持って街へ出よう』，新曜社。
佐藤健二　1995,「ライフヒストリー研究の位相」中野卓・桜井厚編『ライフヒストリーの社会学』，弘文堂，13-41。
佐藤俊樹　2000,『不平等社会日本：さよなら総中流』，中央公論新社。
島根県企画振興部統計課　2000,『県勢要覧　平成12年度版』，島根県統計協会。
竹内洋　1995,『日本のメリトクラシー：構造と心性』，東京大学出版会。
竹内洋　1997,『立身出世主義：近代日本のロマンと欲望』，日本放送出版協会。
竹内洋　1999,『日本の近代12　学歴貴族の栄光と挫折』，中央公論新社。

文献リスト

天野郁夫　1992,『学歴の社会史：教育と日本の近代』，新潮社。

天野郁夫編　1991,『学歴主義の社会史：丹波篠山にみる近代教育と生活世界』，有信堂高文社。

P・ブルデュー，J=C・パスロン　1991,『再生産：教育・社会・文化』，宮島喬訳，藤原書店。Pierre Bourdieu et J-C Passeron, 1970 *La Reproduction: éléments pour une théorie du système d'enseignement*, Les Éditions de Minuit.

Glen H. Elder 1998, "The Life Course and Human Development" in *Handbook of Child Psychology Volume 1: Theoretical Models of Human Development*, Richard M. Lerner ed. Wiley.

G・エルダー　1986,『大恐慌の子どもたち：社会変動と人間発達』，本田時雄ほか訳，明石書店。Glen H. Elder, 1999=1974 *Children of the Great Depression : social change in life experience*, Westview Press.

藤田英典　1990,「社会的・教育的トラッキングの構造」菊池城司編『現代日本の階層構造③　教育と社会移動』，東京大学出版会，127-154。

古厩忠夫　1997,『裏日本：近代日本を問いなおす』，岩波書店。

橋口譲二　2000,『17歳の軌跡』，文藝春秋。

橋口譲二　1998,『17歳』，角川書店（=1988,『17歳の地図』，文藝春秋）。

橋本健二　1999,『現代日本の階級構造：理論・方法・計量分析』，東信堂。

原純輔編　2000,『日本の階層システム１　近代化と社会階層』，東京大学出版会。

原純輔・盛山和夫　1999,『社会階層：豊かさの中の不平等』，東京大学出版会。

樋田大二郎・耳塚寛明・岩木秀夫・苅谷剛彦編著　2000,『高校生文化と進路形成の変容』，学事出版。

宝月誠・中野正大編　1997,『シカゴ社会学の研究：初期モノグラフを読む』，恒星社厚生閣。

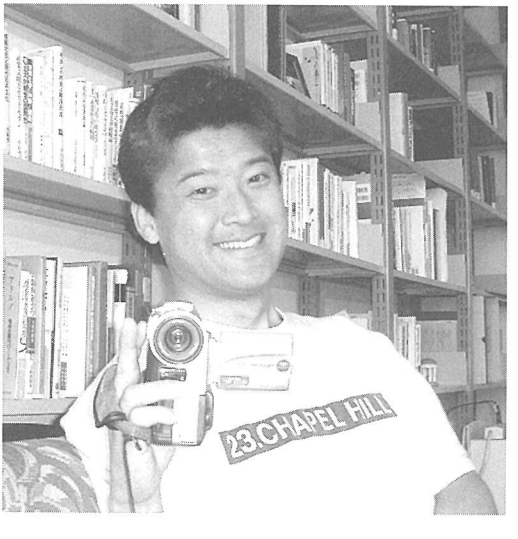
鹿又伸夫　2001,『機会と結果の不平等：世代間移動と所得・資産格差』，ミネルヴァ書房。

苅谷剛彦　1995,『大衆教育社会のゆくえ：学歴主義と平等神話の戦後史』，

著者紹介

吉川　徹（きっかわ　とおる）

1966年，島根県松江市生まれ。島根県立松江南高校卒業。
大阪大学人間科学部卒業後，同大学院博士課程修了。
大阪大学人間科学部助手，静岡大学人文学部助教授などを経て，
現在，大阪大学大学院人間科学研究科准教授，博士（人間科学）。
専門分野は社会学。
著書に，『学歴と格差・不平等』2006年，東京大学出版会，
『学歴分断社会』2009年，筑摩書房などがある。



学歴社会のローカル・トラック——地方からの大学進学

2001年9月10日　第1刷発行
2013年9月10日　第4刷発行

定価はカバーに
表示しています

著者　吉川　徹（きっかわ　とおる）

発行者　髙島照子

世界思想社

京都市左京区岩倉南桑原町56　〒606-0031
電話 075(721)6506
振替 01000-6-2908
http://sekaishisosha.co.jp/

©2001　T. KIKKAWA　Printed in Japan
（印刷・製本 太洋社）
落丁・乱丁本はお取替えいたします。

JCOPY <（社）出版者著作権管理機構 委託出版物>

本書の無断複写は著作権法上での例外を除き禁じられています。複写される場合は，そのつど事前に，（社）出版者著作権管理機構（電話 03-3513-6969，FAX 03-3513-6979，e-mail: info@jcopy.or.jp）の許諾を得てください。

ISBN978-4-7907-0895-7

『世界思想ゼミナール』について

自然は、人間のために存するのではない。また、人間が自然にさからうことは許されない。自然は人間には関わりなく、動いているのである。この単純なことを、環境に慣れすぎてみおとしてしまったり、厳しい人間の世界の止むを得ないかも知れない必要性から、自然をみる目が狂ってしまって、恰も、人力で自然をかえうるがごとき錯覚をもったりするところに、人間の破局が訪れてくる。それは、精神的とか物質的とか問わずにやってくるのである。

「世界思想ゼミナール」は、人間が本来の姿にかえることを、眼目においている。つまり、人間という生物を中心とする生態系のそれぞれの系に相当するところの、政治・経済・社会・文化・科学などについて、深く思索し、さらに問いたずねて、その上で、自然と調和し、均衡をもった人間の世界を作りあげてゆくところの、いとなみの一助であることを切望している。このことが、はじめて「世界思想」の名にそむかぬユニークなゼミナールを可能にすると信ずる。

9784790708957

ISBN978-4-7907-0895-7
C3336　¥2000E

1923336020001

定価 本体2,000円 ＋税